させ顔に匂うて、てもさつても困つたことかな。

評　初句は稍々晦澁だが、梅の落花に對する刹那の愛着感を遺憾なく歌つて詩趣豊かなる佳咏である。きなきだに落花の惜しまれてならぬ作者が、勉めて平靜を保たうとしてゐるそのこと已に詩歌の三昧に入つて居る。ところがその無意識を中斷してプンと薫つて來る。とハツと意識がさめる。さめるとあゝホンにかうして今年の花もあとかたなく散つてしまふのだナアと思はざらんと努めても亦得べからずといつた歌で、吾人の實感に訴へても相當共鳴し得ると思ふまるでその匂ひは作者の心に惜春の控へ綱のやうにきいてゐる。それを「うたて」といつたのは又表現し得て極めて妙である。それは丁度母のない兒が他の添へ乳の母を見せつけられたやうに、朝から一飯にもありつかぬ乞食が夕方一ぜん飯屋の前を通つて、鰻の蒲燒の香をかゞせられたやうに、悲しさをいやが上にも悲しがれとて悲しませる控へ綱である

さて前のは梅が香を袖にとゞめて春を忍ばうといひ、此は梅が香が意地わるく匂うて折角梅を忘れようとしてゐる我に生憎だといひ趣向とりぐ〳〵にして、歌興も亦それ〳〵面白いものがある。

題しらず　よみびとしらず

四八　ちりぬともかをだに殘せ梅の花戀しき時の思出にせむ

考　詞書　元「不知題」
五句　元、おもひいでにせむ」

類　ちりぬとも　散つてしまつても、或は「とも」に重きをおいて散つてしまはうとも、としても聞える。香だに　せめて匂だけなりと。おもひ出　思ひ出草、思ひ出の種。

類　（おゝ我が愛する）梅の花よ、たとひ散つてしまつても、せめて香だけなりと遺してくれよ。さすればこの後お前が戀しくてならぬ時にはせめてそれをなりと思ひ出の種としようぞ。

評　着想大體四六と同じく、ちり方の梅に對する愛着を歌つて一通りは整つて居るし「香をだにのこせ」といつた實感も宜しいが、「戀しき時の」がたるんだ想である「また咲くまでの」とか「來む春までの」とか、何にしても梅が散つてこの次ぎ咲くまでは始終に思ひ詰め戀ひ詰めしてゐることを表すべきだのに「ひよつと戀しい時があつたら」「去るもの日々に疎しでどうせお前のことを忘れてしまうだらうが、それでもマア思ひ出すことがあつたら」と樣にもとられて熱意が充分出てゐない。まるで今訣れようとする人に「せめて住所なと書きつけておいて下さい。ひよつと旅行序に御邪魔するかもしれませんから」といふやうな輕いものになつてしまふ。

さて以上梅花に對する古今集歌人の着想を通覽すると多くはその香をめでたもので、たまさか色をめでるものは白梅と月とに譬へたり、折られぬ水といつたり、さなくば色香と單に並べていつたりした少數の咏があるだけで、此に雪を配合したもの數首を加へても香を歌つたものの方が遙かに多い。爾來勅撰諸集の梅は大抵はこの範疇を脱せない。然るに近頃の梅の歌は香を全く歌はない譯ではないが、大抵は花の姿態や周圍との配合を歌ひ、甚しきに至つては唯その背景だけで詩致を整へたものすらある。蓋し新舊短歌の着想でひどく變つた中の一つであらう。

鶴にのりて薩摩一度濟りませあけがた淸き白梅の花　金子薫園

耳もとに女神さゝやく心地してひと夜あかしぬ梅の花園

神がきに月はのぼりてこまいぬの肩にかしらに梅のかげあり　尾上柴舟

湯のたぎる音ばかりして南の梅さく窓の晝しづかなり　吉植愛劍

二日の日窒に夢見て夢の數落しゝと見る白梅の花

香取の梅を見て

梅の花咲きも咲がずも川舟の潮来の見ゆるこの岡うるほし

人の家に植ゑたりけるさくらの花ときはじめたりけるを見てよめる

つらゆき

一四九　ことしより春しりそむる櫻花ちるといふことはならはざらなん

考　詞書　元「人の家に侍りける櫻の　咲きはじめたりけるを見て」
三句　六帖六　梅「梅の花」
四句　六帖六　元「散るてふことは」
新撰　同。

雜　春しりそむる　始めて咲いたといふこと大仕掛に始めて春を知つたとしたもの。ちるといふこと　「散る」といふに力を入れた云ひ方、「一體さんといふ人は」などいふ口調に同じである。但「米といふもの」「土大根といふもの」などは、作者の生活境遇がその物とは多分の距離があることを示して前とは別の用法である。ならはざらなん　「他の花に見習はないでゐてほしい」と謂つても落想は同じだが、こゝの心持は始めて咲いた櫻に向つて懇囑するのだから、散るといふことは覺えないでゐてほしいといふ方が適切である。「なん」は希望助辭「なむ」の臺音便。

評　或知人の家に植ゑた櫻が今年の春から咲き始めたのを見て詠んだもの。今年始めて春を知つた汝櫻よ、どうかいつ〳〵までも咲いてゐて、散るといふことなぞ覺えないでゐてほしいものだ。

評　櫻の前途を祝ひ、併せてこの家のあるじをも祝福したなどとるも惡くはないが、作意は主として「初咲の櫻」を詠まうといふのに力がこもつてをる。「ちるといふこと」と字餘りで重くしたのは愛惜の切なるものを表してゐるのだから、別本のやうに「ちるてふことは」としては洒々として輕く浮いてしまふ。又六帖に「梅の花」としてあるが、梅は凋みおちをすれ、櫻のやうに翩々たる落葩を見ないから、咏み口の上から觀て櫻とあるべきだ。その上撰者の排列から見ても若し梅の咲き初めなら當然三二番に廻すべきものだ。姿素直で例のこま〳〵しい技巧の見えない點が宜い。この歌語後に襲がれて應和三年三月三日御前の櫻のさきはじめたるを御覽じ「ことしより春しりそむる」といふ御題で歌をめされ、帝（村上）御親からは

咲きそむるところからにぞさくら花あだにちるてふ名をたつなゆめ（新千載春上　六）

と遊ばされた。その御着想もこの歌をひいてゐる。

以下この卷の終りまで咲いた櫻の歌、次の春下の始めは散り方の櫻の歌を類集してある。

題しらず　よみびとしらず

一五〇　山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ
又は里遠み人もすさめぬ山ざくら

考　詞書　猿丸大夫集「山寺にまかりけるに櫻の咲きたるを見て詠める」（一本「山寺」を「山里」）
初句　元・筋「里遠み」
四句　清・顯「物ゝ思ひそ」
左註　元「やま高みひともするめぬとも」

雜　山たかみ　山が高いものだから。すさめぬ　もてはやさない。「すさむ」は愛し興じ珍重する心、それが轉じて「すさぶ」と

いふのも遊び樂しむ意、この語の用例は本集八九二にあるが、猶顯註に左の通りあげてある。

……又拾遺歌云

生ふれども駒もすさめぬあやめ草かりにも人の來ぬがわびしさ

此等の歌の心は、馬のくはぬをすさめずと云なり。柳此拾遺歌は躬恒が詠也。後拾遺夏部に惠慶が歌に

香をとめて訪ふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりける

と咏めるを經信卿の難後拾遺に「あやめをば馬すさめずとはよむらんや」とあり　躬恒歌をおぼえられざりけるにや古歌を不考して無二左右一難ずることは憚あるべき事也。（この拾遺の「すさめぬ」も「もてはやさない」と解けば宜しからう。さてもてはやさないから食はないといふ譯である）いたくなわびそ　ひどくしょげなょと勵ました詞「いたくわびること勿れ」と同じで、「わぶる」は淋しがつたり、難儀がつたり、辛氣がつたり、今の語の悲觀したりするやうな時に使ふ語。はやさん　榮えさせん。卽ち賞翫しようの意。

義　山が高いので人も一向にもてはやさない櫻よ。なにもひどくしょげるには當るまいぞ、この我が賞翫しようから

評　朱雀大路の櫻なら往き來の人にもてはやされて花としては此上なく咲き榮えがしようにと、惜しいことには深山の櫻、誰一人もてはやさないで闇から闇へ散つて行くあゝ不憐といつたやうな櫻花愛、これは恐らく山家住まひの作者の愛憐であらう。歌詞に異同があるが、「山が高いので」といふ方は我々の實感には遠い。今日我々は四山の花に見惚れるには多く高嶺に群れて咲く櫻の遠景の美と群衆の美とにあるのだから、山の高いことは寧ろこの種の賞翫にふさはしいものである。「里が遠いので」といふとその櫻の位置野であらうと谷であらうと、溪流潺湲の岸であらうと、深山幽谷であらうと、人の目離れたひつそりとした境を想はせるから　理趣に墮ちるが今日の感じでいはばこの方がいくらかよくはないか？　が併しあまり大した違ひでもない。想は作者の趣味の細かな點が見えてよろしい。伊勢が山里の櫻に致へた六八、素性が大和撫子を惑んだ二四四と趣味に於て一脈相通ずるものがある。

五一　山櫻わが見にくれば春霞嶺にも尾にもたちかくしつゝ

考　四句　古典本「峰にも丘にも」

新撰　同。

語　山櫻　山に咲いた櫻のこと、今いふ櫻の一種としての山櫻。嶺　峯とも岑とも書く、山の項、精密にいふと山の項の尖つたところ。尾　もとは丘峰　丘峽など宛ててこれも山の項を指していつたもの、古事記下卷「はつせの山のお袁にはは たはりたて、さな袁にはは たはりたて」などがそれで、今も處によつては山の絶項を「を」といひ「をう」ともいふ　けれども後世は「尾」を以て峯より麓にかけてのなぞへを總稱し、若くは山裾の線の鳥獸の尾を曳いたやうなのをいふ。こゝも「嶺にも尾にも」と嶺と對稱したいひ方だから麓と解いて通つて居る。たちかくし　「たち」は接頭語ではなく、動詞で春霞がたつこと。

譯　山の櫻をわが見に來ると、春霞が一面に峯にも尾にも立ちわたつて「祕藏の櫻だめつたには見せられぬ」といはぬばかりに隱してゐる。

評　「山櫻」といつて花の人里遠くにあることを含め「我が見にくれば」といつて、わざ〳〵ふりはえて出かけたことを示しこの櫻見に熱心な心から、無心の霞を色眼鏡で見て「あまり大事の花だから」と樣に隱してゐると擬人したところ語句の聯接巧を求めずして巧至つたものだ。「生憎と霞がかゝつてよく見えない」と解くのは例の字面に拘はつた解きやうで、春霞はいくら濃くたなびいてもその山まで見にいつた人の視線を妨げる程のものではない。結句一種の趣をそへて面白い位のものである。で、こゝも事實の作意はその櫻を心ゆくまで打眺めつゝたま〳〵春靄のおぼろにたなびく景に打興じての趣向を思ひついたものであらう。題材の餘情自づから春興の鬱旺を想はせて妙。

そめどののきさきのおまへに、花がめに櫻の花をさゝせたまへるをみてよめる

さきのおほきおほいまうちぎみ

五二　年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をしみれば物思ひもなし

考　詞書・作者　元「染殿の后の御前に、瓶にさける櫻花を見て、前おいまふちきみ」

清「……させるかみてよめる」

古典本は作者の名の下に（藤原ノ良房）

頓は作者名の右肩に、忠仁公攝政太政大臣。

三句　清「しか。あれと」

枕草子「清涼殿の艮の隅」・大鏡「太政大臣良房」・新撰　同。

釋　そめどの　染殿、拾芥抄に「正親町北・忠仁公家」とあつて忠仁公は良房の諡號。染殿のきさい　とは良房女、文德天皇の御后、清和天皇の御母后明子（あきらけいこ）ないふ　御母（良房の夫人）は嵯峨天皇の皇女潔姫と申し、天安元年十一月中宮、貞觀六年正月七日皇太后、元慶六年正月七日皇太后。御入内後も始終御實家の染殿の邸においでになつたので染殿の后と申す。花がめ　花を活ける花器のこと、當時はまだ挿花の法式が定まつてなかつたから、唯花の枝を投げざしにしたものである。さきのおほきおほいまうちぎみ　前太政大臣藤原良房のこと、但こゝの「前」とは「前官」の意ではない。後にこの官になつた照宣公基經と區別する爲めの稱呼である。良房は左大臣冬嗣の次男世に白川の大臣とも染殿の大臣ともいひ、その女明子のゝ内、繁榮によつて累進して太政大臣に任じ攝政ともなり、北の藤原氏の榮える濫觴となつた。大鏡などに委しい。年ふれば　多くの年を經過すると。よはひ　齡、年齡といふこと、生きてゐる生物のとつた年。しかはあれど　さはさりながら。花　花瓶の櫻を明子の君に暗喩したもの。し　强意。物思ひ　心配・屈托

評　染殿の后の御前に櫻を花瓶にお挿しになつてゐるのを見てよんだもの、多くの年を經たので、私はひどく年齡をとつて老衰した。だが併し、今日かうして花瓶に美しく花を挿されてあるのを見、又この花のやうに花やかに時めいてゐられる御身を見ると、何の心配もなく誠に滿足に思ひますぞよ。

評　年ふれば　齡は老いぬ

しかはあれど　物思ひもなし

花をし見れば

と句をおいて見ると、一二は四五と相對し三の喫子によつて前の失意を後の得意に轉換したもので、構想は求めずして明快に出來て居る。けれどもこの歌は、修辭の側に於ては技巧の褒むべきものはない。年を經れば年齡が老いるのは當然であるし、「されば」とて三音で事足る處を「しかれど」としまだお負けに「は」を足して六音にも延ばしたので、元來は「老いぬれど」の一句に縮約すべきをながぐ〳〵と上の句十八音に延ばし、冗漫極まつた咏み口である。けれどもかうながぐ〳〵と自足の感を述べ立てる音調そのものおのづとのんびりして、如何にも老人の滿足した口吻となり、悠々和暢の趣を含んでゐるのが宜しい。大鏡に

この殿ぞ、藤氏のはじめて太政大臣攝政し給ふ。めでたき御ありさまなり。和歌もあそばしけるにこそ。古今にもあまた侍るめるは。「前のおほいまうちきみ」とは、この御事なり。多かる中にも、いかに、御心ゆきてめでたくおぼえあそばしけむと推しはからる。御むすめ染殿の后の御前に、櫻の花がめにさゝれたるを御らむじて、かくよませ給へるゝぞ。

年ふれば云々

后、花にたとへ申させ給へるにこそ

はこの歌を解して略々正しいものである。

一條天皇の正暦五年三月といへば關白道隆の得意の絶頂とも謂ふべく、その女定子は中宮としてときめかせられその

男は伊周隆家以下それ〴〵顯官に登り自からは關白として廟堂一切を後見てをつた。枕草子二十段（金子氏評釋本の段）にある。

勾欄のもとに、二き瓶の大きやかなるすゑて、櫻のいみじく面白き枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひろつかた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾のいとあざやかなるを出して、參り給へり。

から始まつて、伊周と中宮の對座、天皇の御出で、女房に仰せて歌の暗誦と、物思ひなげなる御遊びの折柄清少納言はこの良房の歌の四句を一寸かへて「君をし見れば」として叡感に與かつたとあるのはさもあるべきことで、まるでこの歌そつくりの境遇でもあり、春日和でもあり、櫻の花瓶までも一致して居る。

尙又この歌は當時の政治史觀の立場から眺めて殊に興多いものである。抑々藤原氏代々の慣用政策上男を產むを重んぜず女を產むを悅んだのは、已れ拱手して外戚の權を縱にしようといふにある。產みの兒が女子ときいては悅び、長じて容貌よく髮長ければ更に悅び、入りて女御となり中后となれば更に悅び、君寵淺からずして御子をあげれば更に〳〵悅び、その御子皇男子にして而かも立坊の御沙汰あるに至つて愈々悅びの絕頂に達するわけで、その時我が理想實現の歡喜をほにいでて歌つたもの之を前にしては、良房のこの歌あり、之を後にしては道長の「この世をば我世とぞ思ふ」の咏懷ありと見れば、この一首にこもる作者の滿悅略察すべきである。之を想うてこの歌を朗誦すると幸福に醉うた良房が、人の花と花の花とに眼を細くして悅に入つた姿がマザ〳〵と想ひ浮べられて言々句々春風春波をゆるがすやうな趣がある。

なぎさの院にて櫻をみてよめる

五三　よの中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

在原業平朝臣

考　詞書・作者　元「渚の院にて櫻花を見て業平。」
二句　六條宮眞字伊勢物語「不斷」
三句　元、勢語七九、土佐日記「咲かさらば」
新撰・九品上下・金・卅六　同。

評　なぎさの院　攝津國交野郡渚院、櫻と鷹狩とで有名、櫻はこの後も又や見む交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙

といふがあり、それを本として太平記卷五俊基關東下りの道行に「落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩」とある。又この附近は一帶に小さい丘陵が起伏し天の河が流れてその兩岸や附近に木立もあり旁々狩にも好適の地として、平安貴族の遊意をそそつたものである。よの中に　こゝは唯この世にといふこと　その他この頃に「よの中」といふは多くは「男女の中」（異性と交渉ある世界の意）に使ふ。たえて　全く、まるきりの意、之を「絕えで」と濁つたものは、櫻のないといふことが常住不斷であつたならばといふに當つて、始終に櫻を思つてゐる情が一層強く表れることになるといふのだが通說でもないし、又さうとつては、ひどく持つて廻つた歌ひ方になつて面白くない。なかりせば　無かつたならば。春の心　春に於ける人々の心持。のどけからまし　のどけからむ、のどかにあらう。「のどか」は長閑など宛てて、和暢の感（ゆつくりのんびりした心地）をいふ。

評　若もこの世の中に櫻といふものが、てんで無かつたならば、人々はこの春をのどかに暮らすことが出來ようのにあの櫻があるばつかりに、靜心なく暮らさねばならぬ。

評　「さても憎むべき櫻よ」なぞとつては大違ひで、作者は而かく櫻の熱愛者であるといふのが、一首の餘情である

當が出來るとは指節折つて滿開の日を計へ、いよ〳〵咲けば、雨とて風とて霞とて、色々に心を痛まし、散り方となれば猶更名殘を惜しむなど、春の日の大部分を櫻中心の物思ひに過すといふのが雅人の雅懷で思ひあまつては、つひこんな愚痴も謂ひたくなると謂つた表現、いつもながら多感なる作者の高調せる感激がよく表れて居る。人によつては此に寓意があるといふので、櫻は二條后を暗喩したものだといも（富士谷御杖）否櫻は惟喬親王を譬へたものだともいふ（富樫廣蔭・金子氏）二條の后は少し飛び離れて居るが、惟喬親王といふのは仔細に考へた說だと想ふ。けれども自分は矢張單なる櫻の歌と解きたい。伊勢物語には

昔惟喬の親王と甲すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ所にありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなんおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名わすれにけり。狩は懇にもせで、酒を飲みつゝやまと歌にかゝりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木のもとにおり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる

世の中に絶えて櫻のさかざらばはるのこゝろはのどけからまし

また人

ちればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木のもとは立ちてかへるに、日暮になりぬ。

とあつて右馬頭の歌よりもその次の下の句「うき世に何か」といつた咏みには、如何にも感慨めいて居るとは思はれるが、「うつせみの世にも似たるか」など佛教的無常觀を咏懷にすることは當時の歌人の常套手段であるし、こゝの寓意を肯定すると、次々「大原やをしほの山」「あかなくにまだきも月」「名にし負はゞいざことゝはん」などの寓意說をも認めねばならぬやうになる。その上業平が惟喬親王と親交があつたことは事實としても他の一面當時の權臣藤原基經にとり入つて、頽德的な讃歌を捧げてゐるのを觀ると、彼は政治的節操感に乏しかつたとよりも寧ろひたぶるに多感の詩人型であつて、感情の逆發するところ相手の誰彼を問はず吝嗇咏歎を歌つたものと解する方が至當ではあるまいか。

題しらず

五四　いしばしるたきなくもがな櫻花たをりてもこんみぬ人のため　よみびとしらず

考　位置　元永本は次の素性の歌をこゝにおいて、前後させて居る。着想から見てはその方がよろしい。素性のは「手ごとに折つて歸らう」といふ歌で、こゝでは「さて折らうとしたが石ばしる瀧があつて折られない」といふのである。けれども、この歌の詞書を「題しらず」として下に何も書いてないから、他の例を推せば此も前と同人即ち素性が咏んだことになるのだが、それにも拘らずその次の「見わたせば」の作者に復「素性」とあるから此點は如何かと傾かれる。

詞書　清・頭「在猿丸集詞云花みにまかりけるに山かはのいしに花はなのせかれたるをみて」（この句現傳の集にはない）

初句　古典本・六帖六、さくら「岩走る」清「いはゝしる」

二句　頓「たきなくも哉」

四句　元・六帖六・猿丸集・家持集「折りてもてこむ」清「たをりてもこん」

考　いしばしる　石の上を馳せてゐるといふ意、瀧の枕詞だが、こゝでは尙實際の景色と見られる、（かうした場合有心の序といふに對して有心の枕詞といふ詞もほしいと思ふ）萬葉の一、一五にもあつて石走とあつてもいはばしるとよむ方が正しからうと契沖もいつて居る。たき　瀧とも瀑とも書く、水のたぎちて流れてゐる處をいふ。「たき」は元來が行四段第二活の連用形が名詞に轉じたもの、當時は今日のやうに懸崖絕壁から落下せずとも激流ならば瀧といつた（吉野の瀧など）けれどもその激流を造る爲めにはどうしても傾斜が急ではなくてはならぬのだから、結局今日のやうに垂直線に近い流下を瀧といふやうになつた。餘計のことだが英語の

"Cascad" も拉丁語系の語で原義は落下 "Break dow" の意だといふ。この點我が瀧の語源に近い。なくもがな　無ければよいが
といふのだから「がな」を「哉」とするのはいけない。ふたりても　手折つて「も」は咏歎助辭。みぬ人　こゝへ來て見ない人。

講 岩走つて居るあの瀧がなければ宜いと思ふ、さすればアノ向ふに咲いて居る櫻を一枝手折つて、こゝへ來て見ない人の家づとに持つて歸らうのに……。

評 花見の家苞に枝を手折つて歸らうといふ優情は古來多くの歌があるが、こゝは言外に激流滔々に配するに櫻花の爛漫を以てした好景を含めてゐる點が面白い。作者自身は終日の探勝に相當に見ての歸るさなのだが、激流泡を吐いて急轉直下する向ふ岸に危つかしく根ざしを古めて、咲きも殘らず、散りも初めぬ櫻のふさ〳〵と咲いてゐるのを見ると、流石に足をとどめてその方に見惚れ「あゝ綺麗——あゝ惜しいもんだなあ、この瀧さへなければ折つて來ようのに」と、やゝしばらく花に見入つて逡巡する姿態をさながらに音調化した點が面白い。猶この解に「瀧と櫻との調和の美が得もいはず美しいが花だけを手折つて持つて歸つては一向につまらない。ああこの瀧がなくて櫻だけだつたら、このまま」この美觀を家苞にしようのに」と樣にあるのは僻說である

山の櫻をみてよめる　　そせい法師

五五　みてのみや人にかたらん櫻花てごとにをりて家づとにせん

考 位置　元、この前のと前後して居ることは前に述べた通り。
詞書・作者　素性法師集「山の櫻を見て。。。」元「山櫻、素性」
三句　世六・元・崇德院御本・敦長卿註・筋「山櫻」
六帖五つと、六帖六さくら、新撰　同。

講 山の「山」といへば此節は比叡山のことを指したものだが、こゝは以下の歌詞に比叡山の個想がないから單に「山」と解く、この詞書では何だか里から山の方を遠望して咏んだと樣に見えるが、歌詞を見るとさうではないのだから宜しく「山の櫻を見て歸るさによめる」などあるべき處だ。見てのみや云々　「や」は反語で見てのみ人に語らむ、唯見てばかり歸つてから人に話してそれで滿足出來ようか、否々そんなことでは滿足出來ない。櫻ばな　こゝを山櫻とすれば下の家づととは一段とよく結合するが、詞書と重寢するから矢張このまゝの方が宜い。手ごとに折りて　手に〳〵折り取つてといふので、暗に花見には連中が自分以外にまだ幾人か同行したことをほのめかして居る。家づと　家へのみやげ「つと」は苞・裹・土產など書いて簡單な贈り物の包みをいふ。今日納豆などを入れる、藁苞の類、都のつと、山づと、濱づとなど用例がある。今の語の手みやげといふに近からう。

講 ナントこの美しい櫻をば見てばかり人に語つて、それで得心出來ようか？　イヤ〳〵そんなことでは滿足されさうもない。サア諸君、手に〳〵折つて「これこの通り」と家への手土產にして皆を驚かさうではないか。

評 「百聞は一見に若かず」とは知識の上でいふことだが、それをこの風流法師が趣味に移したもの、輕快洒脫の氣分字面に溢れ、滿朶の芳苞今方に酣なる美觀も察せられて秀咏である。詞花集二九に

人々あまたぐして櫻の花を手ごとに折りて歸るとてよめる　　源　登　平

櫻花手毎に折りて歸るをば春の行くとや人はみるらむ

とあるのはこの法師の風流を承け繼いでその希望を實行した歌である。（尙素性法師がこの種の着想は三七・三〇九にも見られる）

花ざかりに京を見やりてよめる

五六　見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

考　詞書・作者　元「花のさかりに京を見やりて　素性」

四句　頓「宮こぞ春の」

六帖二　都「みやこは春の」

素性集・新撰・卅六　同

釋　見やりて　目を遣る、目をとめることだが、平安の町を見やるといふのだから、幾らか高い處から瞰おろしたものであらうそこで作者の位置は多分東山のあたりに立つて見たものであらうといふ、大體穩當な想像である。見わたせば　廣くあちこちを見ると。こきまぜて　こきは接頭語、まぜこぜに、此に雑雑と宛てたのもある。又こきは「すごき」の約だといふのもあるが、「すごき」は、しごき「扱き」と同一語系だけれどもこゝにはそんな意味はない。つまり、柳綠花紅の參差たる有樣である。契沖はこの語の用例として

みゆきふる春日の野邊の櫻花えこそみわかれこきまぜにして

といふをあげ、これは亭子院歌合にたものだといつたが、今日の續國歌大觀本や群書類從本の右歌合にはこの歌は出てゐない。けれども、用例としては適當である。（雪と花とを打混ぜにしてといふのだ）みやこそ　の「ぞ」は強く指定した助辭で通常「錦」といふは「山里」の「秋」だのに、今見れば「都ぞ」秋ならぬ「春」に錦の美觀を呈して居るとの心。春の錦　陽春の王城を暗喩したもの。ける　咏歎の助動詞。

釋　こゝからすつと京のまち〳〵を見渡して見ると柳の綠と櫻の白とがこきまぜになつて、まるで一幅錦繡の美を呈して居る。世間では通常紅葉の美觀をば山里の秋の錦といふけれども　今却つて都こそは春の錦といふものだ、さて〳〵美しい眺望かな。

評　柳の綠櫻の白も町から町へ歩いてゐては普通一本並の街路樹たるに過ぎないが　之を遠景にすると、何等ゴツゴツした角なしに混融一帶の畫圖となる。嘗て劉後村が鶯梭の詩といふのを見ると、

擲レ柳遷レ喬甚有レ情。交々時作二弄レ機聲一。

洛陽三月春如レ錦。多少工夫織得成。

とある。それを拙譯して

柳櫻の枝移り、梭なす聲も聞らかに、

得ならぬたくみ織りなせる、都は春の綾錦。

としたことがあるが、この轉句の心持が丁度こゝの歌と似て居る。四方の山邊は霞の羅を張り、朱雀大路のあたり陽炎たつて千條の弱柳習々たる軟風にそよげば、萬朶の芳薫白爛漫としてこれが地となり、春姫が巧を求めずして巧極まる錦繡の美、そをとみかうみして、勝地一錢を費やすの要なしとして、徘徊し、停立し、顧望し、悅喜する作者素性の姿、正に是れ無上の好春興詩である。

櫻の花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる　きのとものり

五七　色もかもおなじ昔にさくらめど年ふるひとぞあらたまりける

考　詞書　友則集「櫻の花のもとにて年の老ひぬることを思ひて」

元「なげきて」の下なし。

作者　元「友則」

二句　六帖六　さくら「むかしながらに」

清「おなしむかしに」

釋　色もかも　櫻の花の色も花の香もといつて、その他一切を代表させたもの。おなじ昔に　同じく昔の如くにといふ意、最後の「に」は「如す」の語系。さくらめど　咲くであらうけれども、この語に「櫻」を秀句にしてあるといふ解は不都合である。櫻のことは已に詞書にあかしてある。年ふるひとぞ　多くの年をとつた人こそは、「年ふる」は唯年をとるといふことであり、事實一年を經れば一年老いて行くことは皆人一樣な譯だが、前の良房の「年ふれば」と同樣多くの年をとつたと解きたい。年經る人に「年古人」の秀句があるともとれないことはないが、さうすると何となくこせ〳〵した歌になつて面白くないから、これも單なる年經る人とするそして詞書によるとその年をとつたのは作者自身であるから「人」を「我」とかへても同じである。あらたまりぬる　昔とは變つてひどく老いた。

釋　今見るこの櫻は色も香もその他凡べて在りし昔さながらに咲いては居るけれども、それを見る自分は多くの年をとつてひどく老いぼれてしまつたなあ。

評　二八の着想と同じである。上の句昔さながらの櫻をあげ、下の句昔さながらならぬ我をあげて自然の恒久不變なると人事の無常迅速なるとを對照したものである。併しこの題材は極めて局部の題材を擧げて、實は大きな人生哲學を歌つた詩である。櫻があつてその下に作者が立つて居る。といふのが當の場面である。そして櫻について變らない點を色も香もと二箇處あげたものだが、その「も」のたゝまつて居る音調には嫩芽も、枝も幹も皮も根ざしも、その他この櫻のあらゆる部分も昔さながらであることを想はせる。が更に一歩を進めると、恒久不變なるものひとりこの梅のみに止まらず、吉野の櫻も、志賀の櫻も、雲林院の櫻も、北山の櫻も同樣であり、啻に櫻のみならず梅も桃も李も、否啻に梅櫻桃李のみならず、爾餘一切の木も草も風も月も星も、凡そ自然の風物一としてその生命の悠久不變ならざるなしである。下の句も亦さうした擴張が出來て、一個友則の宿命はやがて、凡ての人々の共に受難を餘儀なくさるゝ宿命である

となる　唯この歌は對照があざやかで表現の明瞭なのはよろしいが、其の爲め詩情露骨となり、餘韻の掬すべきものがない。それに一首の力點寧ろ下の句にあつて「見櫻多レ所レ思」とでも謂つた風の述懷の歌でこの集ならば寧ろ雜歌に入るべきである。

折れる櫻をよめる

五八　たれしかもとめて折りつる春霞立かくすらん山のさくらを　つらゆき

考　詞書　元「よめる」の三字なし。

六帖六　山ざくら　同。

釋　たれしかも　誰がまあ、誰で疑問の意はあるが猶「か」といふ疑問助詞をおいたもの「し」は強意「も」は咏歎、こんな風に一音々々品詞がちがつて僅か五音に四品詞含つてゐるから、少々ひねり過ぎた氣味はあるが、この形を選んだ、作意は季吟の抄に定家の僻案抄を引いて、

誰しかもとは誰か也し文字は詞の助なり。誰かとめて折つるといはんとするに文字のすくなければ「たれかも」といふ。猶たられば、「し」をぐして誰しかもといふ。「然」といふ說は僻事也、かるき歌にはかくいたづらなる文字をそふる也「然」の字ならば「誰か然か」とぞいふべきぞ。

といつて居るのは委しいが、徒らなる文字でなくそれ〳〵一つの使命を持つた詞なのである。とめて　求めて、さがして。立ちかくすらむ　「立ち」は接頭語ではなく實動詞である、立つて隱して居ることであらう。

釋　春霞がたなびきわたつてめつたと人には見せない山の櫻をば誰がまあさがして折つたことぞ、よくも折られたものだ。（その手折るにむつかしい櫻をわざ〳〵お贈り下すつたあなたの御好意をくれ〴〵も感謝いたします。）

評　三四五一二の順を工夫した倒置句・春霞の凝人凡て巧緻な修辭ではあるが、實感味に乏しい。詞書では唯「手折つた櫻を咏んだ」とあるだけだがさうとるとます〳〵感じがうすくなる。要するに驚喜のわざとらしい誇張に終つてゐる。

歌たてまつれと仰せられし時によみて奉れる

五九　櫻花ささにけらしも足曳の山のかひよりみゆるしら雲

考　詞書　鄙「時に」の「に」文字なし。

二句　元・嘉・筋・爲・相・六帖六山ざくら・藻・抄・新撰「咲きにけらしな」

評　にけらしも　にけるらしも、「に」は現在完了「ぬ」の二活、「ける」は過去の助動詞「けり」の四活この二つをつゞけた「にける」は從來の文法に所謂大過去である。らし　は根據ある、想像を表す助動詞。もは咏歎助詞、こゝは考にある通り多數は「な」とある。「も」を可としたものは風體抄や俊成だが、金子氏は「な」も咏歎助詞としての效果は「も」と大體同じで而かもあ列音だからこの方が可いと謂はれた。音排列の上から觀てさうでもあり典據的な古原本の多數も「な」であるからこの方を採る。序にアイウエオ各列音の聯想的特質としてはア列音は明快イ列音は悲愁オ列音は壯重などいはれるが、特殊の場合を除けて大して一首の價値の影響はない。けれども各列音の音調的特質は口調上いつも注意を要する。

音調的特質

ア　開口音　高し　流麗
イ　閉口音　鋭し　佶屈
ウ　合口音　鈍し　停滯
エ　半開口音　輕し　優雅
オ　半合口音　重し　晦澁

右は余一個の感じを並べたものだが大體妥當であらうと思ふ。この五列音に「宮商角徵羽」を配置してア列音を宮調の音などいふ向もあるが、これは音律構成上の用語で、一定時間に於ける音波の數によつて高低をわけた名稱だから、今のイタリツク音階で、ドレミファソラシドなどいふに當るもので謂はれのない配置である。が。ともかくこの開口音の多い歌は一般に口調がよいとはよく人のいふことで、後世ではあるが彼の平忠度の秀咏。

ささなみやしがのみやこはあれにしをむかしながらのやまざくらばな

の如き附點の十七までがア列音であるといふことが、この歌が成效の一主要原因だと謂ふ。併しこれとてもあらゆる場合がさうとは限らない。枕草子に中關白道隆が圓融院の御前に古歌の句をとりかへて、

しほのみついつものうらのいつも〳〵君なばふかく頼むはやわが

と申して叡感にあずかつたとあるが、この最後の四音などは誦んでは甚だ佶倔な語調である。花では

さくらばなさきにけらしな

の七ア列音は流麗に整つて居る。足曳の　山の枕詞「あしひきの」と澄んでよめなど書いた書物もあるが、今は普通「あしびきの」と濁つて居る。かひ　峡とあつて、山と山との間、即ちたにあひ、「かひ」は「行き交ひ」の「交ひ」の意で、山と山との裾の行きかひといふから來たものか？　古注に問ともある。國名「甲斐」も四方皆山で山のかひが多いところからつけ〻名だといふ。しら雲　櫻の暗喩、群れて咲く櫻の遠景は事實白雲のやうに見えるが。これを逸早く譬へた點に於てこゝの修辭は歴史的價値があり、尙貫之の歌には珍しく體言止めとなつて居る、この引きしまつた口調もよろしい。

評　オヤ櫻の花が咲いたらしいナ、アレあの遠くの山のかひから常の靄霧とは樣變へた艶な白雲が見えて居る。（さてはいよ〳〵春も本調子になつて來たわい）

評 貫之の叙景歌中出色の一つで、漢學者の荻生徂徠までが「古來櫻を咏める第一等の作」と激賞し、季吟も「滯りもなくさはやかにいひ下したる歌なり」とほめて居る。一首讀下春陽和煦の氣が、さながらに音調の上に表れた氣味のあることと、櫻の群衆の美と遠景の美とを「白雲」の一語によつて、マザ〳〵と表現し得たことと、之を咏んでの餘情に、作者自身が駘蕩たる春風に吹かれながら、のどかな陽光を浴びて鬱旺たる遠山櫻の美にうつとりとして、漫ろに神逝き魂馳するの趣をこめたことと、尙旦つ春の盛りの春らしい詩として不易の享樂を覺えしめるものがあること、……計へてみるとこの歌には大分特筆すべき點がある。同じ歌境を貫之集には、

山のかひたなびきわたる白雲はとほき櫻の見ゆるなりけり

とある。これでは說明に墮するばかりでなく、音調の上に少しも春らしい柔かみも暖みもない。櫻を白雲に譬へた着想はその後長く踏襲せられて而かも何れも相當の効果を收めて居る。

山櫻咲きぬる時はつれよりも峯のしら雲立ちまさりけり　後撰集一一八　よみ人しらず

おなしなべて花のさかりにけり山の端ごとにかゝる白雲　西　行

かつらぎや高間のさくら咲きにけり立田のおくにかゝるしら雲　新古今八七　寂蓮法師

最後にこの詩美は昔も今も變りがない。今日吾々が春に對する情感の上から謂つても學校のグラウンドに雪が解けて、そこ〳〵の土の膚がだん〳〵青みだつて來ると「もうしめたものだ」とは思ふが、まだ何となく物足りない。青畝聯絡船の待合に、室咲きの梅が飾られるやうになつては、もう春は立つて居るとは感ずるが、でも心から「春だナ」とは思はれない。雛の節句の宵祭に、花よりは枝ともいひたい桃を折つて活けた中に一分の紅を見つけても、岩木山の上にほの靑い雲が靉靆しても、燕が來ても、鶯がないても、唯それだけの氣分は受け容れるが、何となく春の斷片といふ感じがする。けれども舊卅一聯隊前の櫻並木は、ポッと薄紅の幕をのべて鷹が丘一體の櫻が四方遊覽の客を惹きつける頃になると「いよ〳〵春も本物になつた」と思ふ。斯てこの界隈の老若男女幾萬の群は、來る春も〳〵同じ櫻を飽きることもなく觀に出かけるのは、つまり斷片（フラグメント）の春に飽かずして、全一（トータル）の春を享樂しようが爲めの趣味の欲望からであるとも謂ひ得る。否な單にこの弘前ばかりではない。苟くも我日本人にして、櫻のない春に遇つたとしたらその張合なさは蓋し意想外であらう。よく洋行した人は、白鷗浮ぶテームス河の美や、北歐の古城にからむ蔦の美や、偖ては南歐伊太利溫藉の山水を土產話にするが、さて我邦の櫻の美は？　と聞くと「イヤこればかりは日本特有だ。何處の國に行つても見られない」といふ。而かく我邦の春の中心生命を爲してゐるのである。だから、少々表現の技巧は拙くとも櫻のかうした趣を歌ひさへすれば或程度までは成功した歌になつて居る。畢竟こは題材そのものの力によるのである。例へば、新古今の

白雲のたなびく山のやまざくら何づれを花と行きて折らまし　京極前關白太政大臣

白雲のたつたの山の八重ざくらいづれを花とわきて折りけむ　道命法師

吉野山はなやさかりに匂ふらむふるさとさらぬ嶺のしら雲　藤原家衡朝臣

寬平御時きさいの宮の歌合のうた

六〇　みよし野の山べにさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

考 詞書　元「寬平の御時后宮の歌あはせに」

友則集「のうた」なし。

二句　元・筋「吉野の山の」

下句・新撰・六帖六山ざくら「白雲とのみあやまたれつゝ」

考 山べ　山邊、山のほとり、雪かとのみぞ「のみ」は「雪かとぞ」を強調したもの、雪かとばかり。

書 吉野の山に櫻が咲いてゐる有樣は、まるで雪が降つたのかとばかり見あやまられることよ。

評 吉野は深山であるから他の山よりも久しく雪が降るから、外ならぬ深山の吉野の花はといつて花を雪にたとへたのは自然の聯想で宜しいことは、衆評の一致してゐる通りである。が、併し雪の譬へは今一つこの山の櫻の木が非常に多いことをも言外に含んで居る。一本や二本の櫻ならばいくら滿開してもこんな歌ひ方は出來ない。後世八田知紀が、

吉野山霞の奥は知られども見ゆる限りは櫻なりけり

と咏んだアノ花卉の豐富と、鎌倉初期の西行が、

吉野山櫻が枝に雪散りて花遲げなる年にもあるかな

と咏んだ春雪いつまでも降り止まぬ深山の寒冷とを一首に咏みこなした趣がある。

類咏には後撰の一一七に

法師にならむの心ありける人大和にまかりて程久しく侍りてのちあひしりて侍りける人のもとより月ごろはいかにぞ花は咲きたりやといひて侍りければ

　　み吉野の吉野の山の櫻花白雲とのみ見えまがひつゝ

といふがあり、後世櫻を雪に譬へたものとしては左記の諸咏がある。

拾遺四一　題しらず　　よみ人しらず

吉野山消えぜぬ雪と見えつるは嶺つゞき咲く櫻なりけり

金葉七二　花をよみ侍りける　　右兵衛督伊通

しら雲と峯には見えてさくら花ちれば麓の雪とこそみれ

遠近の谷間たどりて山櫻のぼりては雲くだりては雪　　俊惠

序に吉野の櫻についての佳什をあげる。

みよし野の花の盛と知りながら猶白くもとあやまたれつゝ　　西行

吉野山去年のしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん　　安原貞室

これは〳〵とばかり花の吉野山　雲を吞で花を吐くなるよしの山　　蕉村

やよひにうるふ月の有ける年よみける

六一　櫻花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

考 位置　顯元・六帖三、三月うるふづきありける時によめる。

清「やよひ。うるふ月……」

詞書　伊勢集「彌生の二つある年」

三句　清「ことしたに」顯「ことしたに」

五句　俊頼朝臣家本（顯）題咏集「あかれやはする」俊惠法師も同説、定家反對顯照も季吟も反對。

六帖一うるふ月　六帖六さくら　同。

釋 やよひ　彌生（いやおひ）の約草木の芽ぐみ生える意から、陰暦三月の異名になつた。うるふ　潤年のこと、陰暦では潤年には一ヶ月增して正月潤二月潤などいふが、この場合は三月潤で、一度通常の三月を暮らして復潤の三月を暮らすこと（太陽暦の潤は二月に一日を增すことや正潤の出來る道理や、潤年循環の暦法などは暦學や數學に委しく說いてある筈だから省く）春くはゝれる年　潤年といふ

ことを工夫して作つた歌詞。だにも　だけなりとまあ。あかれやはせぬ　「や」は疑問、「は」は強意の咏歎、飽かれはせぬぞいやいといつた程の氣味。

譯　オイ櫻の花よ。せめて潤年で春の長びくことしだけなりと人々に愛想をつかされれば可いものを、ナゼにお前は人から飽かれないのかマア。

評　作者の櫻に對する強い執着を女らしく捻つて表現してある。本文に異同があり、解釋も句々になつて居るが、鄙言の

コリヤさくら花よ。ことしのやうな春の一月くはけつて、永い年なりとも、見る人の心に、なぜたんのうするほど、盛り久しうは見せぬぞやい。

は誤つた解であらう。附點の部分は、定家がいつた、

これはさきにけらしも、足引のなどやうのさくら花のおきやうにはあらず。此歌は櫻花をよびて。たとへばいらへきたらんにもかひていはむやうにをしへたる詞なれば。かへすがへすも「する」（あかれやはする）とはいふべからず。「あかれやはせぬ」こそかなひて侍れ。今いはくうるふ月のくはゝりて春の久しき年さへなどあかれはせぬあかれよと歎ふるなり。

といふが正しいので季吟も契沖もこれを採つて居る。

又「やは」を反語と解くのも可けない。二句は修辭としては顯昭本のやうに「ことしだに」とした方が、一層よくすわる。つまりこの歌は、追羽子をしてゐる女兒の群の中一人目だつて上手なのがある。それを傍から「ホラ落ちい、モウ落ちると可い」など見てゐる中その兒が石につまづいて、危く外しさうにすると「サアしめた」と思つてるのに又もやうま〳〵受けとめるので一寸やさしい舌打をして「マア憎らしい、あんなのさへ落さないで……」といふ、その趣を櫻に移したのが面白いところだと思ふ。

さくらの花のさかりに久しくとはざりける人のきたりける時によめる

よみ人しらず

六二　あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

考　詞書　元「久しう……人の來りけるに」
清「……よめる」
宮「……時によめる」
勢語一六・謠曲井筒　同。

釋　一　いたづらなること、あだなること、實なきこと。あだ「徒」とあてる。「仇」としては仇敵と紛れる。輕薄とか浮氣とかいふに當る。尤もこの語は外に、
二　脆きこと、かりそめなること。
などにもつかふ「婀娜」と宛てたのは別でなまめきたること、しなやかなることをいふ。名にこそたてれ　評判にこそなつてゐれ、名に立つといふのは、名が噂高くなること。櫻花　こゝでは上にも下にも連繫して居る。
櫻花はあだなりと名にこそたてれ
櫻花は年にまれなる人もまちけり
としにまれなる人　一年の内に訪づれ來ることの至つて少い。「人」は「君」としても聞える。

譯　永らく訪づれのとだえてゐた人が、家の櫻の花ざかりに來た時によんだもの、
櫻の花は直ぐうつろうて、氣の變り易い輕薄物だとの評判こそ高いけれども、一年の内めつたとお出でにならぬあなたをばこれこの通りお待ちして居ります。（さてはあだなのは櫻ではなく、どこそこいらにやつて來たお方らしい）

評　まちけり　「我が御身を待ちつけ得たのは全くこの櫻のお蔭だ」と解いたものは可けない。又契沖はこの歌の作者は男子である。

其故は年ごろ音づれぬ女のもとへは櫻を見にのみは行まじきことわりなり。伊勢物語にも有常に夜のものなどを送れる次にあり。

と謂つたけれども、こゝは金子氏のやうに「かれがちにしてゐた女をばふとしたはづみに訪づれた時、その女あるじが自分の貞操を誇つて咏んだもの」と解くのがよろしからう。而かもその女は源氏の木枯の女のやうに、世のすきものといふ噂をとつて居つたとすれば愈々この歌の意に適合する。伊勢物語十六段には、

昔、年比おとづれざりける人の、櫻のさかりに見に來たりければ、あるじ、

としてこの歌があがつてその前十五段は成程有常の記事だが、その次十七段「なま心ある女」が出て居るから、文の位置からは何とも云へない。前に紀有常の記事があり、業平と有常が親しかつた處から謡曲「井筒」の作者は之を有常の女の咏として趣向を立て、

有常女「かやうに　みしも我なれば、人待つ女ともいはれしなり。我筒井筒の昔より、眞弓槻弓を經て、今は亡き世に業平の、形見の直衣身に觸れて、恥かしや昔男に移舞。

と謂つて居るのは固より無根の想像であらうが、面白く構へてある。さすればこれは一首凡て暗喩で、

私を浮氣者なんて世間で噂されるさうですがこれこの通りちやんとして唯もうあなたお一人のお出でを待つてゐたのですもの、（ちつとはお褒めに與りたいものです。或はあなたもそのつもりで、どうか見棄てないでいつ〳〵までも私を愛して下さい）

といふのが眞意である。

けれども尚熟思するに、この歌が當時果して右様に解せられたものならば、當然戀の部に入れらるべきである。にも拘らず春に並べてある處から察すると、少くとも撰者は之を戀歌とは看做してゐないことは明らかで、さすれば（前提はちがふが）結局契沖のやうに男子の作と解くのが正しからうか？

返し

六三　けふこずばあすは雪とぞ降なましきえずはありとも花とみましや　　なりひらの朝臣

考　四句　元・清・筋「消えずはありと」
六帖六さくら「きえずばありとも」
業平集　同。

評　返し　返歌のこと、萬葉には和歌又は答歌とある。返しの様體につき藤原顯輔の謂つたことが顯昭本に引いてある。

和歌の返しには三様あり。
一には「和」本歌に從ひてともかうもいふなり。たとへば戀しといひたらむには、よもさしも思はじとも、又さ思ふらんこそあはれなれともいふなり。
二には「鸚鵡返」別の詞を添へずして、本歌の詞にてとかくいふなり。鸚鵡といふ鳥は人の口眞似をする也。ひとへに本歌をいはむぞ、そのためしにはなるべけれど、おほやうその詞のとられたれば、鸚鵡返と云なるべし。
三には返歌の體、我心に思事を述べて本歌の意に從はずとぞ先達申せし、云々。

さてこゝの返しは右の第三種に當るもので、近來歌人の咏みがてにする歌體であると様に褒めてもある。雪とぞ降なまし　雪とふりなむ、雪となつて散ることであらう。「散る」を「降る」としたのは上の雪の縁語。見ましや　「まし」は「む」と同じこと、「や」は反語、見えようか、見られない。

譯 この口語譯は鄙言のがよく出來て居るからそのまゝを引く。

今日なれがたづねて來たればこそ、此花を花じやと見るが、ヒヨツトあす來て見たがよい。此花は雪のふるやうに散つてしまふであらふ。それでもまことの雪ではないによつて消えずにはあらうけれども、なんと花と見られふか、花とは見えがいがの。

評 「すればこれはつまり花の手がらではなく花を訪ねた私の手柄といふものです」が餘情で、前を女の繼歌とすれば、

私が今日來たればこそ御身は私の花（愛人）として見られもしますが、もう一寸でも遲く來ようものならあだし塵りに半折られたり、散らされたりして、たとひ御身のからだ一つは無事で居ようとも、もと〳〵通りの御身として逢ふことが出來ようか、到底出來ない。して見ればこれは御身の操とよりは寧ろわたしの實意を悅んで下さるのが至當でありませう。

となる。花を以て言ひかければ花を以て應へ、自慢を以て誇れば又自慢を以て返し前かもよく立意をうらうへに飜すところ實に妙手と謂ふべく、作者がよし業平でないまでも、恐らくは業平と伯仲する程の名人の口つきである。

題しらず　よみびとしらず

六四 ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそ櫻折らば折りてめ

考 詞書・作者　元「不知題　同人」

二句　元「こふれば しるし」

精 ちりぬれば　散つてしまつたならば「ぬれ」は現在完了「ぬ」の五活已然形。しるし　益、驗、詮、などあつて。今日こそ　今日こそはといつて今日といふ日を深く思入つたいひ方。折りてめ　「てめ」は未來完了、折りもしよう。

譯 この櫻は惜しいは惜しいが、もう散り方になつた。もし散つてしまつたならば幾ら惜しんでも、何の益もないだらうに、今日こそは折るんなら折るべき時節が到來したといふものだ。

評 秀咏である。飽くまでも櫻に執する人の、まことに餘儀ない心持が遺憾なくあらはれて居る。櫻は永久に繁榮したいといふが作者の本意なのだが、已に凋落のきざしが見える以上このまゝに放置するなら直ぐにも散らうから、之を手折つて花瓶に生けて……どうせ散るにしても、ちつとでも永く保護を加へて見ようといふ櫻花愛、實にめでたき雅懷である。殊に下の句の云ひ方がうまい。如何にも惜しみ〳〵折らうとする樣子が見えるやうだ。之を人事に移すと、一の谷の合戰に敦盛を討ちとつた熊谷の刄といつた趣である。契沖は「花のあるじが、人に手折ることを許す歌とも見られる」といつたが、自分は矢張花のあるじ自からが、心に問ひ心に答へて、手折らうとするその刹那の切ない割愛感だと見たい。

六五 折りとらばをしげにもあるか櫻花いざやどかりてちる迄は見む

考 詞書　是則集「山里の花を見て」

清頭・猿丸集詞云「山にはなみにまかりて」（現傳の集にはない。前二首と一まとめにして始めに「山里にまかりけるに櫻の咲きたるを見てよめる」とある。）

二句　爲「をしけくもあるか」

三句　猿丸集「惜げにも有を」

四句　清「いさやとかりて」

五句　是則集「散る迄に見む」

精 をしげにもあるか　惜しさうにも思はるゝ哉。折るにしては惜しいもんだなあ。「か」は詠歎、櫻花は上下兩方に繫る。いざ

促進誘起の助辭だが、こゝは我と我心を引き立てた語、やどかりて　この花近い邊りの人家に宿を借りてとる。花を今宵のあるじとしてといふのではない。ちる迄は見む　「は」はちつてしまへば仕方もないが、散らない限りはずつと見てゐようとの強い自己豫定。

語　折り取るには惜しまれてならないなあ。よし、この花近く宿を借りて、花の散る迄はあたり去らずに見めでよう。

評　着想前のと正反對で、前のは折るなら今だといふ。これは折つては可けないといふ。何れも櫻の花に對する嬌激な愛の叫びで、この二首を同一の作者の咏として觀るも面白く、別人の咏を撰者の意匠で排列したと觀ても面白い。「折りとらば云々」は見ただけでは心に飽かないでもう手が出さうな心持を見せた句で、さてムザ〳〵と手折るのは、我ながら「あつたら物を」の感に堪へないで手を引つ込めた氣味である。「いざ宿かりて」以下は必ずしも作者がその通りを實行したと解する必要はない。とつおいつの結果風雅な斷案に到達した心持の表れである。山邊野邊の花か路傍の花か。ともかく家づとに手折りつゝ又愛惜の感をこの様に歌つたものであらう。

六六　櫻色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに　きのありとも

考　三句　元「そめてきよむ」

六帖六さくら　新撰　同。

説　紀有友　古今和歌集目錄によるとその任官次第は、承和一一、二、八、内舍人。仁壽二、五、一、兵衞少尉。貞觀一〇、正、一六、武藏介。元慶元、正、一〇、參河介。同、二、一九、攝津介。同三、正、七、從五位下。同三、八、一七、宮内少輔。そして整四年卒とある。歌は本集一〇二九にもう一首ある。櫻色　櫻の花と同じ色のこと、古註に表白裏赤とか表白裏縹とかあるのは誤の名でこれとは別である。衣は　「は」は他のものはともかくもせめて衣だけはと解いてよろしいが、衣は他のものとは違つて、朝夕身に着けて身近なものだから他と區別していふのである。ちりなむ後　今に散るであらう。すればその後の　かたみに　かたみとして「かたみ」は形見の意で紀念とも、記念とも書く。

語　我愛する櫻の花は今に散るであらう。さすればその記念として、餘のものはともあれ、朝夕身に着ける衣だけたりと、その花の色に染めてせめてもの心やりにしませう。

評　上戸の人が最早空になつた銚子を打ふり〳〵一滴の餘瀝をすら舌なめずつて飲むような態度、それを櫻に移したもので、稍わざとめいては居るが猶惜春の一首として思ひ棄てる譯には行くまい。

さくらの花のさけりけるを見にまうで來たりける人によみておくりける　みつね

六七　わがやどの花見がてらにくる人はちりなむ後ぞ戀しかるべき

考　詞書　清：「…みに…きたり……」

五句　金「くるしかるべき」

六帖六　花・卅六　同。

説　さくらの花　上に「宿の」「家の」などあるべき處。さけりける　後世ならば「さける」とか「ささける」とかある處。まうで　は參出の約で、上つ方へ參上すること（「まかる」の對）から轉じて、一般に行くといふ意に使ふ。來たりける人　この人は恐らくは作者の見知り越の人か、親しい人であらう。彼の白樂天の、

遙見二人家花一便入。不レ論二貴賤與二親疎一。

といつたやうなのは　主人公と作者とに何の拘りもないのだから、この詩句を引合に出すのは失當であらう。わがやど　我家。花見かてら　「がてら」とは事の彼にわたり、此にわたる意の制限助辭で、花見ついで、花見かたん〳〵、花見を兼ねて、などいふに當る。が、字面はさうでも底意は花見が主で、序に訪ふと一首の餘情に匂はせてある。ちりなむ後ぞ　今にこの花が散るであらうその曉には、下に「必ず訪づれもすまじければ」などの意を込めたもの。戀しかるべき　懷しくあるであらう。「べき」は推量の助動詞。その人がやつても來なからうといふ程の意を婉曲にほのめかした句である。

譯　我家の花見かた〳〵來る君は、この花が散つた後にはめつたと御出で下さらないでせうから、その時になつて、私はあなたを戀ひ懷しむことでありませう。

評　王朝歌人の精煉された社交會話としてこの歌の妙味は生きて居る。「どうも御無沙汰いたしました。などいつてやつて來たまらうどが、折から咲きさかる花に見入つて居ると、主人が戲談交りに「一體君は誰の方を向いて挨拶して居るのだ。ナニ御無沙汰つて何も僕が目當ではなからう。……花が主で僕はつけたりといふ、あたじけない譯サハ、、、、」といふそれだけの場面に趣をつけて、どうせ花故のお出でならば、又落花故に御見限りの時節が來るは定のことですから、その頃には嘸御身を戀しがることでせうと、優美に齒に衣着せた歌である。唯それ王朝人の歌として這乎の妙味があるのだが、今時の人にはチト諷刺がお手柔か過ぎる。況んやこれの扮本と想はれる躬恒集の

我庵の花のたよりに訪ふ人は散りなむ後にまこと思はむ

に至つては愈々婉曲になつて益々晦澁に墮する。

六八　みる人もなき山里の櫻花ほかの散なんのちぞさかまし

亭子院歌合の時よめる

伊勢

考　詞書　清「亭子院の歌合の時によめる」
元「亭子院の歌合に」
三句　元「なきおく山の」として左註に「なきやまざとのとも」とある。
伊勢集・六帖六さくら・新撰　同。

補　亭子院　宇多上皇のこと。「ていじのゐん」としたものとがある。位置は拾芥抄に「七條坊門北西洞院西二町」とあり、宇多天皇御退位後一時こゝに御住まひになつたので亭子院と申す。後に朱雀院と申すのも、その院にお居でになつたからで、尙寛平法皇・太上法皇などと申すもこの天皇の御事である。本朝文粹卷八に菅原淳茂の

八月十五夜侍二亭子院一同賦三月影滿二秋池一應二太上法皇製一

と題する文の中に、この御住居を稱へて

洛陽城内有二一離宮一。竹樹泉石如二仙洞一。爾蓋世之所謂亭子院歟。太上法皇雖レ入二三密之道一出二萬乘之家一。猶未レ捨二此地風流一

以助二彼岸寂靜一云々。

の句がある。さてこの亭子院の歌合の御催しは、延喜十三年三月十三日で。題は、初春二〇、季春二〇、夏二〇、戀二〇、計八〇首讀人は御製・兼覽王・伊勢・貫之・躬恒・興風・是則・友則（讀人とは則讀係樣のもの）その樣子はそのはしがきに委しくあがつてゐる。この歌は番外として咏んだものである。處でこの歌合の歌で本集にとられたものは

六八　八九　一三四

の三首で、これは本集撰述以後の攙入であらうことは序の註に推定した通りである。みる人　見はやす人、見めでる人。山里　山近き村里。ほかの　下に「櫻の花の」を入れる。散なん　散るであらう。さかまし　「まし」は希望の助動詞、咲けばよいといふので、

櫻を擬人して好分別を授けたいひ方。

【語】誰も見はやす人もない山里の櫻は、ほかの櫻が今に散るであらう。その後に咲いたが宜い。すれば、人々も珍らしがつて見めでることであらう。

【評】山の櫻・宿の櫻・都大路の櫻・花瓶の櫻と段々咏懐を並べて、この部の止めに山里の櫻に對する憐憫の情を寄せた一首をおいたもので、その着想において五〇番と相似て居るが、策を授けるところに因幡の白兎に對する大國主命のやうな温かさとあどけなさがあつて、この歌の詩趣となつて居る。或はこの一首に作者が數奇の運命に對する述懐があるといふもあるが、宇多天皇の寵を得て以來の伊勢は記錄に表れた所では、順境の兒である。

あすか川淵にもあらぬ我やどもせにかはりゆくものにぞありける

といふ壹宅の述懐も、一首の口調何となく、輕い自嘲らしくて、それが貧乏のやりくりではなく、さる知人から望まれて、我身は別に桂の里に賜はつた宅があるところから讓つたものと推せられる。で、これは單に不遇の花山里の櫻を憫み、これに良策を授けたものと解いて詩趣があると思ふ。

卷第二　春　歌　下

（元、春下　清、春和歌下）

題しらず　　よみ人しらず

六九　春霞たなびく山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく

【考】作者　六帖六さくら「人麿」

【語】たなびく　「た」は接頭語、靡きわたる。た靡く。薄靡（紀）霏靡（萬葉）などもあてる。うつろはんとや　もうやがて散ると見えて、「うつろふ」の原義は「移る」こと即ち變化することで、それが動作になつては鶯の枝うつりなどにもつかつて、

梅が枝になきてうつろふ鶯の羽しろたへにあは雪ぞふる　萬葉

といひ、景色や風物に用ひては木集八〇・一一三のやうに色の褪めることにいふのが正しい使ひ方だが、又轉じては、落花することもさしていつて八五・一二四などに用ひられて居る、こゝも亦この轉義の方で、落花することをいふ。今一つ映ふといふのは影や姿がうつることで、これとは全く別である、「散らんとてか」といふも同じ意、色かはりゆく　霞の色が變るか？　花の色が變るか？　文法上當然これは花の色と解くべきで、「春霞たなびく」は「山」の修飾句たるに過ぎない。けれども之を實景に卽して考へるとつまりは兩方にかゝるもので「霞に包まれた櫻の花の色」と見るべきで花だけでもなく、霞だけでもない。「かはりゆく」とは動的ないひ方で、見るく中に紅褪せてほのに白らけて行く趣をいふ。

【語】春霞のたなびきわたつて居る山の櫻の花は、もう散らうとてか、段々と色がさめて行く——、さてもあわたゞしい花の様かな。

【評】櫻花咲く朝より、立ちつゞつして四方の山邊を見はるかせる人の思ひ入深き叙景歌である。「うつろはんとや」と

驚くためには、前々から遠望してゐなければならない。「春霞たなびく」としたのは唯音調上添へたと見るのは如何であらう。櫻の生命の凋落を柔化し優婉化するためのヴェールと見て、一層趣があるのではあるまいか。もろ〳〵の花の中椿の花のちるのは非常にきはやかにボタリと落ちる。悪くいはゞ斷頭臺の上の斬首のやうに落椿といへば綺麗だが、事實その落ちる姿態は優美とは謂へない。梅の花は又非常に執着性があつてもう萎れて、老婆の白粉のやうな水氣ない花片になつても、まだ枝にすがつてをる。それに比べて櫻の花は極めて淡泊に、サラ〳〵ハラ〳〵と散る。之を目近に見ては輕快鮮麗之を遠景にしては温藉模糊、その遠景美の引きたゝせ役としてこゝに霞がある。するとその趣にまるで紅燈に映えた絹雪洞のやうな美がある　それが昨日よりは今日、今日よりは明日と日毎に紅褪せて行くと、春といふ大自然の彼女が終焉ともいふべき一部凄みを交へた大規模の悽艶夭冶が觀られる。作者は今正しくこの景趣に向つて旦つは驚き旦つは名殘を惜しむ心境を吐いたものである。但四五の句は同趣の語句の併列に墮して、稍平弱に失して居る。こゝを嘗ては「ほのに白めくうつろふらしも」など變へてはと思つたが、まだもつとより美しくより勁い表現の形式がありさうだ。類咏には後撰三春下一一九貫之の

白雲と見えつる物を櫻花けふは散とや色ことになる

ちはやまてといふにちらでしとまるものならばなにを櫻に思ひまさまし

考　詞書　素性集「山の櫻を見て」

作者　元・筋「素性」（するとこれ以下七一・七二・七三・七四も素性の作となる譯である。）

六帖六さくら、同。

釋　まてといふに　散らないで待つてゐよといふのに、この字餘り一首の上に強くどつしりとした趣をつけてをる。新撰萬葉に、ちる花のまてといふことをしらませば、春は行とも戀ざらましを

と類咏がある、初二句の相違もあるが、この方は何となく輕浮の調に墮して面白くない。ちらでしとまる　散らずにサ止まる。「し」は强意。なにを　何物を、櫻以外のどんな花を、花以外のこの世のどんな物を。櫻に思ひまさまし　櫻より優り樣に思ふやうなことをしようか？　決してそんなことはしない。櫻に見かへて櫻より以上だなどと思はうか？　思ひはしない。

評　櫻の花は若も「散らないで待て」といつて素直に散らないで止まつてゐるのだつたらば、吾々は何しに外の花々や事物を以て櫻よりもめでたいなんか思はう。決してそんなことは思ひはせぬ　たゞこの一事（待てといつて待たない一事）を除けば、櫻こそは何物にもまして、めでたい花なのである。（この事があつてすらも此程惜しまれるのだから）

評　契沖のあげた今一つの解に、

まてといふに、ちらでしとまるものならば、何か花を思ふ心のまさらん。散りやすき故にこそ櫻花をおもふ心一しほまされといふ心なり。

とあるのは僻事であることは、契沖自身も謂つた通りである。櫻に對する强い執著を、うまく紆餘してあらはしたもので、

夏の夜や蚊をきずにして五百兩　其角

といつて夏の夜の涼しさをほめるのに蚊さへなかつたら、一刻價千金といはれた春の夜にも、ひけはとらぬものをといつた句振と一寸似て居る。後年定家はこれを本歌にふまへて、

山櫻までともいはゞ散るとてもおもひますべき花しなければ

と咏んだ。これは櫻に對して今一段讓歩したもので「イヤよしや待てといつて待たなくとも、自分は櫻を以て第一等の花としよう」といつた心は、つまりこの歌に一歩を進めて櫻を熱愛したことになるのだが、稍斧鑿のあとが目だつ。

七一　殘なくちるぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ

考　四句　元・筋・祖「あきて世の中」
清「ありてよのなか」
類　ちるぞめでたき　ちるといふその事こそ愛賞すべきことである。「めでたき」は「愛で痛き」ありて　存在して、次の「はて」と祖俟つて、ありくての果て。暮らし暮らいて結局は。うければ　物憂いものだから。つまらない心苦しいものだから。

評　櫻の花といふものはあの名殘なく散るといふことが、愛すべく賞すべきだ。なぜかといふに、この世の中といふものは、暮らし暮らいての、とゞのつまりは悲しい苦しいことに終るから。

評　前のが「散りさへせねば何も批のうちどころがない」といつた歌なのに對してこれは「イヤその散るといふ一點こそは櫻の櫻たる美點なのだ」と警句的に叫んだもので、これも亦歌としての一趣向でこの樣に趣向の相反するものを並べた處に撰者の意匠が窺はれる。但下の句が含む餘情は作者その人老境に入つて而かも逆境に喘いでゐることを含み、これが落想となつた爲めに一首櫻に寄する述懐とも謂ふべく、純粹叙景歌の態は失せて居る。

由來我邦人の櫻を愛する所以は、その滿開の時に芳葩絢爛の美を呈すると共に、その散り際の酒々落々として聊か執着の態なき點が我國民性と相通じてゐるからだと謂はれて居る。一日の榮華を一年に延べ　一年の榮華を十年百年に延べして、よく三百年の基礎を樹てた家康は謂はば榮華の月賦をやつたもので、この點甚だ日本人らしくない英雄であるのに對照して、百年の榮華を十年に縮め、十年の榮華を一年一日に縮めて、金城覇府の榮華を一夜の夢と觀じて逝いた秀吉は、謂はば榮華の即時拂を敢てしたもので、日本人の好む英雄の模型のやうに謂はれて居る。かうした國民的嗜好が會々櫻花の上に投げられると斯のやうな歌になる。類咏には伊勢物語八十一段に馬の頭の「世の中に絶えて櫻の」の次に「また、人の歌」として、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とある。着想略こゝと同じである。狂歌にはこの哥から出發して、尙一脉の未練をよせたものに、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれけれども〳〵さうぢやけれども

とある。

七二　この里にたびねしぬべし櫻花ちりのまがひに家路忘れて

考　四句　元・筋「散るとまがふに」
類　この里に　この村里に、下に「旅寢」とあるから、我が宿のある里ではなく、他の村里殊に櫻の木の多い、山里か野邊近い里である。たびねしぬべし　王朝では一泊以上を凡て旅寢といふ。つまり我家を離れて、他で寢泊りすることをいふ。源氏帚木の卷に「内わたりの旅寢もすさまじかるべし」とあるのは「宮中に宿直してゐる同僚の許でとめて貰ふといふのも殺風景なものだらう」といふので、その程度を旅寢ともいふのである。これを歐米人の半年一年と長途の旅行を續けるのに比べて大した相違である。「しぬべし」は、してしまひさうなと解いても聞えるが、「しようよ」「するがよからうよ」といふ自己豫定の三活終止

サ變二活連用　現在完了三活終止　當爲の轉自己豫定の三活終止
し　ぬ　べし

である。櫻花　これが初句でこの歌を順當句にするには三四五一二となる。ちりのまがひ　散りの紛ひ、散つた紛れに、櫻が散つて家路を取紛れさせることによつて、「ちり」を與とかけて花が散つて花の塵がたつその紛れにともとつてみたが、他にさうした解もなく强ひてあなぐるにも及ばなからう、家路　家に歸るみち、歸り途。

補 櫻の花が散るまぎれに家路を忘れて、いつそのこと、この花ある里に旅の一夜をあかすがよからうぞ。

補 後世ざらに出て來る「花下忘歸」の早いもの面白いもの、白樂天の句「花下忘歸因三美景一」や赤人の春の野に菫摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にけり（萬葉八　春雜謌一四二四）や、六帖花貫之の、

ちる花に家路まどひて此里に我はまれにぞ長居しにける

と相通じたものであるが、六帖のよりは措辭が優麗に出來て居る。

七三　うつせみのよにもにたるか花櫻さくとみしまにかつちりにけり

考　初二句　新萬上「鶯はうべもなくらむ」

三句　頓・元「櫻花」

四句　元「見るまに」

補　うつせみの　「現し身の」の轉、といふのと空蟬又は虛蟬と書いて蟬の脫け殼のことを蟬ははかない蟲だから、はかない蟬の意だともいふ、「世」の枕詞だが語感からいふと唯「世」とのみいふのと「うつせみの世」といふのとは大分ちがつて後の方は、人間の世の儚なさをしみ〴〵思ひ入つて「世」といつたやうに感得せられる。世にもにたるか　「も」と「か」とは咏歎、世にも似たる哉や「か」を「よ」とかへても略々近い。花櫻　櫻花の倒置語で作者がその時の感じで花を上にしたものだといふが、矢張紅濃き櫻の一種といふ解が宜からう。契沖も古歌を引證して委しく論じて居るが、要するに、

一、紅濃き櫻の一種

二、色づいて華やかに咲く櫻、

三、何であらうと櫻の一種

と次第した解說である　「花櫻の花」とつゞけた「うつぼ」の「花ざくらのいとおもしろき花びらに」といふ用例もある、又六帖にかには櫻・花櫻・山櫻と歌を並べたのから推すと花櫻は櫻の一種といひたいし、顯昭考の古歌合にも、かにはざくら・にはざくら・ひざくら・はなざくらと別けて居る點から推して、又同樣に考へられさうだ。さくとみしまに　咲くと見てゐた間にといふのだが、此は下の「かつ」と相俟つて、元永本の現在法「さくとみるまに」の方が優れて居る。かつちりにけり　咲く一方から散つたなあ。「かつ」は且つで、「……とやがて」といつた樣の短時間を示し、一方で云々するその他の一方では云々する、一面に於て云々すると同時に他の一面に於ては云々すると樣の語である。

補　あゝこの花櫻よ咲くと見たのはホンの束の間で、あわたゞしくも散つたことかな。思へばこのはかなさは無常迅速をさがなる婆婆のうき世にも似たるかな。

評　櫻の落花をこんな風に眺めるのは日本の國民性固有の觀照ではなく、佛法的厭世觀の取り容れである。この意味に於て七一番の日本的な着想と好對照を爲して居る。が併し斯うした眼で見るには櫻の花は成程好適の題材である。百日草のさかり久しい花を儆つてはそぐはない。釋尊己にいふ、

諸行無常　是生滅法　生滅々已。寂滅爲樂（涅槃經偈）

と、所謂「色は匂へどちりぬるを、我世誰かつねならむ」の原句であるが、この感を寄せるのには就中櫻の花が一番適當である。下の句殊によく櫻の瞬間性を寫して居る。

早く萬葉卷八、一四五九に久米女郎が原見王に返した歌に、

世の中もつれにしあられば宿にある櫻の花のちれるころかも

とあるが、これは贈歌に對する答歌としてはよく出來て居るが、この歌の題咏として觀ると、諸行無常を大前提にして櫻とてもその運命を免れないで散つたと觀たもので、極めて冷やかな理知の併列に過ぎない。又類咏として六帖六せみ

に伊勢の咏、

咲花は年に替へねど空蟬の世のためしにも散るにざりける

とあるが、これとても語路の佶倔、着想の主副轉倒によつて遙にこゝの咏におとつてをる。

僧正遍昭によみておくりける　これたかのみこ

七四　櫻花ちらばちらなんちらずとて故郷人のきても見なくに

考　詞書・作者　清・元「僧正遍照によみておくりける　惟喬親王」

二句　六帖六さくら註書「散らば散りなむ」

三句　嘉・新撰「ちらずとも」

補　惟喬親王　一五〇四――一五五七　承和二――寛平九、二、二〇、五十四歳。文德天皇第一の皇子御母は紀名虎の女靜子藤原良房等の壓迫を不快がられ且つ御病氣もあり勞東宮を御弟惟仁親王（後の清和天皇御母は良房の女明子）に讓つて御出家法名を算延と申す。和歌のまだ勃興しない早期に當つてよく秀咏を口すさまれた。ちらばちらなむ　散るのなら散つてほしい。六四番の「折らば折りてめ」と同じく、散ることを衷心希望する譯ではなく、打詫びた揚句の自暴自棄で、散るなら今散れと云つたもの、味深い句である。隨て「いまぞ散らなむ」とか「いざや散らなむ」とかいふ、心から誘ひ促す口調と比べると、大きな違ひのあることがわかう「なむ」は一活を受けてゐるから希望助辭で、これは二活につゞく未來完了の「なむ」とはちがふ。故郷人　自分がもと住んでゐた都の人、つまりふるなじみの人。こゝは惟喬親王が小野の山居時代に於ける御歌と見て、ふるさと京に居る知人、即ち僧正遍昭のこと。見なくに　「見ぬに」の延音で見もしないものを。

講　「櫻の花よ、散るならばもう散つてくれよ。よしや散らずにありとても故郷人が來て見はやしもしないのに、いつまでも咲き殘つて居るには當るまい……」（とマアこんな風に私は考へて居りますが如何なものでせう。）

評　例によつて王朝文雅の縉紳の社交振が忍ばれてゆかしい。つまり「この節庭の櫻は見頃ですのに、あなたはそよとの御たよりがないのは一體どうしたのです。この消息御覽次第、即刻お出で下さい」といつた心持を面白をかしくすねて歌はれたもので、受けとつた先方では會心の微笑と共に袈裟でもかけ直して蒼皇やつて來さうな歌ひぶりである。これを正直に字面通りにとつて「之を手にしたる遍昭なるもの正に慚死すべし」などいふのは野暮に失する。そして二三句の「ちらばちらなんちらずとも」と「ちら」を三度反覆したところは、如何にも俳調を作つて居る。類咏としては伊勢物語百四段、

昔、男、「かくてはえ死ぬべし」といひやりたりければ、女

しら露は消なば消なむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじな

といへりければ、ねたしとはひけれど、志はいやまさりけり。

とあるのだがこれは答歌で男を白露に譬へて居る。

雲林院にて櫻の花の散けるをみてよめる　そうく法師

七五　さくらちる花の所は春ながら雪ぞ降つゝきえがてにする

考　詞書　元「花の」「よめる」の五字なし。

位置　爲、はこの歌を七六に次の七六をこゝにおく。

新撰・金・世六　同。

講　雲林院（うりんゐん）　山城國愛宕郡紫野（むらさきの）の大德寺の南手がその址だといふが、今は廢墟になつて居る。古今榮雅抄に「舟岡山の東、から

すきが鼻の近所、うじゐと云所也」とある。もと淳和天皇の離宮で紫野院と云つたのを、天長九年雲林院と改稱して、仁明天皇の御子常康親王が傳領せられ、親王御出家の後、この院を以て僧正遍昭に附屬せられてから純然たる寺となり、元慶八年同僧正の請により、元慶寺の別院とせられ、村上天皇の御代御願寺にあてられた。洛北上賀茂の方向に當り菩提講も櫻も名高い。菩提講の起りや有樣は中右記承德二年五月一日の條にくはしく　櫻の歌は本集始め歷代歌集に散見して居る。そうく法師　承均法師、顯昭本に「ショウクキン法師」とあるが傳記は未詳である。季吟の抄には紀望行の孫、行廣の子、貫之の甥とあるが、又他の書には大和大掾某の子ともある。元慶頃の歌僧か？　本集には七五、七十、九二四の三首をとられてゐる。想ふに三代實錄第四十六、元慶八年九月十日僧正遍昭の奏狀の中に「永置二年分度僧三人一傳二天台之法一行二禮度之道一……但院中雜事擇二遍昭門徒之中一堪幹事者一令二其勾當一」とあるのから、推して、尙又下の　十番の歌詞から推して承均はこの寺の「年分の度僧三人」中の一人であつたらう。若しさもなければ、後の雜掌であつたかとも想はれる。花の所　とは花の名所とか、花の多き所とかの意、こゝは後者。春ながら　春だけれども、春だのに……次の雪につゞく語。雪ぞ降つゝ　雪は櫻の暗喩。きえがてに　「がて」は「がたげに」の約「たげ」の約が「て」であつて消えにくさうに、この句はこゝの雪が花吹雪であることにつばめを合はせたものである。本當の雪とちがつて消えがたげなる雪であるとの意。

評　櫻の花の樹の多いこの雲林院の庭では、最早春になつてゐるのに、時ならぬ雪が降つてゐて、而かもその雪が消えさうもない。（あゝ面白の花の吹雪やな。）

評　滿庭の櫻花白爛漫として地上皚々の美をばまことによく歌はれて居るが、今日からみると少しくくどい表現だ。これ等は唯「花吹雪して」の一句に盡きる眺めである。

櫻の花の散侍けるを見てよめる　　そせい法師

七六　花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよ行て恨みむ

考　詞書　素性集「寬平の御時后宮の歌合に」
三「……よみける」
清「さくらの花の散り。けるをみてよみける」
六帖一・春の風　同。

語　花ちらす　花をば散らす、下の「風」の修飾句。風のやどり　風を擬人して、人に寢とまりの宿あるが如く、風にも宿所あるものと想定しての修辭　たれかしる　「か」は疑問、誰が知つて居るか、「若し知つてゐるものがあるならば」と補ふ。行て恨みむ　我はその風の宿所に行きて、風に向つて花を散らしたについての怨みつらみを言ひ並べよう。

語　あの惜しい櫻の花（櫻といふことは詞書による）を散らす風の宿泊處をば誰が知つて居るか、若し知つて居る人があるなら一つ拙僧に敎へてもらいたいもんだ。さすればそこへ押しかけて行つて散々に怨んでやらうわ。

評　春風一夜無情に吹けば、落花繽紛として梢頭俄に寂しく、逝く春の愁は心なの俗人にもしみ〴〵感ぜられる。況んや一世の風流歌僧被れ素性に於てをやで、そのひたぶるに思ひ入つた心持が狂痴の態を假りて、かうした擬人法を構成したものである。但しこれとても何も素性がむきになつて、白眼春風を叱咤するとはとれない。寧ろ洒然たる態度でこの歌を咏んで解頤一番坐にある人も「成程これは御趣向」と賞ひ笑ひする樣の口吻である。

うりん院にて櫻の花をよめる　　そうく法し

七七　いざ櫻我もちりなんひとさかりありなば人にうきめ見えなん

考　詞書　元、終のところ「よみける」

三句　清一いとさかり」頭　普通はひとさかり。
五句　爲「うきめ見せなん」
　素性集：六帖六さくら　同。

作者について問題がある

一、素性の作　六帖第六　素性集　眞淵
二、由性（雲林院の別當で遍昭の弟子）の作　景樹
三、このあたり部立が違つて居る左の通り改めよ　廣蔭

原文	改訂文
七四	七四
七八	七五
七九	七六
八〇	七七
七五	七八
七六	七九
七七	八〇（この配置は續註本とも一致してゐる）
八一	八一

四、矢張承均法師　流布本見て、金子氏。
他に確證がないから姑く第四に從つておく。

鑑賞　いざ　下の「ちりなん」につゞく、さあ散らうぞ。ひとさかり　盛り一時、花に花盛りあり　人にも世盛りといつて一ばん活動力の旺盛な時や、境遇の順當な時がある。こゝは花と我と兩方にかけていつたもの。うきめ　苦しいめ、悲しいめ、こゝは見苦しい所を。見せなむ　見られ、見らえ、見えと轉化して、見られるであらうといふ受身の未來完了である。これを「見せなんの心でいつたものか、又は自動詞のまゝにいつたものか」などいふのは宜しくない。

講　おゝ汝櫻よ。もう散つてしまふのか。ドレ我もこゝから散つて他へ行かうぞ、全體人でも花でも一としきり榮えたならばそれを引く機にしないで、いつまでも、まごついて居ると、つい見苦しい處を他人に見られようぞ。

評　「われも」の「も」に作者の心境を含め「去りなん」といふ所を、花の緣語で「散りなん」とした形式はよろしい。「なん」の重複この頃は構はなかつたといふが、讀んでの口調は矢張平弱に失する。がこの歌は作者の憤慨がきつく響き過ぎて、寧ろ述懷の咏として雜の部に入れてよささうだ。落花繚亂の薫雪、見るから大地を淨化せる庭の面に、何事ぞ花見る人の不平面とでも謂ひたいが、併し之を述懷として見れば、作者は胸に稜々の氣骨あつて折から同僚と意見合はず、「何もこの寺ばかりに日は照るまいし、氣に入らねば去つて一山を開かうまでの分よ」と決然席を蹴つて庭におりたつと、その庭もせに散る櫻に、おもはずかうした形となつて迸り出たもので、この時代には珍しい意志的表現である點が面白い。又「人間の一盛り」といふことも實感味があつて、我々は女流音樂家や流行作家や相撲の大關についていつもこの感じを起す。尙且つ人間にとつて最も大切なものは出所進退で、眼がショボ〳〵になつて、腰がヨボヨボになるまでも自決しないで自己の地位に戀々とするやうな人にこの一首を味讀させたいとも思ふ。萬葉集第十、一八五五に、

櫻花時は過れど見る人のこひのさかりと今しちるらん

とある。これは專ら櫻のみについて「今がめでの盛りだからまだその時節ではないのに散る」心持を歌つたもの、丁度現代小說の美しい女主人公が肉體の秋を恐れて、若い中に死にたいといつた趣がある。之に自己の境遇感をからませる

とこゝのやうな歌になる。

あひしれりける人のまうできてかへりにけるのちによみて花にさしてつかはしける　つらゆき

七八　ひとめみし君もやくると櫻花けふは待見てちらばちらなむ

考　詞書　元「あひしれりける人のまうできてのちに花にさしてつかはしける　貫之」

語　あひしれりける人　舊い相識の人、舊知の人。ひとめみし「その人が一寸櫻を見た」ともとれるが、「私が一寸逢ひ見た」と解く方が穩やかであらう。君もやくる「君もくるや」と同じだが、ヒョッとして若しやあなたが、又來られようかといふので、望みなき望みをかけて萬一な庶幾するいひ方である。

講　「一寸逢つた、あなたが、ヒョッとして又もおこし下さるかもしれぬと思はれるによつて、コラ櫻の花よ。このあるじの心を汲んで、今日一日だけは散るのを見合はせて待つてみてくれよ。さて明日からは散らうと凋れようと汝の氣まかせにしたがよい」とまあ、こんな風に思はれまするわい。

評　「だから御身にして心あらば、この花の散らぬ中に　萬障を繰合せて御出で下さい」といふにおちつく。歌によつて察するに、久し振に訪はれながらも、ホンの一寸話して直ぐ歸つたもので丁度紫式部の、

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな

といつた風の感に堪へない。而かも櫻はこれこの通り、今一日を延ばしては散りさうであるから、同じくはこの花の散り失せぬ間の御來訪こそ望ましう候へと出たところ、之を受取つた先方でも、何とか主人の雅懷に酬いるところがなくてはならない。歌としてはさほどの秀咏ではないが、王朝生活の餘裕味が見られてゆかしい。

山のさくらを見てよめる

七九　春霞なにかくすらん櫻花ちるまをだにもみるべきものを

考　詞書　元「山のさくらを」

作者　清・筋・寫・六帖六さくら「清原深養父」とあり元き「深養父」とあり、流布本は前と同じく「貫之」とある。

語　春霞　こゝでは擬人してある。なにかくすらん　なぜにかくすのであらう。「なに」は難詰が一轉して怪訝となり再轉して咏歎の氣味を含んで居る。ちるまをだにも　せめて散る間をだけなりと、これは咲きの盛りに對照したもので、「花盛を見せろなんて贅澤はいはないせめて散る瞬間だけなりとを……」といつたもの、隨てこの山の櫻は作者が破當當時から始終に遠望して又始終に霞に隔てられて居たものなので、それを本意なく思ひ〳〵今日に及んではもう我慢がしきれなくてせめて云々と思ひ餘つた口吻で出したものとして趣が深い。みるべきものを。「べき」は當爲の義務づけから轉じて「……すればよからうのに」といつたもの、散る間だけすらも見られないやうぢや嘘だといふ氣持。

講　あの山櫻は始終霞にさへられて、折角見ようとしてもこれまでは見られぬ勝であつたが最早散るのに間もあるまいから、せめてその散る間だけなりとを見ようものを、あの春霞はナゼに惜しんで隱してゐるのであらう。ああ心なの春霞よ。

評　作者の櫻に對する憧憬と執着とが春霞に活を入れて巧に歌つたもの。

心ちそこなひてわづらひける時に風にあたらじとておろしこめてのみ侍けるあひだに、折れる櫻の散かたになれりけるをみてよめる　藤原よるかの朝臣

八〇　たれこめて春の行へもしらぬまに待し櫻もうつろひにけり

考　詞書・作者　清「……わつらひはへりける……なりにたるをみてよめる」

元「心地そこなひて、わづらひける時。風にあたらじとて。おろしこめてのみ侍りけるあひだに、咲ける花の、散りかたになりにけるを見て、よみはべりける。○典侍因香」

爲「心ちそこなひてはべりける時に　まへの櫻の……」

六帖六さくら　同。

語　心ちそこなひ　病氣になつて、紀に「得病」と書いてさう訓ませてある。處で下にわづらひける時とあるこれも病氣に罹ることをいふ。つまり病氣にかゝつて惱んでゐる時といふ程の心。風にあたらじとて　外氣に觸れさせまいとて、こゝの病氣は今なら流行性感冒のやうなものか、それにしては病臥期間が長いから、長期のもので、外氣を厭ふ他の病氣であつたかとも想はれる。おろしこめて　部・御簾・壁代・几帳などを垂れて病室をしめきること　歌詞の「たれこめ」と同じ。散かた　今に散らうとする樣子。藤原よるかの朝臣？　一五七九？　延喜一九、藤原高藤と尼敬信との間に出來た一女（因香朝臣などいつても男子だと誤解せぬように）で、目錄に「貞觀十三年正月八日叙從五位下。元慶三年十一月廿二日叙從五位上　寛平九年十一月廿九日叙從四位下掌侍」とあるが、尙三代實錄卷三十四に「貞觀十七年九月十六日戊申以二散事從五位下藤原朝臣因香一爲二權掌侍一」とある。これが右の元慶三年の前に入れば略官歷がわかるが、本書に「典侍」とあるのを觀ると、前記寛平九年十一月廿九日からこの撰集の頃までに一階を昇叙されたものと見える。たれこめて　おろしこめて　春の行へ　春景色の推移、春は如何にして經過し、如何にして暮れて行くかといふ開展。も　單に春の行方のみならず餘他一切の世間のことをも知らぬことをこめたもの。待し櫻　春にならぬ前から待ちこがれてゐたその櫻。も　否その櫻のみならず世間なべての櫻も、……單に櫻ばかりでなく桃も李も薺公英・菫・蓮華草もその他一切の春の草花木花も、うつろひにけり　散り方になつたことよ、中には已に落花したものもあり、又滿開一寸過ぎてまだ梢についてゐるのもあるとしてもこのいひ方で差支ない。

語　病氣のためにたれこめて春の推し移りも（餘他一切のことも）知らないで暮らしてゐる間に、（あの）待ちこがれて居つた櫻もちりかたになつたことよ。

語　顯昭本に云ふ「抑此の歌詞にをれる櫻の散りかたになりにたるをみてとあるに歌にはさちしさくらとよめる如何然而證本等皆同不審歟、但或本にまへのさくらとかけり。是てこそいはれて侍れ久おろしこめてみぬほどに庭櫻のまちつるが、散かたになりけると讀歟」と詞書と歌詞の矛盾を訝つて居る。頓阿本の頭註にも「をれる櫻」は穩當でない「まへのさくら」ならばよい。」とある。が併し此は決して差支はない。折れる櫻は即ち兼ねて待ちあこがれた櫻であつて病やゝ間を得てせめて一枝といふので、折らせて花瓶に生けたものと見ればよくわかる。けれども病やゝ快方に向つて簾几帳をあげさせて庭の櫻を見たとしても意味はよく通るから「庭のさくら」「前のさくら」などあつても差支はない。一體櫻といふものは今日の活花の法から謂つても、非常に水揚げのむつかしいものなのに、ましてそんな法の發達してない當時のこととて唯、當座の慰みに手折つたものと想はれる。蕾の時期から活けたと觀るのは、あまり考へ過ぎて實には遠からう。

抑々この歌上の句に於ては病熱可なりに激しく、他を顧る餘裕もなかつたことを示し「待ちし」と「うつろひ」とで病臥期間の幅を見せて、病みついたのは春を下待つ師走の末で、今三月中下旬約七八旬を病床の人として呻吟したことを含めて居る。處でかつては「春の行くへも」何も顧る餘裕のなかつた病苦も、今は櫻の一つも活けて見ようといふだけのゆとりが出來たのだから最早輕快に向つてゐることをも示して居る。翠帳紅閨の裡に春の盛りを春の人、若き女性かいたづいて春の後姿に向つてあゝといふ、その優しい溜息がかうした表現になつたものである。差し詰め今ならば病院の窓にか細いたゞむきを凭せて窓下に凋れたチューリップに見入るといふ格である。春愁の一體として優婉を以て優るもの歟。徒然草第百三十七段に「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し」とあるのを見ると兼好も亦かうした怨嗟の情趣に共鳴したものでやがて「花を見るの記」と共に「花を見ざるの記」が詩文の好題材たることをも示して面白い。「桐の一葉落ちて天下

の秋を知る」と如くに「花瓶の一輪萎えて天下の春を惜しんだ」好調である。

東宮雅院にて櫻の花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる　すがの高世

八一　枝よりもあだに散にし花なればおちても水のあわとこそなれ

考　清「こゝに左の一首がある

さくらのやりみつにちりけるを　貫

ゆくみつにかせのふきいるゝさくらはなきえずなかるゝゆきかとそみる」

頭に「見合或本有此歌、此歌無御本」とある「元」もあるが詞書では「さくらのはなの水に散るを見て」といふのだ

詞書　清「とうぐの閑雅院にて……」

元「東宮の雅院にて、さくらの花のちりてみかは水にながれけるを見てよめる」

結句　抄「あわとこそみれ」

評　東宮　皇太子の居られる御殿ないふが、時には皇太子その方をもいふ。位置宮城の東、待賢門内、中門の北、壬生の東にある所から東宮といひ、之を四季に配して春宮とも申す。さてこの時の東宮は、延喜四年二月十日立坊の保明親王のことで、醍醐天皇と女御穏子との御中に御降誕の第二皇子で始めの御名を崇象親王と申し後に保明親王と御改名御不幸にも廿一歳で薨去、前坊とも申し又御謚號で文献院皇太子とも申す。雅院　東宮の御學問所で、又音樂なども習はせられ、御元服の御式などもあげさせられる處。みかは水　御溝水と書いて宮中の軒下（砌の處）を流れる遣水をいひ、色々と趣あるやうに流されてあつたといふが、この雅院にも宮中同樣あつたのである。すがのの高世　目錄に「參議從三位眞道の男母は河内高安郡の人、正六位上秦忌寸甕丸の女。兵部少輔從五位下、弘仁十一年月日周防守に任ず」とある。本集にはこの一首だけ採られて居る。あだに散りにし　儚なく散つた。泡　泡沫夢如などもいひ「うたかた」といつて歌に歌ふ時にもはかないことの寄せにする。

評　この櫻は枝から散る時もはかなく散つたので御溝水に落ちて流れる段になつても、矢張はかない泡となつて流れてゐること——。

評　一首儚ないといふが基調であだに散ると泡となるとが、如何にも自然の聯想として構想せられてあるが。その歌境を想ふと寧ろ明るい清興が餘情で、時は三月の暮つ方、春晝靜かに散る雅院の櫻翩々として落ちて御溝の花筏となるあたり、立つて見惚れる作者の姿は如何にも悠容閑雅なものであつたらう。

さくらの花の散りけるをよめる　つらゆき

八二　ことならばさかずやはあらぬ櫻花みる我さへにしづ心なし

考　詞書　清「さくらのとくちりはへりけるをみてよみける」

抄「……よみける」

元「さくらのとく散るをよめる」

二句　清「さかすや。あらぬ」

四句　元・筋「見るにわれさへ」

六帖去さくら　同。

評　ことならば　斯くとならば、こんなことだつたら、古註に「同じことなら」としたのは誤、用例は澤山ある。後撰一、春上二四題しらず讀人しらず

ことならば折つくしてむ梅の花わが待人のさてもみなくに

さかずやはあらぬ　の「や」は疑問、「は」は強意の咏歎助詞。なぜに咲かずに居ないかよ、咲かなければ宜いものを。見る我さへに の「さへ」は「添へ」の轉で輕推重の第二類助詞。「見てゐる自分までも」といつて況んや當の櫻のあわたゞしさつたらない、と餘情にしたもの、しづ心　靜心、おちつきごゝろ、打くつろいだ氣持。

譯　あゝ汝櫻の花よ。斯うあわたゞしく散るものならば、なぜに咲かずにゐてはくれなかつた。見てゐる自分さへも靜心もなく氣がいら〳〵するよ。

評　五三の業平のと同じ着想を一層技巧的に咏んだもので表現はあれより強いが、斧鑿の痕が著くて何となく酢化燃のやうな厭味がある。業平のを天工、これを人工とした金子氏の評が當つて居る。

八三　櫻花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

櫻のごととくちる物はなしと人のいひければよめる

考　清「ここに」の一首

雲林院にまかりてさくらのちりけるによめる

ゆきとみてぬれもやするとさくらはなちるにたもとをかつきつるかな（頭に或本有此歌無御本）

詞書　元「散る」の上に「とく」あり。この方が正しいと思ふ。季吟の抄や頓には「櫻のごととくちる云々」これでも宜しい。

○下の「よめる」の三字元になし。

選　詞書「櫻のごとくちる物」とあつても、矢張櫻のやうに早く散ると解くべきである。（一句の歌詞から推して）とくちりぬとも　疾く散つてしまふといふ風にも。思ほえず　覺えず、思はれない。人の心ぞ　「ぞ」は「櫻の花」に對照して「人の心」を取出して強く指定したもの、風もふきあへぬ　風が吹くか吹かぬかで云々する。

譯　（あなたは、さうは云はれますが、）私は櫻の花が、さう早く散つてしまふものとは思はれませぬ。櫻の花は風が吹いて始めて散るのだが、人の心は風が吹くや吹かずに早や變つてしまふのですから、（この移ろひ易い人心に比べれば、櫻の花の方が、まだしも久しく保つてゐる譯です。）

評　この歌としては右樣に解するのが正しいと思ふが、撰者はさうは解してゐないのではなからうか。若し右の樣に解くと特別の異性の相手に向つて咏んだのなら戀歌になり、世の人情輕薄を憤慨して咏んだのなら雜の歌になるが、こは櫻を主題として咏んだものばかりを列べたのだから、寧ろ契沖の左の解が撰者の意に近いものであらう。

此心は花のちるよりも、惜む人の心の　靜ならぬ事をいはむとて、風も吹あへぬとはよめり。人の心のしづかならぬは、風による物ならねど、花は猶風を待て吹あへたれば、さていへるなり。うつぼ物語にこれを取て

花よりも靜ならぬは君やさは風も吹あへぬ心なるらん

前後しつ心なしとよめる中に有て、此うつほ物語の歌にもかく心得てとられたれば、風も吹あへずうつろふといふにはあらぬ也。

けれども作者の作意は正しく前述の解の通であらう。金子氏も右樣に解して、

詞書に「人の」とあるその人は、或は作者の愛人などで、この頃心變りしたらしい女かも知れない。するとその情況が相照映して、一段の感想が深まる。

といはれた實に微細を穿つた見解で正しいと思ふ。即ち下の句「君が心ぞ風も吹きあへぬ」といふも同じ程の激昂振となるし。後年兼好が徒然草の第廿六段に、この歌詞をふまへたらしい文章があつて、同じく男女の契に引いて居る。

風も吹きあへず、うつろふ人の心の花になれにし年月を忍べば、あはれと聞きしことのはごとに、忘られぬものから、わが世のほかになりゆくならひこそ、なき人のわかれよりもまさりて、悲しきものなれ。云々堀河院の百首の中に、

昔見しいもがかきねはあれにけりつばなまじりのすみれのみして

尙又兼好家集に同様の着想の戀歌がある。

空にみつ名のみ殘りて浮雲のあとなきものは契りなりけり

紀とものり

さくらの花の散をよめる

八四　久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

考　位置　清・元、こゝに八六の歌があつてこの歌は八五にある。

作者　清「きもともの り」

友則集・六帖六花・六帖六さくら・百の三三　同。

釋　久かたの　天界の現象（日・月・星・空など）の上におく枕詞。こゝは「日の光」の「光」の枕詞。のどけき　靜かに暖かにゆつたりとした趣、多く春日和に使ふ。契沖は曾根好忠の作例をあげて秋にも「のどけき」と使ふといつたが、實際は多く春日和に使ふ。俳諧でもこの語は春の季に入れてある。春の日に　「日」は春の太陽でなく、春の季節の齎なのが上にのどけきと修飾してあるから、矢張麗日和照の趣を背景としたものである。「に」は後件をもどく「なるに」「なるにも拘らず」といふ意の第二類助辭。しづ心なく　おちつき心もなくと櫻を擬人したもの、花のちるらん　の「らん」の所屬を誤らぬやうにする必要がある。花のちるをよんだとあるからには、落花そのものに「らん」とつけたものでなく「花の散るのは」どうした心であらう。と花の靜心なく散るわけを婉曲に疑つた推量助動詞である。

評　こののどかな春日和で物皆はゆつたりとした趣を見せてゐるのに、なぜに櫻はアタフタと靜心もなく散るのであらう。

評　技巧のあとを隱して、春日和の落花を叙景し得たものゝ中古來秀逸にあげられて居る。實にこの一首を讀下すると、空には紺青の雲に、うらゝかな春日、下には飽和狀態にまで滿開した櫻、この天地の間に作者が應揚に構へて風なきに散る紅葩の翩々に見入る姿が髣髴する。「など櫻花靜心なき」など難詰しては、作者の心調にそぐはないところから、三句尾の「に」と結末の「らん」と相呼應してわざと微温的に訝かつた處、巧を見せぬ巧がこもつて居る。そして一首の落ちつく處、一動去つて又元の一靜にかへり、否寧ろ落花翩々の一動はあとの一靜を彌が上に悠揚ならしめるための媒劑かのやうに聞えて、而かも彼の芭蕉の「古池や」の句の「水の音」のやうに幽玄閑寂の餘韻を曳かず、寧ろ艶陽三月の恍惚境を幻想せしめる處、洵に王朝の春の詩として春の詩らしい佳咏である。後撰三春下九二に清原深養父の題しらず

打はへて春はさばかりのどけきを花の心は何いそぐらむ

とある。想は似て居るが、難詰露骨で理趣に墮しこの歌に比べては遙に劣つてをる。

春宮のたちはきの陣にて櫻の花の散るをよめる

八五　春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん

藤原のよしかぜ

考　清頭「此歌在興風集但良風爲帶刀詞相叶若彼集失歟」（但現傳の興風集にはない）

六帖一春の風　同。

釋　春宮　東宮と同じ、八・八一にある、但官職の時は東宮傅・春宮大夫・春宮亮と書き別けるのが正しいといふ。たちはき　帶刀又「たてわき」ともいひ。帶刀舍人の略で、東宮附武官のこと。舍人監の配下の舍人の中から武藝熟達の士を選び、兵仗を帶して東宮に侍衛し非常警備の任に當らしめ、その詰所を「帶刀の陣」といふ之に二人の長があつて帶刀先生（たんじやう）といふ。後には一人となり源平の武

士の中から選任せられた。（例、帶刀先生義賢）先生の部下に、部領二人（左衛門の兼帶）・脇二人（左右兵衛尉兼帶）・連十人ある。陣は帶刀に限らず他の詰所をも謂ふ。藤原のよしかぜ　良風とも好風とも書く。目錄に「從四位下左近衛少將兼陸奥守滋實男。或又散位正野男。母從五位下南淵貴。寛平十年正月廿九日任三左兵衛少尉一帶刀。延喜三年正月十一日任二右衛門尉一、八年十一月兼二大和權大掾一、十一年正月七日叙二從五位下一、外衛。四年□月廿八日出羽國城介」本集にはこの一首だけ。よきて　避きて、さけること、傍をのくこと。心づから　花が我心から、「づ」は「つ」で、「の」と同意の體言助辭（時つ風・時の風。末つ方・末の方　やは疑問。うつろふ　はここでは散ること。

評　春風よ、お前はあの櫻の花のはたを避けて吹け。すれば自分は花が（汝の誘ひなくとも）自分自らの心で散るのかどうかを見ようぞ。

評　何も落花に對する責任者を明らかにしようといふのではない。餘りにもはかなく散る花を見ては、思はず「心なの風よ」と怨みたくもなるし、風もないのに我と自ら散るのなら、これ櫻にとつての定命で、あきらめるにもあきらめ易いからといふ趣向で、つまりは櫻を愛する詩人のそこはかとなき感傷を纖細に歌つたものである。で、次の二首は着想に於てこの歌と補角的に關聯して居る。後撰三春下八八、貫之の題しらず

風たゞに待てぞ花の散なまし心づからにうつろふがうさ

後拾遺一四三、永承五年六月五日祐子內親王の家に歌合し侍るによめる大貳參位、

吹風ぞ思へばつらきさくら花心とちれる春しなければ

さくらのちるをよめる

八六　雪とのみふるだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹らむ　凡河內みつね

考　位置　清・元・八四番。

詞書　清・元「さくらのはなの散るをよめる」

初句　清「ゆきとたに」

四句　六帖六さくら「いかにせよとか」

評　雪とのみ　雪かとばかりと釋くのだが、「のみ」は寧ろ下の「降る」に係つてひたぶるに降るのみと解いた方が文法的であるふるだにあるを　「ふる」は雪の縁語で「散る」といふところを言ひかへた同義語、ふるだに痛ましく（或は惜しく）あるを、散るのでさへ痛ましくてならないの　、それに、「を」は後件をもどく第二類助辭で之を古格の感歎詞と解いたものは肯づかれない。いかにちれとか　どんな風にひどく散れといふのか、風の吹らむ　「らむ」は四の句にかゝる。風の吹くことは眼前確實の景で「らむ」と想像する必要はない。丁度八四の「らむ」に倣て居る。風はどんな心で吹くのだらうかとの意。

評　櫻の花が風無くとも、雪かとばかりひたぶるに散つて居るそれだけでさへ痛ましくも名殘をしい極みだのに、マア春風は一帶どのやうにひどく散れといふのか、（アレあの樣に烈しく吹くことよ）

評　花吹雪を描いて生彩曄麗な作。但稍彫蟲の嫌あり、又餘情が無上にあわたゞしい光景を想ひ浮ばせるのも宜しくない。

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる

八七　山たかみ見つゝわがこし櫻花風は心にまかすべらなり　つらゆき

考　位置　清八五の次にこの歌をあげ頭に「御本次第如此」

詞書　清「ひえにのぼりて花をみてかへりまうできてよめりける」

元「比叡にのぼりて花を見侍りてよめる」
相「比叡にのぼりて花を見て……」
二句　六帖六山ざくら「見つゝわかゆく」
五句　相「まかすべきなり」

考　山たかみ　山が高いので、契沖は比叡山は延暦寺のある寺だから、敬意をも含めて「たかみ」といつたものだといふ。成程詞書にわざ〳〵斷つたのと對照して一寸面白い解だが、しかしさう迄深くとらず四明が嶽は、あの邊での高山だから、詞書はその程度で歌詞に交渉してゐるだけだと思ふ。見つゝわがこし　わが見つゝ來しの倒置句、自分は唯それを見い〳〵やつて來た。「わが」は後の「風」に對して不自由と自由の對照「見つゝ」は「そばに行つて手折ることも得せず」の意を含む。櫻花　下に「をば」と補つて客語とすべきもの。風は　上の「我は」に對して高山に便宜多く、櫻花と接觸自在を極める對照として「は」をつけたもの。心にまかすべらなり　心にまかすべくあるなり。最後の「なり」は咏歎助動詞、自分の氣まかせ－自由にしてゐるやうだ嗚呼、の意で、「さても羨ましき限かな」と樣の語氣を餘情とする。

評　比叡の高嶺に咲く櫻は何分にも山が高いので、自分は傍に立ち寄つて手折りも得せず、遠くの方から打眺め〳〵して歸つて來たのに、峰吹く春風は之に反して勝手氣まゝにあの花を自由に扱つてゐるやうだ。さても羨ましいことだなあ。

評　高嶺の櫻を遠望しその襯染の欲求を反映して風を擬人したのが一趣向であらう。併し「心にまかせる」といふのは、唯接觸自在を意味したもので「氣儘に散らす」と限定して取る必要はなからう。何れは散る花もあらうし、散りかかつて二三片留まるのもあらうし、又接吻程度のそよぎもあらう　又金子氏は富樫廣蔭の解をあげて、一顧の價値があらうと謂はれた。それは櫻は比叡山根本中堂あたりに居る雅兒、風は山法師に暗喩したといふのだが筋は通るが風俗史的に見て男色のことは近世以後に盛になつたもので、文學作品には室町期小說によく見られるものだ――志賀の山越に行きずりの女に遇つたことさへ詞書にする貫之が、若しさる暗喩をきかすのならばあらはに詞面にあらはしさうなものだと思ふから、自分一個としては諾けがたい憶測としておく。

題しらず

八八　春雨のふるは涙かさくら花ちるを惜しまぬ人しなければ

一本三（小字に）大友くろぬし

考　詞書・作者　清「くろぬし」
元・筋「仁和御時中將の御息所の家歌合によめる　大伴黑主」
二句　清「ふるはなみだぞ」
作・古典本「一本」の二小字なし。
六帖六さくら「黑主」とあつて歌詞は之に同じ。
この作者に就ては左の契沖の說による。
「一本とはつゞけて貫之の歌とせる本につきて、或本に大伴くろぬしとあるをもて定家卿のおぎなひて注し給へる歟。一本を證とすべし。六帖にも黑主歌なり。そのうへ貫之の歌ならば、次下の歌の下に名あるべからず。此理明らかなる事也」
猶黑主の姓「大伴」「大友」の二樣に書かれるが、大友が正しいことは序の註に述べた通りである。

評　春雨　「はるあめ」の「あ」が同韻の「さ」に轉じたもの。之と同樣の雨の稱呼にはむらさめ・あきさめ・ひさめ・こさめなどがある。ふるは涙か　「か」は疑問、ふるのは涙であらうか。人しなければ「し」は强意助辭、人がサ無いから。

春下　八七・八八・八九

【考】櫻の花の散るのをば、誰あつて惜しまぬ人もないのだから、あの春雨の降るのは、名殘をしさの泣きの涙であらうか。

【評】鄙言に「此やうにはるさめのふるのは世界の人のなみだであらふ云々」とあるが、世界萬人の涙集まつて春雨となるとの着想は面白いけれども線に無理がある。穿鑿めいては居るが、先づ地上の萬人が涙を流して、その涙が蒸發して水蒸氣になつて上昇して、その水蒸氣が冷却凝集して春雨と降るといふには、涙は一上一下のラインを辿ることになる。それより、この涙は「天も人々の心に同情して泣くのかあれ〳〵涙を春雨と名づけて滴々雨下するよ」と解いた方が自然であらう。つまり、

櫻花散るを惜しまぬ人もなし降る春雨は空の涙か

とでも謂ふ處を、それでは散文的になるから倒置句にしてこの詩形を採つたものと想ふ。落花斑々そゞろに春愁をそゝる折柄しと〴〵と降る春雨に直ぐ自家當面の惜春惜花の感傷を寄せたもの、歌境の情趣に味ひがあつて、技巧よりも題材の詩趣を以て優るもの歟。

亭子院歌合のうた　つらゆき

八九　櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞ立ける

【考】詞書　元「のうた」の三字なし。

作者　清「くろぬし」頭に貫之作の旨委しく考證してある。

結句　新撰「なみと立ける」

亭子院歌合季春二十首九の右持　同

【考】なごり　なみのこり（波殘）の約濁、波打際に一波立つて後の惰性的な波、波の面影の殘つてゐるものが原義で、後には何に限らず、その物去つた後尚面影が髣髴すること即ち「かたみ」「面影」「記念」などの意に用ひ、再轉しては「訣れ」の意にして「名殘を惜しむ」などいふやうになつた。餘波・名殘など宛て又單に波とも宛てる。水なき空　空に水のないことは當然だから、こゝに一寸不似合の感じがするが次の「波」に至つて大空を海でもないのにと想を構へたことがわかる。なみ　は櫻の落花の暗喩。ぞ　は強く指定してこの光景こそは眞に意外との口吻。

【評】櫻の花が風に散つたその風の名殘として海でもない空の水もないのに美しい花の波が立つてゐる。（實に面白の景色やな）

【評】落花の空中に飛散したのを波と見立てた處は面白いが、貫之の歌ばかりを拾つて見ると、この種の纖細な咏みぶりが多くて又かといつた風の氣障りがある。それに歌は文法に拘泥する必要は無いけれども、正格にしても作意を破さない以上は文法を守るが宜い。この歌「ちりぬる」は「ちらせる」としないと自他が混同する。「櫻花ちらせる風のなごりには」とすれば正しい上に作意をより明らかに表すことになる。

ならのみかどの御うた　平城天皇　大同天子

九〇　ふる里となりにしならのみやこにも色はかはらず花は咲けり

【考】詞書　元「奈良の帝御歌」

作者　古典本「奈良の帝（平城天皇）の御歌」

風「大同帝」

一二句　六帖二部「石上ふりにしならの」

四句　元「色はかはらで」
結句　六帖二都「花さきにけり」
新撰　同。

眞淵の説に二八三と同じく始めを「題しらず　よみ人しらず」として左註に「此歌は或人ならのみかどの御歌也となん申す」とすべきだといつて、金子氏も之に同意して居られる。傳寫相筆本には片假名で同じやうにあつて、最後の「となん申す」の五字がない。これ等は無論尤もな考證でもあり、本文でもあると思ふ。否寧ろ二八三の方こそ序文にまで引例した程、撰者の頭にはこの帝の御製だといふ自信があるのだから、こゝと二八三と體裁を取替へた方が適切だとさへ想はれる。平城天皇大同天子の八字は定家の自筆本に入つたのが本で轉寫せられたものだといふが、察する所、もつと早くから備考の註文として誰かが小さく入れたものを後人轉寫の際本文と誤認したものであらう。

雅 ふる里　解は已に述べた。こゝでは舊都の意。なりにし　の「に」は現在完了ぬの第二活用、「し」は過去の助動詞「き」の第二活用、みやこにも　の「も」は他の諸處方々には今花が咲きさかつてゐるがこの奈良の舊都にもとの意。色はかはらず　色は昔榮えた時に變らず。

講 （今や陽春二月百花爛漫の好季節となつた。そこで）今はもう寂しい舊都と荒廢したこの奈良の都にも、他と同樣に（餘の物凡て非なる中に）花ばかりは昔この都の全盛時代と變りなく同じ美しい色を呈して同じやうに咲いてゐることよ噫。

評 感慨深い御製である。帝は當來の新文化――唐制の極端な模倣に嫌焉たらせられて、獨り古典趣味に惝恍あらせられ深く奈良趣味に沈潛して、その風物を愛せられ、屢々彼地に行幸や御幸があつて、殊に御讓位後は一時奈良にお住まひにさへなつたと云ふ。此帝の御趣味と對照して殊によくその御人格が表れてゐると思ふ。

青によし寧樂の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり

と謳はれた奈良、五丈三尺五寸の大佛像が安置せられ、幾千百の僧尼が三衣美々しく佛會に參列した奈良と次々列擧すれば、續日本紀擧ぐるところ奈良朝七代七十年間の繁榮は、實に神武紀元以來未曾有の目まぐるしさであつたらう。そこには又別して花卉が多く、

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ

百敷の大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへる

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな

など舊都の花の多きを想はせる歌は可なりに多い。然るに一朝帝都を長岡に遷され、次いで平安に遷されてからといふものは內裡の壯麗見るによしなく、八省百官の官邸空しく殘礎を留め輕裘・衣冠・車馬の往來頓に減じて年は一年とさびれて行く。そこで嘗ては貴人の手に摘まれた、若菜も今は牛馬の食むに任せ、昔は大宮人にもてはやされた草花木花も今は纔に草刈る賤の男が、通りすがりの一瞥の憐れみを受くるに過ぎない。あゝ舊都は荒れたり、花は依然として美し、この變不變の對照はやがて今昔の感となり即ちこの一首を口ずさまれたものと察せられる。

前にもいつた通り自然の悠久、人事の轉變を比照してこれに今昔の感傷を寓することは古今東西を通じて詩人の慣用着想とも謂ふべく、更に一歩を進めて考へれば、これとりも直さず人間性に根ざした感懷とも謂ひ得よう。さればこそ近江の荒都を悲しんでは、

さゞなみの志賀の辛崎ささくあれど大宮人の船待ちかねつ

といひ、飛鳥の古都を憐んでは、

たわやめの袖ふきかへす飛鳥風都を遠みいたづらにふく

といひ、石上の廢頽をわびては素性が一四四の嗟嘆となつた。芭蕉が高館の懷古も、杜甫が春望の悲歌も乃至今日世界

歴訪の遊子が倫敦塔の壁書を見たり、羅馬の廢墟に立つたり、波蘭の古城を歴巡つて洩らす感じも、要するに自然に人事をからませて昨是今非の感激を強調したものに過ぎない。觀じ來ればこの一首は、それ等の作品に交つて相當高い位置を占めるべき秀咏であらう。尚又この歌より以下は櫻と限らず廣く春の花を歌つてあることは、いままで散りかたの花であつたものがこゝは盛りの花を歌つたものである點から視ても明らかである。

春の歌とてよめる

九一　花の色は霞にこめてみせずともかをだにぬすめ春の山風　　よしみねのむねさだ

考　詞書　遍昭集「春」
元「春の歌」の「の」なし。
四句　清「かをだにぬすめくか」
六帖一春の風・新撰　同。

春の歌とてよめるこの詞書處々にあるがつまり、春の歌をよまうといふので作つてみたといふ程の心持で、その作つた時の歌壇の實景ではないことを斷つたものである。

語　花の色は　「色は」は下の「香」と對照においたもの。こめて　籠めて、深く霞の奥にしまひこむこと、さながら門外不出の寶物の如き趣。みせずとも　吾々に見せなくても、これの主體は「春の女神」とか「佐保姫」とかおけば宜からう。かをだに　せめては香だけなりとの意で餘情には花の色を見たいのは山々だがをきかせたもの。ぬすめ　こつそりと偷んで吾にもたらせかし、この語やゝきつくも濃くも感ぜられますが、これによつて、霞がさも後生大事と櫻をこめて居る擬人も、せめてその一寸とした花の印象をでも得たいと思つてゐる作者の心境も強く表現されてゐる。

評　（春の女神が秘藏の）花は霞の奥にこめてなか〳〵吾々に見せない。で、花の全輪は到底見せてはくれないが、春風——汝は花に近よる便宜もあるのであるから、）せめて花の香をだけなりとこつそり盗み出して吾々に嗅がせてくれよかし頼むぞ〳〵。）

評　花に對する強い憧憬を歌つたものである。この歌に寓意があつて花は身分高き貴女にして我が意中の人、春風は之にかしづく女房、御達で、到底まともの逢瀬はむつかしいが、せめて一時の垣間見だけなりと便宜を計らへかしと責めたてるのが裏面の着想だといふ。又さうならこそ遍昭名前でなく在俗の「良岑宗貞」名前で出してあるのだともいふ。なる程それで一通論理は一貫するが遍昭の傳記にさる確證がない以上は撰者類聚の意を酌んで、矢張字面通り單なる春の歌と見るが正當ではあるまいか。唯之を人事に移せば源氏の君の藤壺戀しさに王命婦を責めるところ、柏木の女三宮に焦れて小侍從を促すところなどに恰好の歌ではある。けれども斯うした適合は他の卷々にも往々ある。それに俗名をあげたのは參議篁の冬の部三三五の歌とよく似てゐるし篁と遍昭とは略同時代の人で、篁の方が少し年長であるから、或は篁のをまねたり、盗んだりしてこの一首を咏んだのではないかとの誤解があつてはならぬといふので、撰者の方でこれは剽竊ではなく、すつと早くまだ在俗當時に咏んだものであることを示したものだといふ説もある。契沖の説はてつきりそれで、

其上文德實錄を考ふるに、遍昭は嘉祥三年に出家せられ、篁は其後仁壽二年十二月に薨ぜらる。二首の前後いかてか知定めむ。されば此歌はたとひ遍昭とかきてもくるしかるまじきを、宗貞とかけるは、まことに宗貞なりし時よめるが上に、遍昭とかくは、篁の歌をぬすめる歟、本歌とせる歟と、後の人の思ふべきことを、かねてはかりて、其疑ひあらせじとなるべし。

（小野篁は一四六二——一五一二、延暦二一——仁壽二、五十一歳僧正遍昭は一四七五——一五五〇、弘仁六——寛平二、七十

歳で遍昭は墓よりも十三歳年下で十七年後に亡くなつて居て、出家したのは嘉祥三年三月廿二日仁明天皇崩御の時三十六歳であるから、つまりその三十六歳までの咏なのである。）隨て彼の三三五の歌と比較して時代の新舊によつて、これだけ歌態が相違するなどいふのはどうかと思ふ。二人とも略同時代で、うつかりすると彼は晩年に咏み、遍昭は若年時代に咏んだりすると、この方が却て古い歌となる譯で、つまりは作者の個性の相違といつた方が適切であらう。其上當時は創作意識がまだ今日のやうに嚴密でないのだから、模擬・剽竊をさほど恥とはせず、寧ろ遊興とさへして居つた。枕草子に道隆の「君をばいつもたのむやはわが」清女の「君をし見れば物思ひもなし」など、あつて一條帝の頃さへあんな調子であつたのだから、契沖の推測も必らずしも正鵠とは謂へなからう。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　素性法師

九二　花の木も今はほり植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

考　詞　元「……后宮歌合に」

初句　新萬・拾遺一一八六「花の木は」清「はなのきも」

三句　六帖六花「あぢきなく」

四句　寛平歌合四〇左「移ろふ花に」清「うつろふいろお」

拾遺一八・雜賀一一八六「花の木はまかき近くは植ゑてみじ移ろふ色に人倣ひけり」

新萬上「花之樹者今者不堀殖立春者移徒色丹人習藝里」

素性集　同。

釋　花の木も　「花」を櫻と解いたものは少し限定し過ぎて居る。文字通り何であらうと花咲く木ととる。最後の助辭「は」を挽れば「餘のものはとにかく、この花の木ばかりは」となるのだが今は「も」を採つて「皆人のめでたきものにもてはやす處の花の木すらも」と解く。今は　これ迄は隨分植ゑもしたが、今日以後は。ほり植ゑじ　「欲り植ゑじ」ではなく「掘り植ゑじ」で、當時は草木を山や野や、他人の屋敷のをとつたり、貰つたりして、移植するのが普通（二四八の遍昭の歌や、大鏡紀内侍の鶯宿梅を見てもわかる）だから、つまり他から掘り越して我宿へ移し植ゑることを敢てすまいといふのである。春たてば　「立春がくると」「春のはじめになると」など解いては可けない。こゝは「花咲けば」といひたいのをさうしては上の「花の木も」の「花」とさしあひになるから春が來るとといつた位の語氣でかうしたもの。うつろふ色に　その花のやがて色が褪め褄へる、その花の素振に。人ならひけり　之を見る人（あなた）までが看做はれて、かつてはしげ〳〵御出で下されたのにこの節は一向音沙汰もなく、御出で下さるやうなこともなくなりました。

語　省く

評　暮春の消息歌として氣がきいて居る。餘情は略次の通りと想ふ。

「この頃朝夕如何御くらし遊ばされ候や一頃庵の花盛りにはあの樣に懇ろに御訪づれいたゞきし御身の、花ちりかたとなりては、その花のうつろふ心にならはせ給ひてか、一向に御消息賜はらずこの樣のことならばそのお手本を見せたる花の木も怨めしくつそこの後は斯樣なる手すさびもやめようかなどかこちくらし居候、例の愚痴御笑ひ下され度候」

先づこの程度に解すべきもので、字面通りむきになつてしよげたり、怨んだりしてゐるのではないと採るべきである。

題しらず　　よみびとしらず

九三　春の色のいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花の見ゆらん

考　詞　元「題不知」

二句　清「いたりいたらぬ」

語釋　春の色の　漢語春色を訓讀して、はるのいろとしたもの、春景色の。いたりいたらぬ　「到り」「到らぬ」行き屆いてゐる處と、屆いてゐない處と、里はあらじ　村里はあるまい、だが前句の承けつぎは、到れる里到らぬ里と樣の「けぢめ」はあらじ。で、「里」そのものに直ぐ「あらじ」をつけては筋が通らない。さけるさかざる　同じ花の中、已に咲いたものとまだ咲かないものと。花の見ゆらむ　句の通りに解くと「花が見えることであらう」となるが、四句までの口吻から察して「なぜに見えることであらう」と解く。

評　春色は一樣平等で、行くに早い遲いもなく、一時に到らぬ隈なく里邊を訪づれて居ることであらうのに、なぜに花の方に遲速の差が出來て、もう咲いたものや、まだ咲かぬものといつたやうな區別が出來るのであらう。

一言に云へば「春色平等なるに花に遲速あるはこれ如何」といふ歌であるが、いたり・いたらぬ」「さける・さかざる」と反綴的な疊句を二回まで驅使して、諧和的な對句を仕立てた爲めに音調美に於て優れて居る。丁度曲譜の傑作に見られる音樂的偕調である。併しその爲めに表現は稍晦澁である。三句の終に「に」「など」と三字を入れて始めて明瞭になる詞形である。さりとて之を、

春のいろの到らぬ里もなきになど咲ける咲かざる花の見ゆらん

としては、語調迫つて面白くない。着想は初春から仲春にかけての春山春野を遠望した歌境に趣があるといふまでで、大したものではない。又契沖は、

下の心は君の恩光は春色のごとくあまねかるべきを、何とてなり出る人となり出ぬ人との有らんといふなるべし。

と謂つて居るが、例のともすれば人事的聯想を以て解く古歌訓詁の癖だと思ふ。

はるの歌とてよめる

九四　みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花や咲くらむ　つらゆき

考　初二句　六帖一霞「山ごとに立もかくすか」

語釋　みわ山　大和式上郡の古い名山で大物主神を祭る。「みわ」は三輪とあてるが、その語義は古事記によると、玉依媛が大物主神にみあひまして、その神の御衣に綜麻の絲をつけて、御住處を追跡した時、件の絲が神山に到つて、そこに大蛇がのたうつて居つたので、さては明神であつたかと始めてその御素性を知られた。その時件の苧環はまだ三まげ殘つて居たので、それからその土地を三勾といつたとあり、日本紀崇神天皇の御代惡疫流行の際にもこの明神の神託があつて「おほたたねこ」といふ者を召して私を祭つて下さすつたら、こゝ崇りは止めようといふので、日本隈なく求め、とうゝ河内で件の名の者を得て、祭をさせられた處、不思議にも、惡疫の流行は止まつたので、天皇がその故をおほたたねこに問はれると「私は實は大物主神の後裔なのです」といつて玉依媛の戀物譚を申上げて同じやうにいつて居る。後年戯曲の妹脊山婦女庭訓にこの傳說を採つてうまく利用して居る。が、併し大和志料（下一六―二二）によるとみわは御甕で元酒を入れる土器のことで、轉じては酒そのものをもいふ。こゝは大物主神に捧げる神酒を釀して用意してゐた場處だから御甕そのものが、やがて地名になつたものだといひ、寛政十一年發掘の土器の圖十種を掲げて居る。しかもかくすか　最後の「か」は咏歎、マアあの樣に隱してゐることよ。春霞　下に「が」として擬人したもの。人にしられぬ　「まだ人に知られてない」といふのが普通の解だが、全體の咏みには今少し強くて「人に知らせてはならぬ」の意に採りたい。花や咲らむ　花が咲いてゐるのであらう。

評　春霞が、マアあのやうに三輪山を隱してゐることよ。さてはあの奥には、まだ人に知らせてはならない祕藏の花でも咲いてゐるのであらう。

三輪山は大物主神の鎭座まします名山で、その別名にも御室山・眞穗御室山・神南備山・神岳・神體山・御山など色色神々しいものがあるから神祕的に着想したものと思ふ。又玉依姫傳說も當時已に一般化して居つたと思ふから、これこそ、戀といふ程の熱意を離れて「人の花」と「花の花」とを綯ひ交ぜに丁度志賀の山越に「道もさりあへず花ぞ散りける」といつた流義で咏んだものとも思はれる。だからこれを六帖のやうに、世間おしなべての山としてはこの歌の興

趣は素然たるものにならう。萬葉一、一八に、

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなむかくさふべしや

とあるのから脱化して山を花に雲を霞にとりかへたものである。又これの類咏には拾遺三七、中務の題しらず

よしの山たへず霞のたな引は人にしられぬ花や咲らん

がある。

うりん院のみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる　　そせい

九五　いざけふは春の山邊にまじりなむくれなばなげの花のかげかは

考　詞　素性集「朱雀院御時北山にまかりて」

元「雲林院親王のもとに、花見に北山の邊に罷けるによめる」

相「うりんゐむのみこのともに……」

二句　六帖二野邊「春の野邊に」

嘉「まかれりける」

三句　清・奥・顕・元・筋・相・爲「まとひなむ」

新撰　同。

評　うりん院のみこ　仁明天皇第七の皇子常康親王、この親王がお住まひは雲林院がまだ寺にならぬさき、即ち貞觀十一年以前のことである。もとに　は聞えない、たとひ一つにもせよ「ともに」とある古本があるのだからこれを採らうと思ふ。きた山　については契沖の説明を引く。「北山は鹿園寺の邊をおしなべていふ。平野の北に大北山・小北山とて村もあり。後撰雜四に十月ばかりおもしろかりし所なればとて北山のほとりにこれかれ遊び侍りけるつゐでにとて雅輔・是則の歌あり。こゝなり、新勅撰・玉葉などにも見えたり。此集下にいたりても北山といへるは此に效ふべし。都の北鞍馬の邊をさしていへるにはあらず。いざけふは　さあ今日は一日ずつと遲くまで、「けふは」は「他の日はいざしらず」と區別したやうにもとれるが、こゝでは「今日はゆつくりと」今日はとつぶり暮れるまで」と悠々と構へる氣味である。春の山邊に　花さく春の北山のほとりに。まじりなむ　立ちまじつて徘徊逍遙しよう。と解く。「まとひなむ」は「惑ひなむ」で「今の語の「耽溺しよう」俳人の「馬鹿と氣のつく處まで」といふ口吻で、これも面白いが今は流布の形に從つておく。なげの　無氣の、趣なげなる。見どころなささうな。

書　雲林院の皇子の御供をして、花見に北山のほとりに行つた時によんだ。

サア今日は一日ずつとゆつくりこの春山にさまようて遊ばう。日がとつぶり暮れるまでも遊ばう。暮れたら趣の無さうな花の下蔭であらうか、（イヤそんなことはない。暮れたら、暮れたで又樣かへた興趣があらう。）

評　北山の春色今や十分にして風流法師がとみかうみ頻りに快哉を叫び、ゆつくり神輿を据ゑて心ゆくまで清興を味到しようとする有樣見るやうである。皇子と北山と春のまさかりと、人よし場處よし季節よしと悅んだ作者の歌境が言外に響いて面白い。

はるのうたとてよめる

九六　いつまでか野べに心のあくがれん花しちらずば千世もへぬべし

考　詞　素性集「春の歌よみてと人のいふに」

作者　元「素性。」筋「同人」などとあるけれどもこれは入らない。

三句　古典木「漫行れん」
結句　清「としもへぬべし」

六帖一仲の春　同。

評　いつまでか　野邊にあこがれてうろつくことがいつまでのことであらうかと、その限界を輕く疑つて自問をしかけて、下の句の自答に對應させたもの。野べに心の　心は野邊にとしても同じだが、強調したい語の順位に倒置したもの。あくがれん　あこがれることであらう。「あこがれ」は在所離の意歟、心が或事物に惹きつけられて落ちつかぬ心の語、一說に「あ」は接頭語で「焦れ」の意、物事に思ひを焦す意だともいふ。同行の轉で又「あくがるる」ともいふ。古い語だが、現代文學にも、畫題や彫刻作品の題にもよくある。明治に入つて獨逸語のゼーンズフト "Sehnsucht" の譯語に惱んだ揚句高山樗牛と大町桂月が相談の結果「あこがれ」と譯し之に恰好の漢字をあさつて「憧憬」としたのが一般に行はれ出したともいふ。こゝもさうした意味で、一日にいへば「浮かれある く」ことだが、花の趣味に浮かれあるくのである。最後の「ん」は初句の終の「か」と相まつて疑問體を構成する。花しちらすば「し」は強意で花に對して深く思ひ入つて強く指定した氣味がある。千代もへぬべし　「代」は「年」と同じ、千年も暮らすことであらう。「べし」は推量ともとれ自己豫定ともとれ、どちらにしても修辭の效果は略似て居る。「千代」は無論誇張法である。

評　いつまで我身は野べにうか〳〵とぼ〳〵と浮かれさまよふことであらう。（自問）サアさればあの好きな花が散るまでも居ることであらう。だから花さへ散らなければ千年でも居りかねなからう。（自答）

評　「花ド忘レ歸」といふ句を强調して、痛快に花を稱へた秀咏で同時に作者が並外れた野花の趣味の人であることが察せられる。

素性のこの花に對する强き憧憬はやがて我國民性の一面を示したもので、彼の

六十餘回看不レ足。他生定作二愛レ花人一。

と咏んだ大江佐國の花狂も之に近く、更にこの佐國が死後蝶と化して花間を飛び廻り、その子は夢の告げによつて亡父に供養のつもりで花毎に蜜を塗つて廻つたといふ傳說も之を證據立てて居るし、俳句にも、

花に來て美しくなる心かな　たつ
花咲いて死にともないが病かな　來山

などがある。和歌では本集七〇もこれに近いが尙今一首あげると金葉一、春歌五四、

山花留人といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

斧のえぼ木のもとにてやくちなまし春を限らぬ櫻なりせば

題しらず　よみびとしらず

九七　春毎に花のさかりはありなめどあひみん事は命なりけり

考　作者　六帖六花「素性」
二句　六帖・相「花のにほひは」
四句　元「あひ見む事の」
五句　元・筋　命のみなり」

評　春毎に　この年に來る春毎に、倒置句で二の句の次に廻るべきもの。花のさかりは　花ざかりはといつて、四の句と對照的においたもの。ありなめど　ありなむさどの約と見ればよくわかる。あるであらうけれども。あひ見ん事は　「相見ん」としては、花の下蔭で誰かと出あふことになるがこゝは「逢ひ見ん」で花盛りそのものに遭遇することほの意。命なりけり　命次第のものだ、幸にして命長らへて居れば見ることが出來るが、若しかひょつと來春迄に死ればもう今年の花が見をさめとなる譯だといふ程の意で、この一首に活を入れたやうな名句である。

評　花の盛りは此後とても來る春毎にあるであらうけれども、それに出あふことは命次第で或は出來るかも知れず、

又出來ないかも知れぬ。

評　さう思ふと今この花に對する名殘が惜しまれてならぬともとられ、それにつけても何とか命長らへたいものだともとられ、來年の花盛に逢はれるかどうかを運命的に觀照する作者は最早可なりの老境に咨嗟してゐる人であることも、その上、何よりもこの花の熱愛者であることも察せられて、感味多い佳詠である。二八と一寸似通つてゐるが、この方が深刻である。後年西行が二度目の中山越に、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

と詠んだ四句はこゝの五句から來たものと思ふし、これから脱化したさる若者が志を立てゝこの山越をする時、

世に出すは二度とはこえじ我が爲めの命なりけりさやの中山

といふのもあり、名物飴の餅にまつはる傳說の孝子は「命なりけりさやの中山」を合言葉に、普く日本を歷巡つて遂に母の仇を討つたと謂ふもある。さてこの歌の作者にして若し來春まで健在したらどんな歌を詠むであらう。それには本居宣長の左の一首などが近からう。

命あればことしの春の花も見つ嬉しきものは命なりけり

又命かけて自然の美にあこがれる歌境は鎌倉右大將の、

世の中は常にもがもな渚こぐあまのをぶねの綱手かなしも

とも相通じて居る。

九八　花のごとよのつねならばすぐしてし昔は又もかへりきなまし

考　位置　元・筋・九九

四句　六帖六花「昔は今も」

考　花のごと　花のやうに、花同樣に。世のつねならは　この世が恒久不變であるならば、無常迅速の世でないならば、花は毎春時を違へず咲くから恒久不變だと觀たもの。すぐしてし　最後の「し」は過去の助動詞「き、し、しか」の中の「し」吾身がこれまで過して來た。昔は云々　昔の代が又も返つて來るであらう。「まし」は實現すべくもあらぬ假定の結果を推想した語だから、この句の餘情は「けれども世の中といふものは花のやうな恒久不變なものではないのだから、嘗ての昔を再び見ることは出來ない。」となつて初句からの語勢はこの「まし」を轉機として「廻れ右前へ――」をして居る氣味がある。

評　若しもこの世の中が、あの花のやうに永久不變で、時をたがへぬものなら、かつて過して來た已往の樂しいことは復もめぐつて來ように……(世の中は無常變易定めなきものだから、到底その樣なことは望まれない。)

評　「暮春の落花を見て、一般に花のはかなきを歎くのに對して警句的に花は恒久であるといつたもので、丁度「殘なく散るぞめでたき」といふ七一と似た着想だ」との評は諾はれない。一首の落想は、人世の流轉歡樂一たび去つて永久再來の期なきをわびたもので、春は數多たび返り巡つて、花はその都度見られるが、あの嘗ての悅びは見るに由なしといふので、丁度鎌倉鶴岡の舞殿に靜が、

しずやしずしずの苧環くりかへし昔を今になすよしもがな

といつた樣な餘情をさへ想はせる。老境靑春を想起しての述懷か非境順境の昔を忍んでの歎嗟かであらう。唯「世の」は「世が」と同樣二句までの主語であるに拘らず位置が拙い爲めに當低く發音せられて表現不明に陷つてゐる。之を、

世の中は咲く花のごと常ならず昔はまたもかへりきなまし

などと比べれば直ぐわかる。

さて斯うこの一首を眺めてくると、これは春の部よりは雜歌の部に入るべきであらう。これから脱化したもの定家の

拾遺愚草下

仁和寺宮の花の五首寄レ花戀

花のごと人の心の常ならば移ろふ後も影は見てまし

九九　吹風にあつらへつくるものならばこの一もとはよきよといはまし

考　位置　元　筋・九八。

二句　清「あつらへつくる」

四句　元・顕・素性集・六帖六花「この一枝は」

五句　元・筋「よけよといはまし」

あつらへつくる　誂へ附くる、註文する、要求する、頼む、又「あとらへる」ともいふ。この一もとは　こゝの一株の花の木だけは、こゝは元は「一枝」であつたものを後の人が範圍を廣めて「枝」を「本」に變へたものであらうといふ。(眞淵・景樹・金子氏も)けれども一枝といへば何か花瓶にでもさした花のやうに聞える。が、花瓶にさす程なら御簾・几帳の奥に据ゑられ、さなくも　常は室内に飾られるのだから「風」について心しらひする必要はない譯だから、愚考矢張「一本」が正しいと　ふ。よきよといはまし避けて吹くなといはうのに。「まし」は前のと同樣これが轉機となつて「けれどもそのやうにあつらへることも成らず困つたことだ」との餘意がある。

講　若しも咲く春風にあつらへつけることが出來るものなら、この一株だけは避けよといはうものを、(さうもならずやがてはこの美しい花も風に吹かれて散ることであらう。と思ふと惜しまれてならぬ。)

評　惜春惜花の咏として一七の歌と相對して、男女兩性の寄託自らけぢめあることを想はせる、そしてこゝのものは「この一本」といふに力が入つて餘の花は已むを得ないとしても……と餘情が聞え、さては明けくれ見めでて居る我庭の花の木なることを示して居る。但第二句は「あつらへつべき」として始めて作意を明瞭ならしむべき句ではなからうか。

源氏幻の卷に紫上薨去の後、匂宮が、神妙にも御生前の希望にそふべく花の木をかばふところに、

若宮「まろが櫻は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに。几帳を立てて、帷子かあげずば風もえ吹きよらじ」と、かしこう思ひ得たりと思ひて宣ふ顔の、いと美しきにもうち笑まれ給ひぬ。源「覆ふばかりの袖もとめけむ人よりは、いと賢う思し寄り給へりかし」などこの宮ばかりをぞ翫びに見奉り給ふ。

とある附點の語句がこゝの着想の思無邪なものである。又源氏のいはれた古歌は後撰第二春中六四、題しらず、讀人しらず、

大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風に任せじ

といふので、これも類咏の一つである。今一つ源氏物語湖月抄に、

吹風も心しあらば此春は櫻をよきてちらさざらなん

といふもある。尙思ふに此歌素性法師集に、

「朱雀院の御ともに仕うまつりて手向の山にて」として「手向にはつゞりの袖も」「いづくにか世をば盡さむ」の次に入つて居る。若し右の詞書が三首に亘るものなら「この一本」は花の木ではなく手向山の紅葉の木であつて、これは秋の下に入るべきものである。

一〇〇　まつ人もこぬ物ゆゑに鶯のなきつる枝を折りてけるかな

考　作者　帖一殘りの雪「躬恒」（「殘りの雪」の部に入れたのはよくない）

位置　清巻十三・戀三・六三七

二句　六帖「こぬ物からに」

四句　元・頓「なきつるはなを」三「なきつる花を」

評　まつ人　清輔本の位置なら戀人ととられるが、七四などと同じく同性の親しきどちの消息として、花が咲いたら行かうと約ある人か、別にさる約束なくとも、作者が暗に下待つ人か何れかである。併し前者に解する方面白い。こぬもの故に「こないものだから」といへば　通りの意は釋かれては居るが、余は之を「來もしないその人の爲めに、來もしないやうなめにあはうとて」と釋きたい。尙「評」の欄にいはう。鶯のなきつる枝　「枝」は「花」でなくては不都合だとの評もあるが、上との接合は枝の方がよろしい（下との接合は花の方がしつくりしてゐる）し、「枝」とあつても花ゝ枝であることは自明といつても宜い位だから今は之を採つておく。折てけるかな　折つたことよなあといふので、實に巧みな修辭である。「折りとりにけり」とか「折りにけるかな」などしては折てからの後悔未練の情緒が髣髴されない。極めてあつさりとしたものになつてしまふ。それをこんな風にいへば、如何にも折つてから後の作者の自責がよく響く。

評　待つ人も來もしないのに來るあてに、折角鶯が啼き寄る花の枝を、つれなくも折つたことよなあ、（斯うと知つたら、手折ることを止めて、せめて鶯の定宿にもすべきであつたものを。

評　この歌從來定まつた解がない。季吟の抄、

一、待人もこぬに鶯の人來となくにばかされて花を折たるとなり。

二、又說、待人もこぬに、鶯のひとくとなきつるか、空だのめなれば、今はと花を折たるといへり。

などがそれである。又古註には見ないが文字通りにとると、

三、待つ人が來たら見せようと大切においてゐたが、一向にやつて來ないものだから置いておいても仕方がないと思つて滋々折つたが惜しいことをしたもんだ。

ともなる。けれども最も妥當なのは鄙言の、

四、折て置て見せふとおもふてまつ人も、こぬことじやにかわいそうに、鶯が鳴て居た花を折てのけたる哉。さて〳〵殘念な事をした。

といふのだと思ふ。要するに待人が來たらば見せようとあらましたのは花の立木のまゝなのでなくて、折取つて花瓶に挿した處をなのである。そこへ待人が來れば何もいふことはないのだが、待人は來ぬは、鶯の定宿はなくするはとなつて虻蜂とらずの悔――就中折角の花をあたら臺なしにしたといふ悔である。後撰の、

ことならば折つくしても梅の花わかまつ人のきてもみなくに

とあるのは立木のところを見せようとして、待つ人が來ないので、こんな事なら折つてしまはうといふので情は似て居るが見せようとする花はこゝとはちがふ。又同じ後撰卷三春下一三八に藤原雅正が紀貫之に贈つたもの、

ともにこそ花をも見めと待人のこぬ物ゆゑに惜き春かな

とあるはこゝの同類だが修辭は遙かに劣つてゐる。さてこの歌は、この樣に歌つて、その違約の友へ宛てゝ婉曲な怨みごととして遣はしたものと見れば一段と妙であらう。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

一〇一　さく花はちくさながらにあだなれど誰かは春を恨はてたる

藤原　おきかぜ

考　詞書・作者　興風集「寛平の御時の中宮の和歌合に」

春　下　一〇〇・一〇一

元「寛平御時歌合に　○○興風」

初句　顯・崇德院御本朱書・清朱書「さくら花」

五句　元「恨みはてける」

寛平歌合春九右　　同。

新萬下、折花者乍千種丹泛成砥誰革春緒増（憎歟）周忌垂（恨果多留ル）（不惜去里藝留イ）

類　藤原おきかぜ　興風は生死の年を詳にせず。父は道成、曾祖父は參議濱成、彼は院藤太と號し、延喜の始め治部少亜・上野大掾・下總權大掾同十一年相模掾（歌仙傳には六位、河内大掾とあり）管絃をよくし、彈琴の師となつて居た。その歌木集に十八首も採られ、爾餘の勅撰集にも入選して居る。家集を藤原興風集（群三六一、九、一〇〇七——一〇〇九、續國四四〇——四四一）といふ。その歌風一帶に纖細巧緻、よく古今集振を發揮し、時には華麗にして、寧ろ新古今振とも謂ふべき咏もある。さく花は「さく」は音數上輕く添へたもの、こゝな「さくら花」として同じ櫻の中にも亦千種樣ある心など說いた古註はうけられない。ちぐさながらに千草でなく千種である。その種類がいろ〳〵あるとの意、草花あり木花あり、早咲あり遲咲あり室咲あり、野花あり山花あり、更にその細小別をも含んだことば「ながち」は全部悉くの意の限定助辭「に」は上句を副詞化する限定助辭。あだなれど　はかなく移ろひ易いけれど。誰かは云々　誰がその花を咲かせる春が恨み切るやうなことをしよう。誰もそんな者はない。

評　春咲く花はどの花もこの花も悉くあだなものばかりだが、さりとてその樣な花を咲かせる春を誰が恨み切るやうなことをしようぞ、誰もそんな者はなく、矢張悅んで春を迎へるものだ。

評　これが人ならばあだなものは直ぐ對手に怨まれる處だのに、春の魅惑は測り知られぬものだと解けば着想奇警にして詩趣も生動して覺える。唯下句は語調きつく何となく喧嘩越のやうな口調で面白くない。

一〇二　春霞色のちくさに見えつるたなびく山の花のかげかも

考　新萬上「春霞色之千種丹見鶴者棚曳山之花之影鴨」

霞光片々錦千端。來ゝ舞名花玉彩班。遊客廻眸猶誤導（道ル）。應斯丹穴聚鴻鸞。

興風集　六帖一霞・寛平歌合一九左　　同、

類　たなびく山　春霞がたなびいてゐる山　花のかげかも　花の影であらうか、嗚呼美しいことよ。「かも」を「鴨」とあてたり、感歎助辭としたりするのはよくない「か」は疑問で「も」だけが感辭である。

評　春霞が紅白斑々の美を呈して居るのは、そのたなびいてゐる山の花々の形が映つてゐる故であらうか。あゝ美しいこの眺めよ。

評　これは后の宮の御殿の築山の景色を賞めた咏だといふ說（富樫廣蔭）は新撰萬葉の左詩と、「寛平の御時」の詞書からの臆測であらう。けれども若しそれならさうと斷りがあるべきだと思ふから、矢張詞通り春山遠望の歌としておく。

歌の想は丁度絹雪洞の火を賭る樣な、さにつらふ少女が顏の薄化粧を見るやうな優美さがある。類咏には續恰遺二春下九六、文永四年內裏の詩歌合に春日望山從二位行家

見渡せば色の子ぐさに移ろひてかすみをそむる山櫻かな

一〇三　霞たつ春の山べは遠けれど吹くる風は花のかぞする　　在原元方

考　三句　爲「とほければ」

新萬上「霞立春之山邊者遠藝謨砥吹來風者花之香曾爲」

六帖一春の風・寛平歌合一五左　同。

評 霞たつ　已に春の景氣催せることと、作者の位置より距離隔つてゐること（三句）を示す。春の山べは　「花の薫りは」と對照的に措かれたもの。遠けれど　初句と呼應し、薫は「近けれど」といつた氣味の對照となる。吹くる風は　字面上二句と對照的に按配せられたやうに見えるが華竟「花の薫りは」といふ眞の對照感を作る素地として措かれたもの。花のかぞする　二句と對照して

山邊は遠けれど
花の香は近し

としたもの。それと同時に作者の花にあこがれてゐることを仄めかして居る。

語 春霞たつ山邊は大分遠いけれど、あのあたりから吹いて來る風は早くも花の香をもたらして、かの薄靄の奥の春信を傳へて來るよ。

評 開幕を待ちこがれる觀客が緞帳を洩れて見える時姫に悅喜するやうに、花を下待つ作者は霞をもれて來る花の香に胸とゞろかしてゐるといふのであらう。實に春先の快晴には　まるで空だきものした廣い室に居るやうにやは吹く風にえならぬ薫香の脈々たるものがあつてこの歌は作者の作意以上に春の情調にふさはしい秀咏だと思ふ。

うつろへる花を見てよめる

一〇四　花みれば心さへにぞうつりける色には出じ人もこそしれ

考 元永本にはこゝに左の一首を入れてある。

貫　之

月かげもはなもひとつに見ゆる夜は大虛をさへ折らむとぞする（五句傳爲相雜木折らむとぞ思ふ）

按ずるに、この歌貫之集にはなくて、六帖第六に貫之として外の歌二首をあげ、その次に「おなじ人」として、

月影も花も一つに見ゆる夜は孰を分きて折むとぞ思ふ

として、次に又「貫之」として三首、「つらゆき」として二首、「貫之」として二首あつて次に躬恒の「心あてに」の歌があがつて居る。どうもしどけない擧げ方だが、この方ならば、まだ貫之の咏として肯かれるが前の下句の放膽な荒削り式ないひ方は、どうしても貫之ではなく寧ろ躬恒の作とでもいひたい位だ。秀咏にはちがひないが、貫之作といふことはどうであらう？

詞　元「うつろふ花を見て」

三句　三傍注・相・餘材抄「うつりぬる」

六帖六花「花見れば心さへこそうつりぬれ色には出しと思ひし物を」

同　躬恒「花見れば移る心は色に出てあだには綾な人に知るゝ」

語 うつろへる花　落花とも解するが、こゝは色褪めて散り方になつた花ととる方が穩當であらう。花みれば　花を見ると、これには「外の物ほとにかく、この花を見る時に限つて」と深く思入つて區別をした氣味はないと思ふ。心さへにぞ　「さへ」は當の花が已にうつろひつゝあることを巧に言外に含めたもの。うつりける　花の移ろふと共に我心迄が之に拘つてオヤと驚きハツと驚きハラ〳〵と危み花次第に動いて行くのを、どうすることも出來ないといふ程の氣持。色には出じ　心には思ふとも顏附素振には出すまい。人もこそしれ　「も」は咏歎「こそ」は强意の指定、二つ連れて云々のこともあらうと推定して警戒する意となる、も」と「ぞ」と連なつたものも「雨もぞふる」など同じ用法がある。

評 うつろふ花を見てゐると、吾心までも花と共に移ろふばかりときめきせられてならぬが、たしなんでそぶりには出すまい。花故にかくの沙汰と見ては人は物狂ほしの態よと笑ひもしよう程に。

評 花は移ろひ方となれば色に出るけれども、我は心に悲しむだけで色には出すまいといふ。その實は色に出したい

程惜しまれてならないのである。落花に寄せた春愁と解くべきであらう。唯趣向がきゝすぎて稍尖巧の失がある。心、花と共に移ろふといつた趣向を現代歌人に求めると木下利玄氏の、

雲みつゝ人な思ひぬ雲消えぬ人消えしかとふと思ひぬる

といつた「我心雲と共に移る」と様の歌が近い。

これを行きずりの美し女に心を搖かした歌と寓意に解することは（詞書から推せば）當らない。

題しらず　よみびとしらず

一〇五　鶯のなく野べごとにきてみればうつろふ花に風ぞ吹ける

考　なし。

通　なく野べごとに　なきと啼く野邊を普く來て見ると下に「宜なるかな」と樣の句を補ふ。うつろふ花に　「に」は添加の意、花は今にも散りさうな上に。風ぞ吹ける　花を散らす風が吹いてゐるなり。

講　鶯の啼きと啼く野を來て見れば、（啼くのも道理）野邊の木々の花は今し散り方となりお負けにそれを散らさうとして風が吹いてゐるのだもの。

評　偶と春郊に漫歩の杖を曳くと、折節風吹き花散りて處々に鶯の音も聞えるといふ程の實況から練り上げてこの好調を爲したもの。

一〇六　吹風をなきてうらみよ鶯はわれやは花に手だにふれたる

考　六帖一のこりの雪・六帖六うぐひす　同。

通　吹風な　花な散らさうとて吹く風なば。なきて　は「啼きて」な「泣きて」とからませたもの。うらみよ　我かうらまずしてあの風を怨めよ。鶯は　鶯よ汝はといふ氣味だが「鶯よ」としては二句の終の「よ」と重なるから避けたものか。われやは云々反語の句で、自分があの花に一寸でもさはつたことがあらうか決してそんなことはない。

評　落花の責任者を明らかにして鶯といふ美の女王に「私ではありません全くあの春風のしたことで」と辯疏する、その仰々しさが即ちこの歌の逸趣となつて居る。而かも斯く鶯にいひ解くのは、鶯の聲そのものを折節の景氣と相俟つて落花を悲しむと如くにとつたもので、而かく解する所以はとりも直さず作者が春愁の反映であるから、この迂餘の間いひしれぬ妙味がある。

尙早見を以ていへばこの歌前の一〇五と相俟つて同一人の手になつた一對の聯作と觀て一段と面白いものがある。前のは「鶯のなく野邊毎に來て見ると散り方の花に春風が吹いてゐる」とある。後のはそれを受けて「オイ鶯よ、其方の目ざす仇はその風だぞよ、吾は汝の秘藏する花には指一本でもさへはしないぞ」といふ。

たとひ同一人の作でないとしても、撰者が排列の用意も肯づかれて好配合である。

一〇七　ちる花のなくにしとまるものならば我鶯におとらましやは

典侍治子朝臣

考　作者　元「菅根朝臣」
　　筋「藤原菅根」
　三句　相「とまる物なれば」
　五句　筋・新撰「おとらざらまし」

雜 典侍洽子朝臣　春澄善縄の長女、始めの名は高子、後、中宮の御諱に御遠慮申して洽子と改名、(世に糸所ノ別當ともいふ) 元慶元年十一月廿二日正五位下、仁和三年正月八日從四位下典侍、寛平八年正月　日從四位上、延喜二年正月九日從三位（この時典侍に昇等したものか）本集中歌はこの一首だけ、一本にこゝの作者菅根とあるが、確證なしには何ともいはれないが、歌そのものに即して觀れば、どうしても女性の作といひたい。なくにしとまる「し」は強意。泣く位な事でサ止まるものなら、といつて現に鶯の啼いて居ることをも含めたもの。おとらましやは　劣らむやは、劣らじ、劣らうか、劣りはしない。より以上に泣いても見たいのだがといつて「けれどもそれ位なことでは留まらないのだから悲しいながらも泣寢入にあきらめてゐるのだ」と餘韻を曳いたもの。

重 泣いて落花がとまるなら、わたしも泣くのに鶯に負けようか（鶯以上に泣いても見よう）けれども、そんなことで留まるものでないから已むなくだまつてじつと辛抱してゐる。

評 金子氏の「脂粉の氣ありて意僥か」と評せられたのが適切である。彼の三英雄に擬した時鳥の句の中秀吉の

啼かされば啼かして見せう時鳥

は如何にも意志的であるが、それ程でないにしても、九九の惜花の咏にはまた男性らしい積極的な依囑が歌はれて居るがこゝの咏となつては、ひたぶるに感傷のあえかなものがあつて別趣の優情味を示して居る。そしてそが底意には、風物推移の大法は區々人力の之を如何ともする能はずといふ悲哀の底の諦觀が漂うて居る。さてはかの唱歌「暮春感懷」の

惜しめどかひなし暮れ逝く春は
なげけど術なし散りしく花は
逝け〳〵〳〵心のまゝに
散れ〳〵〳〵〳〵思ひのまゝに

とあるのとも相通じた着想とも謂ひ得よう。

仁和の中將のみやすむ所の家に歌合せんとてしける時によめる

一〇八　花のちることやわびしき春霞立田の山のうぐひすのこゑ

藤原後蔭

考 作者　清、下には何もなく、頭に「フヂハラノノチカケ」とある。

詞　清「……よみける」

元「仁和御時、中將みやすどころのいへの歌合せむとしける時よめる」

二句　六帖二山鳥「事や悲しき」

四句　新撰「たつたの山に」

五句　六帖二「山鳥の聲」

雜 仁和の中將のみやすむ所云々　こゝは元永本の詞書の方が筋がよく通る。仁和は光孝天皇の御代の年號で女御更衣などで、その父兄が近衛中將に在官して居て、已れは君龍を得て御子を擧げた方があつたその御邸宅で御催しになつた歌合といふことで「せんとてしける時に」といふのは、歌合の計畫ばかりあつて、何かの事情で沙汰止みになつたけれどもその歌合に出すつもりで咏んだ歌といふ程の心持だといふ。そこで一一四の素性の歌の詞書に倣つて「て」を省いて「せんとしける時に」とあるべきだといふに諸註は一致して居る。更實を確めるまで暫らく後考を俟つ。藤原後蔭　中納言有穂の二男、母は肥後介安倍興氏女、目錄によつて官歴を表示すると、

寛平　七、　二、一一、　大藏大亟
同　九、　五、一七、　藏人
同　九、　七、一〇、　叉藏人（先帝藏人）
同　九、一二、一三、　左近將監
春　下　一〇八

延喜　二、　正、　七、　從五位下
同　年　　越中介
同　三、一二、二六、　左馬助
同　七、　二、？　　左兵衛佐
同　一〇、　正、一一、　右近少將
同　一一、　正、　七、　從五位上、同月兼越前介
同　一二、　正、一五、　兼讃岐介
同　一二、一二、？　　藏人
同　一七、　正、　七、　正五位下、兼信濃權守
同　一九、　正、　七、　從四位下、備前權守

花のちることやわびしき　花の散るのか淋しく難儀に思ふかして、この句の續け樣二句の三字目で意が切れるやうになつてゐるのは拙いと思ふ。春霞　「立つ」の秀句で「龍田」の枕詞においたものだが、事實春霞がたなびいてもゐるのだから、有心の枕詞とも謂ふべきもの。立田の山　普通「龍田山」と書く。大和國生駒郡三郷村大字立野の西にある高嶺今日の黑瀨越といふに當る。曇に櫻に紅葉に名高く、伊勢物語の「沖つ白波立田山」を始め多く文學に採られて居る。

評　春霞こむる立田山のあたり鶯の聲がこゝかしこにきこえるのは、さてはこの節花の散るのをわびて啼いてゐるのであらうか？

評　四五句「たつたの山に鶯ぞなく」などしても可ささうだが、さうしては近景ともなり、或特定の鶯ともなるから遠くから聽いて、こゝかしこに鶯梭の繁きに耳を假す趣とはならなくなるからの作意であらう。春愁としてはありふれた着想ながら、名所の立田山を採つたので、景氣も引きたち、句調もよく整つて居る。但初二句は如何はしいこと語釋で云つた通りである。

鶯のなくをよめる

一〇九　こづたへばをのがは風に散花を誰におほせてこゝらなくらん　そせい

考　詞　素性集「鶯の鳴きし日」
三「……よめる」
元「鶯の啼くを」
初句　六帖「うぐひす」「うぐひすの」
二句　顯「をのがはぶきに」
五句　元・筋「うぐひすのなく」
六帖六花　同。

評　鶯のなくをよめる　鶯の啼く音を味聽した歌だと斷つたもので、已に詞書にかうある以上、歌の本文には「鶯」とあげる必要はないから、歌詞は流布本のまゝが宜い。（尤も詞書と歌詞と重複した例とても澤山あるにはあるが、それは拙いと思ふ）。こづたへば、木傳へば枝づつりをするものだから（若しそんなことをしないで、ぢつとしてゐるならば散りそげにもない花だのに）。をのがは風に　鶯自身の羽ばたく風によつて、「はぶき」は羽ばたきに比して少し荒々しい語感がある。散花を　花が散るのだのにそれに。誰におほせて　誰に負はせて、誰に責任を着せかけて、「課せて」として少し意がちがふ。花の散るのは誰の故だとして。こゝら　許多と宛てて、澤山といふのだが、こゝはしばゝくの意。なくらん　「らん」は「誰に」に係る想像で「なく」には係らない。現にあのやうに啼いて居るのは一體誰に負はせるつもりであらう。

釋 鶯が枝うつりをするとその羽風に煽られて花が散るのだのに、鶯は之を自身の故とせず、一體誰にその罪を負はせて（怨むが如く訴ふるが如くに）啼いてゐるのであらう。

評 この花は盛りの花だと推した（契沖）のもよろしからうが、寧ろ盛りとも散り方とも定めたい唯梢頭の花と解くが宜しからう。一〇六と酷似して今少し悠容都雅の詩趣あるもの。

うぐひすの花の木にてなくをよめる

一一〇　しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみ散る花ならなくに　　みつね

考 詞　元「鶯の木に啼くを」
三句　六帖一のこりの雪・六帖六うぐひす「鶯は」

釋 詞書は元永本のでよく聞える。否單に　鶯の啼くを」でわかつてゐる。しるしなき　驗無き、何の役にも立たない。ねなもなくかな　音をたてて啼くことよ。初句は「ね」の修飾句だから本來は「ねにもなくかな」としたら宜い處だ。鶯の　この句を一なくかな」の上において解け（契沖）とあるが、これは寧ろ初句の前におくべきであらう。ことしのみ散花ならなくに　ことしばかり散る花でもないのに、即ちこれまで、何れの春として花の散らぬ春はなかつたものを今更のやうに啼いてゐることよ。

釋 鶯が何の驗もないのに音をたてゝ啼いてゐることよ。何も今年に限つて散る花といふ譯ではなく、これまでとても毎春散つた花だのに。

評 この餘情「さても愚かしき鶯よ」ととれば詞書に對してはよく當て嵌まるが、詩致が乏しくなる。啼いて止まるものなら目分とてもお前には負けず泣き止めようがと一〇七に近い　但彼は女性的此は男性的）未練の餘情と解いて趣があると想ふ。殊に下の句のいひ廻しに作者がこゝらの春を散る花に傷心した風雅の感傷を裏書した氣味が面白い。自分が落花を惜しむ情を投げて鶯も同じ惜春の情になくととるのは、この前後おしなべての類想である。同じ躬恒の續後撰三春下一四、

　啼とても花やはとまるはかなくも暮ゆく春の鶯のこゑ

とあるはこゝを練つたものと思ふが感味に於ては稍弱い。

題しらず　　よみ人しらず

一一一　こまなめていざみにゆかん故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

考 元永本・筋切には次のた註がある。

「此歌、或人のいはく前太政大臣のとなむ」
初句　古典本「駒並め」「駒なべて」
三　六帖二敬繹・新撰「駒なべて」

釋 こま　小馬・仔馬など宛てて子馬のことをいつたものが後には通常の馬をも「こま」といひ「駒」と書くやうになつた。更に下つての世は「馬」といふ所を「駒」といふのは「猿」を「ましら」といふやうに一種の美化法と採るやうになつた。けれどもこの集の頃さうした美化的な修辭として「こま」としたかどうかは疑はしい。一體「うま」でも「むま」でも頭音はあまり引きたたないから咏んではつきりした語を插ばうとすると「こま」の「こ」の方が優れて居る。で、こゝはまあその程度の語感から「こま」としたものではなからうか。なめて　並べて、並べて、並めてと轉じたもので、乘駒を並べてといふのは即ち同志の一行誘ひ合はせて　との意、當時の風俗として遠行には馬を乘用すること宛かも、現代人の自轉車・自動車の如き觀があつた。いざみにゆかん　さあ見に

行かう、他を誘ひ促した語で同時に本人自ら非常に意氣込んだ氣はひが見える。故郷は　讀人しらずの時代は略王朝初期と推定せられて居るから平安の京人が謂ふ故郷即ち奈良といふが普通で、それが當つて居よう。尤も長岡も故郷だが年限も短かく、花で聞えた處でもない。（鶯は有名だが）雪とのみこそ　雪かとばかりにサ、といふので作者の腦裏已に舊都落花の幻想美に恍惚たる趣。花ぼちるらめ　「花の」としても大した差はないが、一行の目標が花にあることを強く指し當てるつもりで「花ぼ」としたものであらう。花は散ることであうう。

語　サア諸君よ、これから馬を並べて舊都へ遠乘と出かけよう。（舊都では多分）雪と見まがふばかりにサあの美しい花が散つてゐることであらうよ。

評　その花散り盡しては六菖十菊何の詮もない。思ひたつ日が吉日、善は急げだ、サア早く〳〵とまきたてるはやりかな情趣が匂うて得もいはぬ輕快さがある。舊都に執着ある王朝初期の人か、青春の佳期を豐かに暮らさうとする弘仁の貴公子か、春興一室に籠居するに堪へない風流才子か、それは何とも確言されないが、元永本左註にも、古今集讀人不知考にも前太政大臣良房とある處からみて恐らくはその人の咏であらう。行く春を舊都に惜しまうとする着想が已に詩味充分なる上に、巧を求めぬ措辭の輕快が一首の佳調となつて居る。

一一二　散花をなにかうらみん世中に我身もともにあらん物かは

考　二句　元「啼きて恨みむ」
四句　清「わかみも人も」
なにかうらみむ　何怨まうぞ怨みはすまい、「か」は反語、この句の下に「よし散らずに在りとても」と補ふ。我身もともに我身とても、その散らずに在る花と共に。

語　散る花を何怨まうぞ。何も怨みはすまい。よしや散らずに在りとても、我身も一緒に常住であることが出來ようか、（到底出來ない相談だから。

評　暮春落花に對して、一旦は怨んでみた人が、更に佛教的に反省して自ら慰めた歌なのが、反語を二回つかつてその最後の「かは」によつて、自ら慰めた作意は寧ろ自らはかなんだ落想になつて居る、なるほど花に常住の赫灼なく、人に永遠の青春なしであるから一首の想は妥當であるが、餘り分別臭く抹香臭くて、どちらかといふと後の撰集釋教の部にでも入れたい歌である。

一一三　花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに　小野小町

考　詞　小町集「花をながめて」
百の九・狂言標證ひ・卅六　同。

語　花の色は　「折角樂しみにしてゐた」花の色は。うつりにけりな　移ろうてしまつたことよ。マアあんなに早や散り方になつたなア。いたづらに　下の「ふる」に係る副詞だが上の「うつり」にも響く。下に係つて此といふ我望みの充ち足らひも無く、上に係つては、いつといふ滿足に花見をすることもなく、我身世にふる　世に經る。身過ぎ世過ぎにうき身をやつして、ながめ　物思ひの眼で空を見つめる意の語、「長眼」の義で、心に屈托のある時、瞳が一つの物に見入ることをいふ。漢語に「天を仰いで長大息す」といひ、管公の詩に「時々仰ニ彼蒼一」とあるあの氣持をいふ。そしてこれを「長雨」にかけたもの、長雨又霖雨とも書く、もと三日以上降りつゞく意。

語　折角待ちこがれてゐた花はろくに滿足に見はやさないのに、降りつゞく春雨に世の物思ひにくよ〳〵と暮しく〳〵

してゐる中に、アレ早やあのやうに散り方になつてしまつたことよ。

評 この歌の着想については二つの觀方がある。一つは單なる惜花の咏ととるもので、今一つは、此に作者容姿の衰へを寓したととるものである。前の一例として契沖のをあげると、

さて、小町がうたにおもてうちの說ありなどいふこと不用、只花になぐさむべき春をいたづらに花をながめずして、世にふるながめに過したりといふ義なり。

とあり、後の例として季吟のをあげると、

……下の心はいたづらに我身世に人をうらみかこちうちながめ過る間に、花の色なりしかたちのをとろへぬると我身を花によそへてよめり。

とある。が、撰者の解は正に契沖と同樣專ら花を愛惜した字面だけといふにあつて、さてこそ暮春の歌のあたりに位置させたものであらう。けれども作者が若い女性であり悲戀の女主人公であるだけに「春日經過の感」に籠る怨嗟は我々木强漢か「とうゝことしの花は見損なつて惜しいことをした」といふのよりは情趣の深いものがある。唯美に生きた王朝人は、別けても容姿の美を生命とする王朝の佳人は……歲月經過に寄せる感慨の一段と深いものがあらう。クレオパトラの鼻が若し一粍低かつたならば、世界の歷史は文字を變へなければならなかつたであらうし、舊年逝き新年來るといふ一般的なことでも、男子の靑壯年の人々には大した衝動にならないが、女子にとつては十九の歲が明けて廿歲になることは大變な生の革命とも謂ふべきであらう。作者も亦それに近い主觀を以て字面の春愁を裏つけた氣味があつて讀下何となく肉體の秋に對する悲歌のやうな餘韻を覺える。四個の「に」文字層々と重りながら而かも聊か耳障りの嫌なきは修辭の巧みさとも褒められて居る。

仁和の中將のみやすむ所の家にうた合せんとしける時によめる

そせい

一一四　をしと思ふ心はいとによられなんちる花ごとにぬきてとゞめん

考 詞　清「仁和の中將のみやす所の……」

素　集「仁和寺の中將の御息所の家に歌合せむとせし時に花のさかりに」

元・筋始め「仁和御時」下「よめる」の三字なし」抄「……せむとてしける云々」

二句　清・元・筋「心も糸に」

六帖六花「心ぞ糸に」

五句　六帖六「ぬきてとむべく」

新撰　同。

語 をしと思ふ　散る花を惜しいと思ふ。心はいとに　我心は絲に縒られれば宜いものを、（さすれば）ぬきて　貫きて、その絲にさし通して

評 （落花を人一倍に惜しむ）我心は絲に縒られてほしい。さすれば散る花の一つ〳〵にその絲を通してとめようのに。

評 落花を惜しむ者の常として、若しも出來ることなら春風をして、花の木だけを除外せしめたい　九九の咏）とも思ひ、ならうことなら散る花を、絲針金のやうな細い强いものでしつかりと枝にくつつけて置きたいなども思ふ。この想が湧いてから、次々出來た趣向がかうした詩形となつたもので、上の句の聯想稍繁鎖の嫌はあるが、この繁鎖があつて、下の句の散る花の片一つにすら心から愛惜してゐる作者の心境がよく響く。從來の諸註は、この歌を以て、漢語の「心緒」から想ひついたとか、小供が落椿などを絲に通して繫ぐこと宛も紙の折鶴を幾つも繫ぐのと同じ趣なのから想

ひ寄つたと様に解くが、さうした感じから、この形式がおちついて妥當に受容されるといふ意味ならば當つても居ようが、作の酵母は右述べた、散る花をしやの餘りに得た想ひつきがあつてそれを中心に、聯接の恰好な形を整へたものだと思ふ。類咏には伊勢集に、

より合はせて泣なる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなむ

といふがある。これには長い詞書がついてゐて、七條后の崩御を哀しみ奉つたものである。

しがの山ごえにて女のおほくあへりけるによみてつかはしける　つらゆき

一一五　あづさ弓春の山べをこえくれば道もさりあへず花ぞ散りける

考　詞　清「……あへりけるに……」
元「よみて」の三字なし。
顯「しがのやまごえに女どもの……」
六帖六花　同。

集　しがの山ごえ　志賀の山越、近江滋賀郡滋賀村の山で、北は比叡山に南は長等山に連なり、嶺を越えて西におりると山城國愛宕郡白河村となる。その山城側にも淨土寺といふがあるが、近江側にある崇福寺は一名を志賀寺と謂ひ、天智天皇の御建立に係る者で當期はこの平安京からこゝの寺詣りをする者が多かつた。その通路の山路が即ち志賀の山越で上り下りが一里十四町、櫻に紅葉に風勝の地として古來歌集を賑はして居る。堀河次郎百首や六百番歌合にこの山越の咏を「春」之部に入れたのは、やかでない。こゝは秋にも見所あるものをとの非難があつたとあるが、それはとにかく、こゝのは暮春の歌として動かぬものであることはこの詞書で明らかである。さてこの山越はずつと舊幕末まで風騷の士の試みたものと見えて、桂園奥書に頼山陽が

親も子も老の涙よる志賀の山三たびこえけることぞ嬉しき

といふ咏草に歌の師景樹の點を乞うたところが「初二句作爲に過ぎて調をこわす憂がある」と謂つて「たちちれの母と打つれ」と直し、下の句を激賞して「これは貫之と雖も及ばない」と謂つたとある。道筋に多少の相違はあるが明治に入つてからは琵琶湖から南禪寺へかけて疏水工事が施設せられて舟行の便も開けた。女の多くあへりける　例の志賀寺參詣の女連で貫之自身も亦恐らくは同じ寺詣り道であつたらう。そしてその女達は彼の知人ではなく行きずりの京女の群と想ふ。多少の面識や見知越はあるにしても、斯うした程度の行路の行合人に歌でも咏んで送らうといつた處に當期の終暢さも忍ばれてをかしい。あづさ弓　「はる」の枕詞。はるの山べ　山の名を詞書に讓つて、こゝには季節を限定した。越えくれば　越えて往くといふのだがその日吻何となく峠より彼方下り坂に向つてからのやうに想はれる。息喘ぎ〳〵の登り坂ではなからう。それは「越える」といふ語でもわかるし、大體歌をよむ心といふものが登りの無餘裕に涌くものでもない。道もさりあへず　道を去らうとして去ることを得しないといふ語義で、文法上からいふならこれは下の「花」即ち「女」が道も去りあへずとなるのだが、一首咏み下しての感じは作者自身道を避けようとしても避けきれないまでにといつたものと想ふ。花ぞ散りける　山花繚亂として散つてゐましたよ。（花にも譬ふべきあなたがたの御一行に落合つて、イヤどうも一舉兩得の儲け物をしましたわい）

評　着想も修辭も平凡、唯卽興の輕快味がとりえであらう。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

一一六　春の野に若なつまんとこし物を散かふ花に道はまどひぬ

考　詞・作者　元「寛平御時、歌合の歌　貫之」

春　下　一一五・一一六

筋「同人」

三句　元・筋「來しわれは」寛平歌合四右「こし我を」

結句　六帖二春の野「道もまどひぬ」相「みちまどへもや」

考　若な　前に謂つたやうに、春さき食用に摘む草の新芽の總稱。若菜といふと何となく正月七日や早春のやうに聯想せられるが、中春晩春の蕨やおはきなもこめていふ。新撰萬葉に若菜を咏み込んだ歌の左詩に「春蹕採ル蕨盈レ囊」などもある。こし物を來たのに、それに、この謂ひ方は作者の主觀裡に自省の動きを示したものだが、實際の歌境では落花の路をチラと見初めた時とも、又さうした野徑に快い逍遙をつゞけてゐる中の想ひつきとも推測される。散かふ　散り合ふ。澤山に散つて花又花の趣。道はまよひぬ若菜つみをする路をふみまよつたといふので、家路とか往先の道勝手とかにとるのは宜くない。

講　春の野に若菜摘みに來たものが、つひ、落花の夥しさに道はきちがへて、飛んでもない野道をさまようたわい（これではとんと花見といふものだ呵々）

評　春興飄逸の佳咏、若菜は俳句にしては實生活と結合させた、

初市や雪に漕ぎ來る若菜舟　嵐蘭

蒐翦にけふは買りかつ若菜かな　芭蕉

小わらはの物は買ひよき若菜哉　召波

の様なものもあるが、歌の方では大抵中流子女享樂の題材となり、この頃に至るまで男子迄も摘んだものである。そこで若菜摘のあてが外れて花見になつた處が格別その日の暮らしに影響する氣づかひのない人が、會々消閑の口實として若菜摘みをだしに出かけたものの、落央の繽紛により以上の興趣をそゝられたといふ、この歌は以て王朝悠々の氣まぐれを表して面白いと想ふ。

山てらにまうでたりけるによめる

一一七　やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散ける

考　詞　元・筋「山寺にまうでたりける夜よめる」

四句　清「ゆめのうちにそ」

帖二やどり　同。

講　山てら　山里にある寺。やどり　宿取りの略か？　我家以外に寢泊りすること。春の　下の句の落花に呼應することば。れる夜は　の「は」は夜を強調して他と區別する意はない。これは二句以下「は」の前までを一句と見て、それを他と區別した云ひ方で、その區別の中心は寧ろ「春の山邊」である。否「春の」である。夢のうちにも　の「も」はさめての現には勿論の意、夢に正夢といふがあつて晝間落花を見たり、又落花を案じたりした生活を反面から寫した手際が美しい。

講　春の山邊にとまると、頃しも落花頻つて、晝間は勿論、夜の夢にさへ花の散るところを見たことよ。

評　同じ旅寢といつても火葬場と隱亡の宅に近い木賃の木枕とは違つて、山花已に十分の春に開いて、紅葩紫朶梢を辭せんとするこの里この處、夢路たゞならぬ樣實に心にくい歌境だと思ふ。元祿の俳聖芭蕉が松島に遊んで「風雲の中に旅寢するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ」といつて一句、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

と會良の感吟を添へた詩境にも近い。新古今二春下一〇六に躬恒の歌、

いもやすくれられざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつゝ

とあるは此と似てゐるが餘情は貫之のは雅興に富み、躬恒のは感傷が勝つて居る。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

一一八　吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや

考　詞　清「寛平御時の……」頭「無件歌合」
　　作者　元・筋「時文」
　　上句　六帖六花「谷川の流れて來ずばおもほえず」
　　みやまがくれ　みは接頭語「眞」の原意が響いて奥山の意となり「深山」などもいふやうになつた。一九の「み山」などに比べてはこの方は深山幽谷の氣味が強い。（それはつまり一首全體の姿から推測される）奥山かげの。見ましや　見ようか、見はしないが正譯だが、一首讀下しては、見られようか、見られはしなかつたらう。と解きたい。「や」は反語。

評　吹く風花を散らし、流水落花をのせて流すことが無かつたならば、吾々はかうした奥山蔭に咲き殘る花を見ることが出來たらうか？　否決して出來なかつたらう。

評　この餘情「通常風は花の爲め脈ふべきものとなつてゐるが、今の場合は、それとは違つて寧ろ感謝したい」といふのが普通で、又さうした含蓄は否むことは出來ないが、併し主なる餘情は「あゝ、よかつた」といふのである。盡日花を尋ねて花を見ず、あはや失望怨嗟の裡に踵を返さうとする折柄、溪流寸紅を載せてせゝらぐ處、さてはこの奥に花ありと、疲れた足に勇を鼓して、辿り辿ると果せるかな意外の艶容、「あゝよくもあの花に眼がついたことだ。あゝよかつた」と、つひ前の落花流水をふりかへる氣持で感謝とよりは自足の餘韻の方がつよい。美的探險成功の自足とも謂ふべき雅懷だ。一枝の流れ木に新大陸を發見した。コロンブス、一指の指紋に今鼠小僧を逮捕した名探偵等の悦びを趣味に移した風雅の凱歌と解したい。六帖第一に伊勢の歌、

　春風の我宿にだに吹こずばしらぬ里なる花を見ましや

とあるもこれに近いが、この方ならば旨と春風禮讃の餘情を含んで居る。

しがよりかへりけるをうなどもの花山にいりて藤の花のもとに立よりてかへりけるに讀ておくりける　　僧正遍昭

一一九　よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

考　詞　遍昭集「志賀より歸り侍りし人花山に入りて藤の花見はべりしかば」
　　作者　清「僧正へ。せう」元　。。遍照」
　　四句　元「はゐまつはれよ」
　　三「はひまつはれよ」
　　五句　六帖六ふぢ「とかむまをだに」

　　浙撰　同。

考　しがより云々　例の志賀寺詣でをした歸りといふのだが、花山は遍昭の住持して居る花山寺のことで、これは山城國宇治郡山階村（山科村とも）字北花山に在る元慶寺のことで、後年花山法皇の御出家後あらせられた東山の花山寺のことではない。陽成天皇御降誕の時遍昭が祈願して建てたもので、時の年號をとつて元慶寺といふ。在來の註によつて貞上のやうにあげたが志賀寺の還向道京人としては稍南寄のやうに思はれるから寧ろ東山の花山寺であらう。すれば志賀寺歸りの順路でもある）或は一世の知識たる遍昭に歸依せる京の女官などが、春の日永の行樂を兼ねて寺參りと遊山兼帶の歸りかゞ　よそに見て云々　俗にいふ素通りをすること、こゝは藤の花をよそに見たのでなく、その方は一寸立寄つて見もしたものが、住持の遍昭には敢に言葉もかけないでといつたもの。かへらむ人に　「む」は想像でなく未來である。歸らうとする人、歸りかけてゐる人といふので、この歌は文字通りにとると已に數十

歩を歸り途に逕んでゐる人々に後から使して咏み贈つたものと想はれるし、少し場面を想像して常識的に推測すると遍昭をも訪うてやがて「もうお暇――」などいふ。それを住持の遍昭が例の洒脱で亭主の愛想として戯れ咏んだものとも想ふ。何れにしてもこの「む」は未來の方が正しい。藤の花　順當に直すと初句に廻る。本集中藤の歌はこれと次の一二〇と二首だけだ。はひまつはれよ　這つてつき纏つて我に代つて引きとめよ。折るとも　の「折る」はラ行下二段三活で「折れる」の意。

評　（か、汝藤の花よ）これから追つかけて、あの素通りの人々に匍ひ纏うて歸るのを引きとめよ。ナーニそれが爲めに枝が折れても構ふもんか。（是が非でもまつはれ――）

評　遍昭は上代の神々が和魂と荒魂とを具して居たやうに、歌道に於て洒落魂と眞魂との所有者で、こゝのはその洒落魂の表現である。一首凡て剽輕な善謔で、殊に五句の沒理趣なる誇張が可笑味に成功して居る。（これが、人にいひつけたものならば颯風景極まるものなること、恰も大鏡の福足君の役を藤の花に振つたことになる）併し一首の主想は寧ろ作者とそれ等女達との社交にあつて、藤の花の美は少しも表れてない。纔かに四句に「はひまつはれよ」と藤相應のあとらへ方をしてあるが、これは藤の花とよりは藤の蔓を咏んだことになる。又六帖の樣に「とかむまをだに」とすると「あまり名殘をしいので汝がはひまつはつたならば、それを解くためにためらふであらう、その暫らくなりと見てゐようにとなつて若し相手が一人特別の女性ならば全然後朝の戀歌のやうなものとならう。（本集一〇八〇のやうな……）

家に藤の花さけりけるを人のたちとまりてみけるをよめる　　みつね

一二〇　我宿にさける藤浪たちかへりすぎがてにのみ人のみるらむ

考　詞　元・筑　家に藤花の咲きたるを人の立ちよりて見ければ」

五句　打聽「見ゆらむ」

六帖六ふぢ　新撰　同。

語　藤浪　藤の花のこと、花房が浪のやうに靡いてゐるから藤浪といふ、或は藤が風に靡いて居る貌から「藤靡き」の意だともあり（打聽）もと〳〵藤その物の木名で、花がよくしなふからいふともあり（正義）又藤浪は「淵波」の秀句で名義は浪のやうな藤といふ始めの通りだともあり、それは穿鑿に過ぎて居る、池の邊の藤ならともかく、たゞの宿の藤にそんなことを謂つてはあまり技巧が繁鎖に過ぎてゐる（金子氏）ともある。成程「淵波」の秀句と見れば次の「たちかへり」の序詞ともなるが、この秀句が初句に對しては何の聯繫も無いものになるから可けない。後撰三春下一二七に貫之

　竿させど深さもしれぬふぢなればいろなば人もしらじとぞおもふ

などはその二首前の詞書に三條右大臣兼輔の邸宅の「藤の花さける遣り水のほとり」でとあるから似合はしいが、こゝでは始めいつた通り、單に藤の花と解いて、それを「藤浪」としたその「浪」が　句に對して序詞的に働いて聯接をしつくりさせたものと見るが宜からう。たちかへり　上の「浪」に對して「立ちかへり」といふこれの「立ち」はまだ眞動詞だが、それを轉じて人々があとかへりをするといふ意、した句で此方「立ち」は唯接頭語である。すぎがてにのみ　「すぎかたげに」の約過ぎにくげに、素通りには出來ないと樣に「のみ」は强調。みるらむ　の「らむ」は「みる」にはつかない、二句の終に「など」とか「何故に」とかを補つて、それに呼應する想像と見る。

評　自分のうちに藤の花が咲いたのを通りすがりの人が立ちとまつて見たのを咏んだもの、宅に咲いた藤の花をばなぜか通りすがりの皆樣が、素通りしにくげにサ見て行かれるよ。

評　作者風雅の誇りと滿足とが言外に響いて面白い。世には風流自慢といふがあつて、自家の牽牛花や菊の大輪に蟻が天下取つたやうに悅ぶ人があるが、この悅びは本人にとつても純なもので、他から觀ても無邪氣なものである。

題しらず　よみびとしらず

一二一　いまもかもさき匂ふらんたち花のこじまのさきの山吹のはな

考　初句　清「いまもかも」
四句　清・元・筋・顕「小島のくまの」爲・密「こじまがさきの」
家持集「こ島がさきの」
六帖六山吹　同。

評　いまもかも　今も云々であらうか噫、上の「も」は同類併列の「も」で嘗て我が見た時は云々であつたが、今も亦あの時同樣にとの意。下の「も」は咏歎の「も」でその意は最後に嗟歎の尾を曳く「か」は疑問。さき匂ふらん　色香美しく咲き薫つてゐることであらう。たちばなのこじまのさきの　橘の小島の崎の所在につき從來兩說あつて一は山城國宇治の里の山吹の瀨と云ふ所、一は大和高市郡飛鳥の近くだといふ。今この歌の格調古めかしく家持若くはそれ以前頃の人の咏と想像せられる點から先づは大和の方が正しからう。契沖はいふ、

萬葉に橘の島とよめるは、大和國高市郡なり。此歌は古歌の體なれば、藤原の宮より奈良へ都をうつされて後、故郷をおもひてよめるにや。

とこれが妥當な觀方であらう。山吹の花　棣棠、薔薇科棣棠花屬とあつて、落葉灌木、高さ三四尺葉は萩などに近い小楕圓形で、中晩春の交豊麗な黃色花を開く。單瓣もよし八重の方は實を結ばないから太田道灌に答へた少女「七重八重花は咲けども」の歌となつた、山野川岸に自生し、觀賞用として庭にも植ゑる。一說に醾醿といふのは誤である。これは支那の花曆で二十三番で、こゝは十四番の棣棠である。又「歎冬」と宛てるのはよくない。これは蕗のことである。

評　今もあの橘の小島の崎では、（我が嘗て見た時のやうに）山吹が美しく咲き匂うてゐるであらうか、あゝなつかしの彼の地よ、彼の花よ。

評　「たちばな」といふ地名四ケ處もあつて
一、大和高市郡（萬葉二・七　本集この歌）
二、武藏橘樹郡橘樹（萬葉一四）
三、駿河（萬葉二〇）
四、山城宇治郡宇治（源氏物語・平家物語・源平盛衰記等）

今若しこの歌の地理を誤つたならば、折角の鑑賞も根柢から崩れてしまふから、どこの橘の小島の崎であらうと搖きのない、評だけに止めておく。

惟ふに佳節に遇うて曾遊の興趣を聯想するは固と是れ人情の常であつて、今や春闌け、鶯老いて、四山の眺望やゝ寂寞を告げようとするその大自然のだれ場を脊負つて可憐の小公子が豊かな黃金色を呈する美は、上代詩人の眼にも愛顧を惹いたものであらう。まして曾遊の回想は土地そのものの昨是今非と、歌人自身の今昔の感とが絡まつて層一層感慨の深いものがある。あの時は在廷の百官有司口を揃へてほめた花だが、今は誰一人顧るものがなからう。あの頃の自分は幸福であつたが、今ぢや家族は病氣する。友人は死ぬる。山吹が咲いても一向に詰らない。西行が都の秋に遇うて、

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原

と咏んだのも斯うした感慨が多分にこもつて居らう。

一二二　春雨に匂へる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきの花

考　詞　猿丸集「雨の降りけるに山吹を折りて人のがり遣りける」

初句　清・爲「春の雨に」

新撰和歌　同。

釋 句へる　こゝは色の映えて澤々しくなることで、香の句ふことは別に下の句がある。も　すらも、でさへも、だけでさへも、あかなくに　飽かぬに、飽くことを知らずめでたいのにそれにまだお負けに「に」は添加。かさへなつかし　香までも懷かしい。「なつかし」は「馴れ着かま欲し」の意の約か？　そのものを愛して離れ難なの感ないふ。

評 山吹の花は春雨に澤めいてゐるだけですらも飽くこと知らず思はれるのに、その香までも懷しい。……眞に愛すべきかな。

評 美しい歌だが餘情はない。一首の意味字面から隱れた所がない。

一二三　山吹はあやなくさきそ花みむとうゑけむ人のこよひこなくに

考 二句　元・筋「あやにな咲きそ」清・爲・古典本「あやなな咲きそ」

四句　古典本「植ゑけん君が（二字〔イ〕人の）」清「うへけむきみか」三「うゑけん人の」（丹抄大）

五句　元「がよひこなくに」清「こよひこなくに」

六帖六山吹「山吹は綾なな咲そ花見むと植てし君か今宵こなくに」

釋 山吹は　「は」は寧ろ「よ」ときつく呼びかけた方下の句との釣合が宜い。あやなくさきそ　文無く咲きそ、無分別に咲いたりなんかするな。この句は「あやなな咲きそ」が文法的には正しい。「あやなくな咲きそ」の方が宜い。（な――その呼應については　著綜合日本文法講話二八一――二八三に一通卑見を述べておいたから機會あらばあれについて批評せられたい）花みむと　山吹の花が咲いたら見はやさうと。うゑけむ人の　植ゑたであらうところの人。「人の」はこの歌が若し消息歌ならば「君が」と同じである。「けむ」とはあつても多分は「うゑつる人の」といふ程の處で、植ゑた人については確實な處であらう。こゝは六帖のいひ方が宜い。こなくに　來ぬに、來もせぬに。

釋 山吹よ、今宵は咲くなよ、咲いては詰らないぞ、なぜといふに、折角咲いても、汝を見ようとて植ゑた人は今宵來もしないものを。

評 植ゑた人には生憎支障起つたものか？　それなら今宵の開花を明晩に延ばして、その人の心ゆくばかりの觀賞に遭へとなる。けれども多くの註は夜離れをする情夫や夫に怨んで云ひ送つたものだといふ。すれば、あやなくは花にかこつげて相手を怨んだことになるばかりでなく、花に破蕾中止を勸誘するところは、自身とても夫に打ち解けては逢ふまいとの意をこめたもので、一種愛の威嚇とも謂ふべき手練があつて歌としては優れたものになる、が、さうなるとこれは戀の部に入れたくなる）早く萬葉十春相聞一九〇七に、

かくしあらばなににうゑけむ山ぶきのやむ時もなくこふらくおもへば

とあり。後撰七秋下四〇〇にも「男の久しうまでこざりければ」として、

なににきく色そめかへし匂ふらん花もてはやす君もこなくに

とある。（共に讀人不知）何れも類似の闇怨であらう。

よしの川のほとりに山吹のさけりけるをよめる　つらゆき

一二四　よし野川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり

考 詞　頓「……山吹の咲けりけるを」

清「よしのかはのつらに……」

四句　元・筋「底のいろさへ」

春　下一　四一二五

六帖六山吹・新撰　同。

種 よし野川　大和國吉野郡大臺ヶ原・高見二山の水流國栖村に合し西に流れて紀伊川となる。應神天皇以後この附近、國栖村宇宮瀧や下市村に離宮を設けられて以來、風勝と相俟つて有名になつた。山吹ふく　「吹」の壓音が調子を助けてゐる。山を吹き、吹きに吹くと樣の音感がある。そこのかげさへ　「さへ」は岸の山吹は勿論風に散らされるしといつた餘勢。うつろひにけり　岸の花がちると川底の花影もそれにつれて散るといふのは道理上正しいのみならず、その水清澄よく山吹の翩翩を映すことをも現して居る。

評 吉野川では岸の山吹を風が吹くと岸は勿論水底に映る花影までも散つてしまふことよ。

評 行く春の姿の中、一つの新しい清楚輕快を發見した好詠である。「眞に惜しむに堪へたり」と餘情を汲んだ解もあるが一首の咏み口は詫ぶるとよりは興じて居ると思ふ。

題しらず

一二五 かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を　よみびとしらず

この歌はある人のいはく、たちばなのきよともがうたなり。（清ナシ）

考 三句　頓・新撰「さきにけり」

四五句　清・筋・元・六帖五　今はかひなし・新撰「逢はましものを花のさかりに」

六帖六山吹　同。

種 かはづ　序で說いた通り、この頃のかはづは今の河鹿を指したもので初句は下の「井出」をなだらかに出す用意として、序詞的においたもので、河鹿は夏秋にかけて鳴くもの、山吹は中晩春のもの、實景の上では時候かちがふ。井出　山城國相樂郡（今の綴喜郡）井手村、奈良朝時代從一位左大臣橘諸兄公この地を愛し、こゝに別業を營み、又井堤寺を建て、山吹數多を移植せられてから有名になつて（そこの川を玉河といふが）玉河の蛙や山吹は屢々歌人の口にするやうになつた。（尤も今日では東海道沿線玉水驛の邊に水無川と謂つて平素は河床道路よりも高い天上河となつて近くの木津河に合して居るものがあるだけで、河鹿も山吹も昔の面影はない。井堤別業の址も玉川の南約三町に磊々たる礎石纔かに往年の盛大を語るに止まつてゐる）

左註擬作者の橘清友は嵯峨后檀林皇后の御親父で贈太政大臣正一位で、諸兄公の孫に當るから井手に寄せある人ではあるが、他の太政大臣級の人の書き方に比べて甚だなめげな云ひ方だから、これは後人の攙入か、若くは他に別の作者があるのか何れかであらう。契沖は一說に「橘のきよき」と書いたものがあつて此方が正しからうとも謂つてゐる。

種 井出の里に來て見ると、名花の山吹も早や散つてしまつて居る。あゝ惜しいことをした、今少し早く訪づれて（峰の花）の盛りを觀ればよかつたのに。

評 始めから井手の花見を豫定したのでなく、事の序にこの里を訪ねて散り方の山吹を見て「あゝ惜しいこと……」との感じを歌にしたものだと想ふ。それが井手といふ由緒ある處から思入深くなり、又井手とは至密の關係ある橘氏ならば一入感慨があらう。想形共になだらかにして無難の歌。

春の歌とてよめる

一二六 思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしが　そせい

考 清　詞なく左註に「又はあはれといふことをかれいにつゝみもて」とある。（題註には一說として「とてあはれてふこと元永本には詞書なく、左註に「おもふてふことをかれいひにつゝみて」

四句　素性集・元・六帖二野遊・筋・相「そこともしらぬ」

種 思ふどち　互に相信愛する友だち。共鳴する友人。親友・うまあひ。うちむれて　「うち」は接頭語、群れて、集團をなして。

そこともいはぬ　目的地をどこそこと指定せない。旅れ　宿泊、遊山で行きついた處に泊り込むことを。してしが　「が」は希望、して見たいものだ。

語　魂合へる友だち多勢誘ひ合はせて、春の山邊に遊び、どこと當てどもなくぶらついて行き着いた處に泊り込むといつた様な旅寢がして見たい。

評　實に風雅僧の本性を遺憾なくあらはした好咏である。先づ焦點を「春の山邊」におく。そこは黄紅白紫の草花木花が咲いて百鳥千鳥が囀りかはし、春靄ほのに罩めて麗日ほがらに照るところ悠々和暢、想ふだけでも作者のと胸を撼かしたことであらう。こゝに遊ぶに唯一人では折角の清遊も張合がないそこで親友（おもふどち）とあとらへたもので、その親友も一人や二人では興がうすい。五人六人十人と一集團を爲して行かう（うちむれて）と條伴つけ、それも窮屈な豫定を立てて此日のうちに是非どこ〳〵を見ようとか、又は此節の學校遠足のやうに午前八時驛前集合、八時二十六分出發十時半先方着十分間休憩と様なのではのんびりしない。「そこともいはぬ」行きやたりばつたりズムが宜い。而かもその日歸りといふのでは如何にもあわたゞしいから、何處であらうと、氣の向いた方に足を向けて、足の落ち着く處で泊り込まう（旅寢）といふので、條件の多い風雅欲を述べながら讀んで少しの繁鎖を感じない。

尙惟ふに人間には一種「脫線欲」といふものがあつて時に生活の軌道を外れて、亂痴氣騷ぎに興ずるものである。明治初年の鹿鳴館騷ぎ、最近東京日々が募集した新八景の投票騷ぎなどを見ると、そこに人情の無邪氣な非打算的な姿が髣髴する。で、斯うした見地からこの咏を眺めると、如何にも面白い人間性の發露とも謂ひ得よう。

はるのとくすぐるをよめる

一二七　あづさ弓春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな　みつね

考　詞　元「……春のとくすぐることを……」

躬恒集上・六帖一年の暮　同。

語　あづさ弓　「張る」から「春」の枕詞におく。春たちしより　春になつてから。年月の　年光歲華但「年」は口調上添へたものである。若しこの歌を六帖や家集のやうに歲暮の感懷とするなら、年月は一年十二ヶ月を指したものとなる。いるがごとくも　射るやうに「も」は咏歎、射るは初句「梓弓」の緣語としておいた直喩。おもほゆるかな　思はれるなア。

評　春光九十、花とて今日も東山、月とて今宵も歌ほがひ、雨に嵐に、浮かれたり心配したりしてゐる中に暮らしてしまつて、指折り繰れば殘すところ僅かに旬日、「なんと早く暮れたもんだなア」と今更のやうに驚かされるといふのがこの歌境であらう。又さう見てこそ趣もある。それを歲暮のこととして、「今年正月から以來の一歲華流水」の感としては、反省の分子も多くなるし、間も抜けて來る。文選陸士衡長歌行に「年往迅三勁矢一、時來亮急レ絃」とあり、周興嗣の千字文にも「年矢每催」とあるが、この歌はそれ等に暗示を得たといふよりも、梓弓の枕詞から逸氣奔放の才を驅して出來た同趣の歌であらう。

やよひに鶯の聲久しう聞えざりけるをよめる

一二八　鳴とむる花しなければ鶯もはてはものうく成ぬべらなり

考　詞　清・抄「……鶯の聲の……」

元・筋「やよひに、鶯の聲のひさしうせざりければ」

四句　元「いまはもの憂く」

春下一二七・一二八・一二九

語釈　やよひ　彌生草木の彌生ひに生ひる義から來た三月の異名。なきとむる　啼いて散るのを引きとめる二句の「花」を修飾する連体句、之を「啼いたら散ることを見合はせる」と解いたもの（鄙言など）は不可。ものうく　「もの」は接頭語だが、今は「懶く」なを「ものうく」と讀む、大儀なとか、臆空なとかいふ感じ。

講　啼いて止めようにも止める花が今は無いものだから鶯も張合が抜けて啼くのが大儀になつたらしい。それでこの節は一向啼かないのであらう。

評　作者が落花を惜む情を鶯に投げてその啼くは落花を歎くもの、その啼く音の止むは萬花散り盡して張合抜けの爲めと推したもの、この擬人僅に詩脈に通ふものがあるが、稍纖巧に失して居る。

やよひのつごもりがたに山をこえけるに山川より花のながれけるをよめる　ふかやぶ

一二九　花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり

考　詞　元「山川より」を「山川に」

初句　清「花ちれば」筋「花のちる」

二句　六帖一初めの夏「道のまに〳〵」

四句　抄「山にも春は」　木「山にぞ春は」

結句　六帖一「殘らざりけり」

語釈　つごもりがた　月匿り方、月の末の意、尤も晦日と謂つても、大まかに廿日以後を指す。さて當時は正二三の三ケ月が春だから、三月の末句といへば即ち春の日數の殘り少なになつた頃のこととなる。山川　山と川とでなく山を流れる川卽ち渓流のこと、この方は「やまがは」とし「が」を連濁によんで區別したい。ふかやぶ　清原深養父、舍人親王六世の孫に當り父は豐前守　則母は夏野篤子延喜前後の歌人として有名、官歴は延喜八年正月内匠允、延長元年六月廿二日内藏大允、同八年十一月廿二日從五位下、中古三十六歌仙の一人に入れられ、その味は本集の十八首を始め代々の撰集に入つて居る。その孫元輔、曾孫清少納言亦歌文に名を馳せ代々文學に惠まれた家系である。水のまに〳〵　山川の流れに沿うて「まに〳〵」は「隨意」とも「隨」とも宛てて、そのものに從順な心。とめくれば　注意をして尋ねて來てみると、求め、覓めなど書く、この語五八にもあつた。こゝは谷川づたひ溯りつゝもその周圍の景色に注目する程の心持、春も　春景色も、花を以て春を代表させ花無き處やがて春なしと見たもの。

講　三月の末頃山越えをした時谷川から花が流れてくるのを見て咏んだ、花の散つて流れてゐるのにまかせて、その川づたひに春色を探つて行くと山にはもう春のけはひはすつかり無くなつてゐるナア。（麓にはまだ落花流水の景に聊かの春を止めてゐるのに）

評　詞書「山川より」は「山川に」とあるべきだ。詞書では唯山道で花を見つけたとだけあるのに、歌ではその落花を手がかりに段々奥山を辿つたやうになつて居るのは、それだけ詩的想像を擴げたものであらう。卽ち作者は三月の暮、里の春はまだ可なりに殘つてゐる頃、山越をして谷川の流れに春の名殘を見、やがて深山に入つて青葉若葉の夏が來てゐるのを見て、春と夏の過渡に遭逢し、夏の訪づれを歎ぶことよりも、春の暮れるのを名殘惜しと觀たものであらう但下句は散文的に墮して含糊に乏しい。

春ををしみてよめる　もとかた

一三〇　をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへば

考　清頭「別紙、貞文哥合也此哥合哥有五首延木五年一月廿九日」

二句　元「とゞまらぬなくに」

考　春霞　霞は口調上そへたものといふが從來の解であるが、しかしかうして歌ひ込まれた字面では、春の歸る途にたつて居る、霞と解きたい。かへる道にし　春霞がかへる道ととらないで春が歸る途によ、あの春霞がといつた程の氣味。たちぬとおもへば　霞が「立つ」と春が「立つ」と秀句にしたもの。

評　いくら春を惜しんでも、春は最早出立の後で、あの春霞のたなびいてゐるあたりまで歸りかけてゐるのだから、到底留まつてはくれないものを（それなのに、どうも名殘が惜しまれてならない）

評　朗詠集　三月盡に白氏文集卷二十一落花古調詩「留レ春春不レ駐。春歸人寂莫」の一聯がある。三春の行樂早くも盡きて、そのものとては、唯山のまに鶯囀する薄霞だけと謂つた氣持をば、一層切實感にする爲めに來客を引留めるあるじの心持に擬したのが面白い。

寛平御時ききいの宮の歌合のうた

一三一　聲たえずなけやうぐひす一とせに二たびとだにくべき春かは　おきかぜ

考　初句　清・元・筋「こゑたゝず」六帖「聲たてゝ」

寛平歌合二右・新撰・新萬下　同。

考　聲たえず　「たえず」と「たゝず」とは文法的には後の方が正しいが、口調と慣用の故か吾々は前の方がすなほに響く。たえずと自動詞にしても別に誤解が起きるところでもないからこのまゝを採る。元は「たゝず」であつたものが、平假名の字形「ゝ」と「え」と似てゐる上に意味も相似してゐるところから來た間違であらう。ひとゝせにふたゝびとだに「ひと」「ふた」と數量を重ねたのが非常にこゝの口調を引き立たせて居る。三度四度と度々來ることのないのは勿論一年に二度だけすらも。くべき春かは　訪づれるべき春であらうか？　否決してそんなことはないのである。反語にして強く響かせたもの。

評　鶯よ。聲の絶えぬやうに引つきりなしに啼けや。この暮れ行く春は一年に二度だけすらも來るであらうか否そんなことはない。一年にたつた一度の春ではないか。

評　理でいふなら、時は何れの場合に於ても一年一度で、夏でも秋でも一年に二度も三度も訪づれるやうな時は絶對にあり得ない。けれども吾々は情緒の上で、或特別の時に對する愛惜强調の手段としてよくこの種の謂ひ方をする。

一年にたつた一度の正月ではないか、遊べ〳〵、

一生一度の晴れではないか

佳期の過ぎ易きを惜んで、殘る幾時を少しでも充實した味到感で享樂しようとする自然兒の熱烈な囑望――、さうした情熱が淀みもなく高揚されてある。甚だ卑俗な譬へだが、大阪船場の坊ちやんが寶塚あたりで遊蕩振を發揮して、家から迎の特使を待たせておいて、座にある妓女を催したてて「サア何でも可いから面白い處を一つ聽かせろ」など謂つて暫らくでも空虛な白けた場面には得堪へぬといつた焦躁――それによく似た詩境で、春といふ歡樂に別れることを餘儀なくされた作者は今鶯といふ歌ひめに絶えず歌はせてそれをせめてもの心やりにしようといふのである。

やよひのつごもりの日花つみよりかへりける女どもを見てよめる　みつね

一三二　とゞむべき物とはなしにはかなくも散花ごとにたぐふこゝろか

考　詞　躬恒集上「平中將の家の歌合に、はての春」

元「……花つみにかへりける女に」

二句　爲「ものならなくに」
初二句　躬恒集「とまるべき物ならなくに」
五句　爲「たぐふころかな」

語 花つみ　草花を摘みとること（木花ならば「手折る」といふ處）又花摘堂參拜と謂つて舊暦四月八日の釋迦誕生會に、花を屋根に葺いて美しい堂をしつらうて之に參る（今日の卯月灌佛會）風俗はこの頃からあつて、それに參ることをも花摘といふとあるがそれは四月八日のことで、これは三月の末のことだから、別である。とどむべき物とはなしに　「べき」は可能、とどめることが出來る物でもないのに。はかなくも　確たる目當も自信もないのにまあ。たぐふ　伴隨ふ、ついて行く。こゝろかな　の「か」は感歎。

評 いくら惜しんでも引とめ得る物でもないのに、自分はあの散る花の一つ〳〵の後を慕うてついて行きたく思はれてならない。（あゝ思へばはかない名殘惜しみをしたものだわい。）

以上は在來業說の中、妥當と認められて居るものである。そして一一五の貫之のと同樣、これもその女たちを花に思ひよそへたものだといふことも略々衆評の一致する所である。けれども、その詞書からずつと仔細に讀み味はへて見ると、これは一首全體が秀句仕立ての卽興で、一つはそれ等花摘の女の人々の心持を傍觀して、

いくら惜しんでも落花といふものは不可抗力だのに、あの人達は、その散る花の一つ〳〵にたぐへて行くつもりででもあるのか、あの樣に花を摘んで歸つて來るわい。（此方「か」は疑問）

一つはその女の美しさを見めで、花に譬へて、自分の心持を內觀して、

花にもたぐふべきあの美しい女性の群に、誰の彼のといふことなく、何れ劣らぬたをやかさに、いつそのこと一人々々について行きたいなどと、とりとめもない我心のはかなさよ。

としてこの表裏が隱約の間に相通じて居る點が一首を特徵づけてゐるのではあるまいか。

やよひのつごもりの日雨のふりけるに藤の花を折りて人につかはしける　なりひらの朝臣

一三三　ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじとおもへば

考 詞　業平集「三月の晦日雨中に折藤花」
四・五句　元・筋・業平集「春はけふをしかざりとおもへば」
伊勢物語七九「昔、衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありたり。いと面白う咲けりけり。三月の晦日に、雨そぼふるに、折りて人の許へ奉るとて、詠める
……歌詞此に同じ。

語 ぬれつゝぞ　雨に濡れ〳〵マア。しひて折りつる　無理矢理に、この藤の花を折りました。こゝの「しひて」は非常によくきいて居る。風躰抄などにほめはやされた語である。年の内に　今年中に。春はいくかも云々　晦といふ詞書の語は嚴密に三月末日をさしたものでなく、大まかに廿日以後の一日を指したものと思ふ。けれどもあの賞美の句「しひて折りつる」に對しては寧ろ元永本や家集の「今日をし限り」と最終の日とした方が、切迫感情にふさはしい表現である。

語 三月のつごもりの日雨がふつたのに藤の花を折つて人に贈るとてそへたうた。（鬱陶しい天氣になりましたね。サテこの藤の花を一枝お目にかけます。これは）この降る雨に濡れながら、無理矢理折つたものなのです。だつてもう今年中に春といふ日は幾らもないと思ふと一寸の猶豫もならないと思はれましたので……どうか私の心盡しをお受け下さい）

評 二一の光孝天皇のと同じ着想だといはれてゐるが、雨が雪に、藤が若菜に代位したといふ程の相通はあるにしても、この業平のには王朝人の「折り過ぐさぬ趣味」があふれて一段とめでたい。一日遲れて手折ればとて藤の花は或はさう大した花顏の愁容を見せないかも知れぬ。併し春の中に贈るのと春がくれてから贈るのとでは、贈るもの受けるも

の共に非常に感じが違つて來る。この時の業平の心持は昭和の現代人がこの十一月十七日午後十二時を期して、以後は押されないといふので雨を犯して本局まで記念スタムプを取りに行くのと同じ性質である。殊に天氣もいはず、贈る物もいはず、それは御互に自明として、その上から出發して「ぬれつゝぞ」と詠出す口つきは、如何にも詩の手法によく適つたものである。

亭子院の歌合に春のはてのうた　　みつね

一三四　けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

考　詞　清「ていしの院の哥合の歌」
元。終の「うたの」三字なし。
躬恒集上亭子院一〇左持卅六　同。

釋　けふのみと　春はもうけふ限りで暮れてしまふと。春を思はぬ「春を」は倒置句で、春をけふのみとおもはぬといふが順當。時だにも　時ですらも。たつことやすき云々　花の下蔭は立ち去ることの容易なものであらうか？　否、なか〳〵に立去り難いものである。

講　春はもう今日限りないと思はない（まだ〳〵春は幾日もあると思ふ）時でさへも、花の下蔭は立つに物うくいつまでも留まつて見めでたいものだ（のにまして今は三月も果てといふではないか、春の名殘、花の名殘相待つていひしれぬ名殘をしさの花蔭よな）

評　これの扮本と思しきは、後撰三、春の下一四五に同人の「暮て又あすとだになき春の日を花の蔭にて今日は暮さむ」といふのであらう。これを精煉して今の形にしたもので、この二首を比べると勿論後撰のは劣つて本集の方が、手法迂餘曲折、表現の強烈、餘情の豐かさなどに於て優つて居るが、さりとてこの一首の爲めに彼の一首を滅す程の相違ではない。かれは花の下蔭に寄り集うたばかりの感想、これはさてそのつどひが可なりの時過ぎて尚眷戀たる感想根本はとにかく字面の詩境は自ら別々であるから各自の獨立は害せられない。

花の名殘に春の名殘を背景づけて名殘を惜しむ着想は後年定家が月の名殘に秋の名殘を背景づけた秀歌、

あけばまた秋の半ばも過ぎぬべし傾く月のなしきのみかは

と謂つたのと同じ型でどちらもよく出來て居る。けれども今日の歌人ならば、尚生命流轉の淋しさを比照してもつと痛切味の勝つたものにする所である。尾上柴舟氏の歌に、

若き日か去らんとすなり　は草紅は少女の頰放れゆく

巻第三　夏　歌

題しらず　　讀人しらず

一三五　我やどの池の藤なみさきにけり山ほとゝぎすいつかきなかん

このうたある人のいはく、かきのもとの人まろが也。

考　五句　三「今かきなかん」　柿本集下・六帖六ふじ・新撰「今やきなかん」　躬集下「またぬ日そなき」

評　我やどの云々　三句切と謂つて「さきにけり」で一段落になつてゐる。これは後世新古今集時代急に増加した句體である。上の句の餘情としては「宅の池のはたの藤は、まだ咲かなからうと思つてゐたところ意外にも早く咲いたなあ」と咲くことの早さに輕い驚きをこめてゐる。山ほとゝぎす　の「山」は「我やど」の「やど」に對照して宿の藤は咲いた、山の時鳥はいつ來て鳴くかと想ひついたもの。ほとゝぎす　は萬葉始め歴代歌集夏の部の主なる景物になつて居るからこゝに一通り解説しておく。

ほとゝぎすは時鳥・杜鵑・蜀魂・子規・不如歸等類語大辭典などを繰ると隨分多くの異名があるが、中につき「郭公」とあるのは今日所謂郭公（くわくこう）とは物が違つてて、國文學謂ふところのほとゝぎすは「ホツチョンカケタカ」と啼く近畿地方によく聽かれる鳥で、今日郭公といふのは、恰好はよく似てゐるがこれは近畿地方には居ないで、東北地方から北海道へかけて春夏の候「クワツコウ〳〵」と啼くそれだ。けれども段々後世になつてはこの二つ互に混同されてゐるから先づは「時鳥と郭公とどちらかのこと」位に解いておけばよろしからう。併し今日では普通の辞書にすらその形態的差別をあげて居るのだから、今後の歌人はこの混同を襲いではならない。

ほとゝぎす　子規・杜鵑　鳥類中攀禽類の一種。頭上より背部一面灰黑色、胸及び腹部は白く、之　多數の白き横黑條あり。翼は黑褐色、尾羽も黑し。嘴は根部黄色、末端黑味を帶び、脚は黄色なり。候鳥にして晩春我が國に來り、初秋南方に去る。卵は他の鳥の巣に産み落す。

同第二卷一六八第三・四段

くわくこう　郭公　鳥類中攀禽類の一種。體は鳩大。嘴尖り、全身黑灰色にして、灰黑色の羽毛を交へ、腹部は淡黄色、尾羽は淡赤色にて、白點を有す。甚だほとゝぎすに類すれども稍大なり。本邦に普通なる候鳥にして、夏季山地に多し。そこで今杜鵑のことを主にしていふと、この鳥の名は東西共にその啼聲からつけた擬聲語で、我にホトトギス、支那にブジュクエー（不如歸）英にクツクー "Kuckoo" 獨にクツクツク "Kuckuck" などいふ。我邦人の耳にも時と處にあり、

ホゾンカケタカ　ホツチョンカケタカ　テツペンカケタカ　ホツタタカシヨー　ホツトハラサケタ

などまち〳〵である。この鳥に寄せた聯想は日本では悲哀……血に啼く、八千八聲の聲。

冥土の鳥、十王經に別都頓宜（ホトトギス）鳥と宛てて載せてあるが、この書は僞作だといふ。

木集八五五並に伊勢の左の歌など、

死出の山こえてやきつる時鳥戀しき人の上語らなむ

農耕に關する鳥　木集一〇一三、

雨を催す鳥　藤原家隆の歌に、

いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空

夜啼く鳥　本集一五三・一五四・一五六・一六〇、

自分で雛を育てず鶯の巣に卵を産み落す。萬葉九、雜歌一七五五、戯曲で、なさぬ仲を叙する詞「鶯の巣に育てられ…」とか

「塒放れし時鳥、子で子にあらぬみづからを……」など（小栗判官・曾我姿富士會稽山・玉藻前等）風雅な鳥　これが最も多く、時鳥を待つ心、初音を待つ心、待ち得た心、時鳥を聽いた悦び、時鳥をめでたい鳥とはやす心を表した歌文は非常に澤山ある。（代々の歌集句集の夏の部、清少納言の枕草子、阿佛尼の十六夜日記、比企谷の時鳥、菅原孝標女の更科日記、謠曲では飛鳥川・采女・加茂・清經など）

支那では蜀の望帝怨を呑んで逝いてより亡魂化して不如歸となく、その聲惻々として坐ろに哀れを催すといふ傳説がある。丁度蜀魂の熟語を解くにふさはしいものだ。

獨逸にはリタウエンの民謠に「時鳥の音をきいて母が歎き泣く聲を思ひ出す」といふがあり。

ロシアの民謠にも本集一四五に近い感傷を少女の口から歌つた形のものがあり。

ブルガリヤの民謠にも春愁の惱ましさがほの見えして、これ等は大體東洋的悲哀感と似通つて居るが、

ゲルマンの民謠には「婚姻の使者」とし。

フランスや和蘭の民謠にも「結婚の報告者」とし、又「未來の豫言者」とも歌ふなどは東洋とは著しく異なつた聯想である。

英詩の中作者不明の古詩中左の一篇はよくこの鳥の英國に於ける暦時を歌ひ分けて居る。

In April　　四月（しんぐわつ）に
Come he will.　　汝は來り。
In May　　五月（さつき）には
He sings all day.　　日ゐもす啼き。
In June　　水無月に
He alters his tune.　　調べもふりつ。
In July　　文月に
He prepares to fly.　　歸りのいそぎ。
In August　　葉月こば
Go he must.　　汝が影無けむ。

又英の湖畔詩人ウアーヅウオースの此鳥に寄せた感懷はその集の處々に在るがその中小曲（オード）の優しいものに次の一篇がある。

To the Cuckoo.

When I am laying on the grass　　芝生の上に寢そべつて
They two-fold shout I hear,　　聞けば和主の二た調子
From hill it seems to pass,　　丘邊を過ぎて名のるのか
At once for off, and near.　　忽ち遠く、又近く。

これなどは可憐な思慕を寄せたものである。

尙最後にこの時鳥の聲を音曲化したものは西洋音樂史上色々あるやうだが我國にも箏曲「ホトトギス」の間奏や、新作唱歌の曲に二三ある。

現代歌人の此鳥に寄せた歌は多くその啼いた折からの事象背景との調和に於て諦聽し内聽した趣である。

晝の月浮ぶ靑田の末遠く一聲泣きぬ夕ほととぎす　　岩本　清
夕月のた暗き合歡（ねむ）の下かげにゆあみし居ればなく時鳥　　服部　躬治
夕森ゆ久遠の鐘の沈む海水棹（みさを）たつれば啼く時鳥　　山本　露滴
葛城のみ谷にねぶる猪のいびきの上になく時鳥　　正岡　子規
千仞の巖に立てば闇の森ゆれよとばかりほととぎす啼く　　吉村　葩人
ほととぎす治承壽永の御國母三十にして經よますす寺　　與謝野晶子

いつかきなかん　今日語「いつか來て鳴くだらう」といふのとは意味が違ふ。「か」は疑問の倒置で「いつ來啼かんか」が順當形である。いつ來て啼くことだらうか。

一一　我家の池のはたの藤が意外にも早や咲いたナアいつもこの花の咲く頃よく聞いた山の時鳥はいつ里に來て啼くことだらう。

評　繼續聯想を初夏の景物に投げて、家の藤から山の郭鳥を下待つ心地になつたことを、餘情に含めて居る。左註はうけ難いといはれて居る。尤も柿本集や六帖第六には人麿の咏としてこの歌があるにはあるが後人の僞撰であらう。萬葉十八の四〇四二、田邊史福麿が歌、

藤波の咲きゆく見れば時鳥啼くべき時に近づきにけり

この種の咏の早いもので、躬恒集下の、

我宿の池の藤波さきしより山郭公またぬ日でなき

はこれと同型で意稍淺く、風雅四夏の二九七從二位家隆の、

時鳥まつとせし間にわがやどの池の藤なみ移ろひにけり

は古今の歌を承けてその後の時鳥便りとも謂ふべきである。

うづきにさける櫻を見てよめる　紀としさだ

一三六　哀てふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん

語　詞　清「……さくらをみてよめりける」

元、下の「みてよめる」の五字なし

初句　三「あはれ（てふ三字補）いふ」

五句　一本「咲きたるやらん」

評　うづき　卯月、卯の花月の意で、陰暦四月の異名、つまり初夏。紀としさだ　紀利貞、生年不明、目錄に、

貞觀一七、　正、一三、　少內記

元慶　三、　正、一一、　大內記

同　三、一二、二五、　從五位下

同　四、　五、一三、　彈正少弼

同　五、　二、一五、　阿波介、同年卒す。

その咏本集には四首採られて居る。哀てふ　あはれといふ、あゝ面白いなとかあゝ綺麗だなといふこと。あまたにやらじとや　餘の花木に頒ち遣らじといふ考からか、つまり人々の翫賞を己れ獨占しようとてか但この「や」は「らむ」の下に廻る。ひとりさくらん　單獨に他の木とは時期をたがへて咲いたものであらう。

語　あゝ面白いあゝ美しいと諸人の賞讃を他の多くの友花に煩たないで、自分で獨占めしようといふので春に遲れて唯ひとり咲いたのであらうか。

評　たま〳〵奥山蔭に來て遲れ咲きの櫻を見「これは珍らしい、こりや意外ぢや」ともてはやし、自分のさうした心持から、こゝに來る誰もが左樣にほめはやすだらうと豫想し、これが外に幾らも花のある二月・三月だつたら斯うも珍らしくはなからうとも考へさて櫻を擬人してこの趣向が出來たものであらう。俗言に「しまひものには福がある」といふが、今この櫻が丁度それだといふので、これは櫻にもとさる心用意あつてわざと友の花々をやり過して、自分だけ後で咲いたものであらうか？　と餘計の想像をめぐらす處が面白い、人事に比照するといくらも類例があるものだが、こはさうした寓意はないと認める。又五句の「さくらん」を櫻の秀句と解いたものもあるが、さうなると少し煩はしい

櫻は詞書でよくわかつてをるから、こゝは秀句なしと解きたい。深山の櫻が春に後れて咲くことのあることは、後の「前大僧正行尊」が、吉野の奥大峰の櫻を見て「もろともにあはれとおもへ」と咏んだのでもわかる。これを引合にゆかしんだ芭蕉の「雪を薫らす南谷」でもわかる。

題しらず　よみ人しらず

一三七　さつきまつ山時鳥うちはぶきいまもなかなむこぞのふるこゑ

考　詞　猿丸集「四月つもごりに郭公まつ」
　　初句　頓「さ月松」
　　四句　元「今も啼なむ」
　　六帖六ほとゝぎす・新撰　同。

評　さつき　五月とも皐月とも早月とも書いて、陰暦五月の異名である。この「さ」に「五月」の意味があつて、
　　さみだれ　五月雨　　さばへ　五月蠅
　　さなとめ　五月少女　　さのぼり　挿苗休暇
などの語が出來たといふ語原論は宣長の説明以來よく見るが、愚考「さ」は矢張一個の接頭語、
　　さ苗月の略かさつき、さ水垂（みづたれ）が梅雨でその梅雨が五月に當るので五月雨で、さつきばへの略がさばへ、さ苗少女の略がさ少女、
　　さ苗上りの略がさ上りではあるまいか、（尙接頭語の「さ」については近頃芳賀矢一博士の遺稿、文法論一六——一七に簡單では
　　あるが要を盡した考察がある。）
さつきまつ　とほこの時鳥が五月を以て己が啼くべき時と思ひ定めて今は四月でまだ非番だからといふので山に閉ぢ籠つて居るかの樣に趣向立てたいひ方である。五月のことを時鳥にかけて「己が五月」などもいふ。これは偶然にも前掲英の古詩の「五月には日れもす啼き」といふと季節が一致して居る。山時鳥　山に居る時鳥と解く、山時鳥。谷鶯。花橘など口調上つける「山」もあるが、こゝは前掲の趣向から實名詞としての山と解く。うちはぶき　「うち」は接頭語、はぶきは羽振とも羽搏とも書いて、羽搏きをすること　大抵の鳥は啼く時は羽搏きかする處から想ひついたもの、又、打ちふるふことを打ふきといふのが古語であることは古事記上卷諾册二尊の黄泉平坂の一件を書いた處にも「劍を振きつゝ云々」の句が見える。萬葉の歌詞にも處々用例がある。いまもなかなむ　五月になつては勿論五月ならぬ四月の今とても啼いてほしい。こぞのふるこゑ　去年の啼き殘りの聲が年越しになつたもの。

評　己が早月を待つて山ふかく隱つて居る時鳥よ、サアその羽を振つて里へやつて來て、今卯月にも啼いてくれないか　ナニ今年新期の聲でなくとも可い。去年の啼き殘りをでもサ。（おい頼むぞ）

評　時鳥を不待つ心の切なる處より我邦の歌人は「こぞの古聲」といふ句を案出した。これもその一つである。

　　あたらしく照月影に郭公ふる聲しるく鳴き渡るかな　　躬恒集下
　　時鳥去年のふる聲聞くからにあはれ昔の思ほゆる哉　　六帖五　貫之
　　郭公こぞの古聲今さらになにかはしのぶ己が五月を　　千五百番歌合第五、三百七十四番の右　丹後
　　時も時それかあらぬか時鳥こぞの五月の黄昏のそら　　壬二集亜に千五百番歌合第六、三百九十一番右　家隆
　　忘られぬこぞのふる聲戀ひ〳〵て猶めづらしき郭公かな　　風雅四夏の三一八　定家
　　つれなさも變らぬ比と郭公去年のふるこゑ猶やまたれむ　　新千載三の二一一　權僧正深守
　　郭公忍びもあへず洩すなり五月まつ間の去年のふるこゑ　　同二一三　後鳥羽院御製

その中こゝの歌は時鳥の擬人がうまく、山と里、卯月と早月、ふる聲と初音の對照をあざやかにしながら字面おほらかにして簡古の詩致に富んで居る。

一三八　さつきこばなきもふりなん郭公まだしきほどの聲をきかばや

異　三句　元・筋「まだしきときの」
　四句　清・元　筋「またしきときの」
　六帖六ほとゝぎす・新撰　同。

語　こば　來ば、來たならば。鳴き　啼き聲、カ行四段二活を名詞にしたもの。ふりなむ　舊りなむ、ふる臭くならう。陳腐に鯖しよう。まだしきほど　未だしき時、まだ早い内、まだその時期になつてゐない早い時。「ほど」は、こゝでは「時間」をさす。

評　郭公は五月がきたらば頻りになつて最早陳腐の感がしようから、わたしは何とかしてまだその時期に到らない、早い聲をきゝたいものだ。

評　時鳥の好みを個性づけて特に初音を下待つ心を悅んだものだ　也有が鶉衣百蟲譜に初蟬のことを、

……されば初蟬とも初蛙ともいふ事をきかず、此物ばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手がらなれ。

と謂つて居るが、初物を悅ばれる景物としては尙他に春の鶯秋の雁、冬の時雨などがあつて　この時鳥も夏の景物中殊に初音をゆかしがられたものだ　金子氏の評に、

そしたら珍しからうなの餘意がある。四月中に時鳥の聲を待ち戀ふる意は、前の歌と同じでその趣向が違ふ。理が聞え過ぎて、歌は遠に下つてゐる。

とあるが、愚考餘情は唯「初時鳥に對する新鮮感の憧憬」だけだと思ふ。又それ一つでこの歌は、充分面白いものになつてゐるとも思ふ。「理が聞えすぎる」といふ評はこの歌始め、七・六三　一三三・一九二などその他にもまだあるが、理らなければ主想が强調されないものは一概に排斥すべきではない。その上初物好みといふことは趣味として、古來よく見られるものである。大阪に始めて市電が通つたのは明治四十一年の夏のことで、或知人は開通式間もなく學校に來て「始めて乘つた光況」を得々と吹聽してゐた。その人はやがてルナパークのケーブルカーが出來た時初一發に昇つた人であり、千日前に樂天地が出來た時いの一番に登つた人であつたが、考へて見ると人間には皆多少この趣味があつて他人が見たとて聽いたとてそれでその物が減りも陳びもするものでないが、趣味の先驅の第一人者としての愉快はどうしてもこの初物に限る。元祿の素堂が、

目には青葉山ほとゝぎす初鰹

といつたが、この初鰹の江戸ッ子好みにもさうした趣が見出される。だから「早月來ばなきもふりなむ」といつて時鳥の初音玩賞者の鼻祖の一人に加はつた、伊勢はこの點に於て多とすべきである。

後年近世の石川依平が今樣「四季の月」を咏んだ中夏の部はこの歌を採つたものであらう。

まだしき程の時鳥　初音まつよ　枕より
なれて涼しき月影に　闇の戸さゝであかすなり

一三九　さ月まつ花たちばなのかをかげばむかしの人の袖の香ぞする　よみ人しらず

考　作者　六帖六ほとゝぎす「伊勢なりひらとこそ」
　勢語五九「むかし男」
　新撰　同。

語　五月待つ　已が咲くべき五月の來るを待つ意だが　下の語句によれば已に咲いてゐるのだから、五月を待ち得し（待ちこがれ

てゐた五月を迎へ得た）心、五月の景物といへば　鳥には時鳥、木花には橘、草花には菖蒲などがよく咏まれる。花たちばな　上の「花」は口調上添へたものだが、たちばなは柑橘類の總稱とすれば　花橘はその中殊に「花」を賞美するものといふ程の意があるか？　橘が我邦に始めて來たのは文献の上では日本紀垂仁天皇の九十年春二月に田間守（まもりびとのふぐのこのみ）として非時香菓を常世の國に求めしめられたがその田間守の歸朝に先だち九十九年秋七月に天皇は百四十歳を以て崩御　田間守は翌年春三月に歸朝して、齎らした橘の枝を天皇の御陵と、皇后とに捧げたとあるのが早いものだ。常世の國の所在は不明だが、橘は南國の原産であるから、南洋方面の或地點と察せられる）その後、段々繁衍して奈良朝には橘姓まで賜はつて。

橘は葉さへ花さへその實さへ枝に霜ふれどいやとこはのき

の御製もある位である。紫宸殿前右近の橘は今日所謂山橘で鹿兒島縣下海門嶽にそれと同種のものがあり土佐にも少分はあるといふ（鹿兒島縣草木譜）むかしの人　これを右の「田間守の」としたのが顯註で、三三の梅と同樣誰ともわからないといふのが多數の註だが、愚考これは故人卽ち舊知の人とした金子氏の解が宜しいと思ふ。否袖の香などを思ひよそへるのは單なる相識の人とよりは情交至密の意中の舊知と解くべきでさすれば伊勢物語の作話はこの歌境を小説化して當らずと雖も遠からぬものである。袖の香ぞする　袖の移り香とよく似てゐるやうに思はれる位のところを強くする爲めに袖の香それ自身を直ぐにかぐやうに言ひ做したもの。

五月を待ち得て咲いた花橘の香をかぐと昔馴れ親しんだ人の袖の移り香を思ひ出して、いひしれぬ懷しさがこみあげてくる。

原の作意は以上に盡きて居ると思ふ花の香袖の香を對照的に措いて、橘の花咲く下に、うつとりと昔の夢をくりかへし懷しむ作意が、ホンノリと柔かく浮彫されたやうな感觸を覺えて古めかしい中に情もこもつて居る。が併し「香をかげば」といふのは少しあくどい云ひ方で、その人如何にも花と鼻とをくつつけて、動物的にフーフー嗅ぎ分けてゐるやうな感じがして面白くない。唯何となく漫歩の風光を橘の花下蔭に向けて、たゞすむと折ふし花の得ならぬ幽香が脈々とたゞよつて昔の戀人を忍んだといふそれだけのことが、はつきりとする樣の表現であれば可いと思ふ。伊勢物語五十九段に、

昔　男ありけり。宮仕へいそがしく。心もまめならざりければ、家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて「女あるじにかはらけとらせよ、さらずば飲まじ」といひければ、かはらけ取りて出したりけるに、肴なりける橘をとりて、

さつきまつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りにける。

とある。無論事實ではなからうが、作意の一端には觸れて居らう。それに又この種の記事は當期の歌と歌物語との關係上看過してはならない好題材である。

西洋では、花言葉"The language of flower"なるものがあつて君影草（鈴蘭）は「我を愛せよ」薔薇は「御身を思ふ」などそれ〳〵の花に寓する一定の意味約束があつて社交上用ひられて居る。東洋にはさうしたものは無いが、併し、

橘は懷舊　故人思慕
櫻は大和心
松は貞操　とはの榮え
梅は貞操　君子
牡丹は富貴

と樣に大分きまりかけたのはある。就中橘にあゝした聯想を寄せることの早いものはこゝの歌である。これから脱化し

たと想はれるのは次の二首である。

拾遺二夏の一一二、讀人しらず、

たが袖におもひよそへてほとゝぎす花橘の枝になくらん

曾丹集、

かなかげば昔の人のこひしさに花橘を袖にしめつる

一四〇　いつの間にさ月きぬらん足曳の山郭公いまぞなくなる

考　二句　清「さつきゝつらん」

補　いつのまに　いつの人間、間は不用意のすきま、やま時鳥　五月の鳥と思ひ定めたいひ方。いまぞなくなる　今現前して時鳥が啼いてゐるよといふ程の心。

書　いつの間に五月がやつて來たのだらう。いつもこの月になると定まつて啼く山時鳥の聲が、アレあの様に現に聞えて來るよ。

評　時鳥を待つ人でもなければ、嫌ふ人でもない。唯實社會の俗事に齷齪としてゐる人が偶々この鳥の音を聞きつけて「あゝ早や五月になつたのか？」と驚いたもので主想は「鳥兎匆々の感」がある。一七二の秋の歌とよく似た着想である。たくまず飾らず素朴味輕快味を以て優るもの

一四一　けさきなきいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ

考　詞　伊勢集（一首前に）「夜深けて時鳥の一聲聞き侍りしに」

初句　爲「けさきなく」

大帖六ほとゝぎす　同。

補　けさきなき　今朝山から里に來て啼いて。いまだ旅なる　まだ里馴れず旅心地に飛んでゐる時鳥。花たちばな　どこでも指し定めてないが、作者に手近の我庵の庭樹として一首の趣が出來る。宿はからなん　宿は借りて欲しい。

書　今朝山から里へ來てまだ旅心地に飛び啼いてゐる時鳥よ何れ何處かに宿をとるであらうが、ならうことなら、お前に馴染の花橘の咲いてゐる我家の庭に取極めて貰ひたいものだ。（さすれば余は心ゆくまで、汝の啼く音を聽いて樂しまうに）

評　風雅の欲を歌つた善謔の好咏である。淺蟲の驛を下りると、何々館の提灯麗々しく「お宿はどうかこちらへ」といふ幾人の宿引を見る。これは淺蟲ならずとも何處にもよく見られる。あの宿引とは雅と俗の相違がある。先づは音曲の師匠を村内同好の有志が聘する時、特に自宅の離れに泊めてその妙音を賞翫しようとする人事上の風流に近い。

おとば山をこえける時に郭公の鳴を聞てよめる　きのとものり

一四二　音羽山けさこえくればほとゝぎす梢はるかにいまぞなくなる

考　詞　友則集「音羽山を越えける時時鳥聞きて詠める」

元「時に」の「に」と終の「よめる」の三字なし。

大帖六ほとゝぎす　同。

補　おとば山　山城國南の京に近い山科のほとりにある山、京人が叡山に上つたり、逢阪の關にかゝつたりする通路に當る。梢はるかに　はるかの梢に、山道から見はるかす目路の末に高い木立があつてその上にといつた程の心持、いまぞなくなる　今しも啼い

てゐるよあゝと、その音の現前してゐるのに思ひ入つたもの。

評　今朝方音羽山を越えると、思ひかけぬ時鳥が遙かの木立の末にアレあの様に啼いてゐるなア。

評　「音羽山」の「音」に啼く音をかけたといふ註は如何はしい。抄に、

音といふ文字ないだづらになさでありのまゝによめり、口訣、

といひ、餘材抄に、

鳥の聲をふるくは、おとともよみたれば　音羽山といふをはつねにいひなせり。

などあるのはどちらも肯けない。初夏と拂曉とは青木立とに配して杜鵑一聲、無風流の一旅人も尙且つ「おゝ」と足を止める景氣いひしれぬ妙味がある。一首の生命はつまりこの不用意に得た清爽の致の悅びにある。

郭公のはじめて鳴けるを聞てよめる

一四三　時鳥はつ聲きけばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた　そせい

考　詞　素性集「杜鵑初めて鳴くをきゝて」

作者　元、下の「よめる」の三字なく、作者は同人だが「素性法師」とある。

三「素性法師」

二句　素性集・六帖六ほとゝぎす「なく聲きけば」

三句　清「あさきなく」

考　はつこゑ聞けば　契沖は「なく聲」より優つて居るといふが、「はつ」の意は已に詞書に明瞭だからこゝは家集や六帖の「なく聲」の方が優つて居らう。あぢきなく　味氣無く　つまらなく、張り合なく。倦怠の心持、ぬしさだまらぬ戀　相手を誰それと限らないが、それで居て一種人なつしかさに得堪へぬといつた風の寂しさ遣る瀬なさを云つた詞だと想ふ。はた　意味不明である。選擇副詞の「秦か漢かはた近代か」などいふのは將で「それとも又、或は」の意であらう。今大日本國語辭典によつて假に之を採る）金子氏は「當」の義でさし當つたことにいふ。打つげなどいふに似て居ると樣に說かれた。「打つけ」はなる程こゝによく適ふが、さうした古い用例の確證がない。寧ろこの「當」は近代的で近世に入つて忌々しいこと、憎いことの接頭語としてよく用ひる。

あた舌たるい。　あた阿呆らしい。

の「あた」に　そ適當してゐよう。

評　時鳥の初音をきくと（樂しいは樂しいが）流石に又、誰といふことなしに一種人懷かしさの感に得たへぬものがある。

評　「はた」の語義不明だから評は差控へておく。

ならのいその神でらにて郭公のなくをよめる

一四四　いその神ふるき宮古の郭公こゑばかりこそむかしなりけれ

考　詞　素性集「ならの石上のかたにて子規鳴きしを聞きて」

元「よめる」の代りに「きゝて」

相「……なくをきゝてよめる」

顯「ならのいそのかみの寺にてほとゝぎすのなくをよめり。」

六帖六ほとゝぎす・新撰　同。

夏　一四三・一四四

【考】ならのいその神でらにて云々　古來群疑の句である。

一、奈良は添上郡石上は山邊郡でその間二里ばかりも隔たつて居るから全く別で詞書「ならの」は後人のさがしらに加へたものだ。

二、奈良は石上への通路だから「ならの」といひかけたものだ。

三、「ふるき都」として奈良を詠まうとするのに安康・仁賢兩帝の石上の舊都と紛れる憂があるから「ならの」と加へたものだ。

四、平安の京となつてからは石の上あたりも廣く「奈良」といつたものだ。

五　イヤさうではないこれは安康天皇の穴穂の宮や、仁賢天皇の廣高の宮をさしたもので全く石上懷古の歌だ（一と結局同一）など謂ふ。愚考四を妥當として矢張寧樂懷舊の歌だと想ふ。十里廿里と隔たつて居る古名所ならば寧樂遷都と共に都近くへ遷されることもあつたらうが、僅かに二里内外のことだからそのまゝにして奈良人は詣拜したものであらう。古代日本とはいへ一國の首都たる奈良は急に發展して「觸手ある都市」の有樣に間もなく帝都の近郊となつたことを思ふし、土地の人にこそ地名の細別もあらうから作者の頭には、はつきり差別はついて居たらうが平安の京人にとつては斯ういふ方がわかりが早やかつたものであらう。

偖この石上に當時在つた寺としては寶莲寺とこの石上寺とがあつて前者は在原業平が住んだことがあり、後者は長因寺・良峯寺・今宵藥師堂などと別稱して後の丹波市町大字布留に在つて天長中には僧善守が住み移に遍昭も住み、その子卽ちこの歌の作者素性も住んだ。（素性の通稱を「よしより」といふのもこの寺の名に因んだものであらう）遍昭在住時代には有名な小町との贈答があつた。（後撰集「石の上に旅ねをすれば」と「世をそむく苦の衣は」）相模家集にも、

よしみねの寺に來てこそちはやふる布留の社の紅葉をば見れ

又布留神社は石上寺の近くに在つて、布都御魂・天璽瑞寶・天津羽々斬の三靈を祭り、大和志料上七五一――七七一に詳記してある。その布留の同音の關係上「いそのかみ」は「古き」の枕詞として用ひられる、こゝもその方。こゑはかりこそ　聲だけがさと強くつてその餘の物凡て非なるを表す。昔なりけれ　昔さながらであるよ。「けれ」は咏歎。

【評】奈良の舊都では時鳥の啼く音だけが昔さながらに聞えるが、その他のものは痛く變つて、花と榮えた往時の盛況は全く見るに由なき荒廢である。

【評】語簡にして感慨深い。題材は大分違ふが、この一首を誦して余の聯想するのは左の七絶である。

蘇台覽古　李白

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。唯今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。

こゝも亦「唯今惟郭公の啼くのみあつて、嘗て艶容脂粉の人を照らせし」で、皇居の偉觀官衙の壯觀、百官有司の參退、後宮十二司の國色凡てその影なく築土は崩れ礎石は搖ぎ、見るから物哀れな舊都の四周にも、曆日は違はず初夏が來て、無心に叫ぶ時鳥、多恨の詩人ひとり今昔の感傷をよせて這般の咏となつたものである。尙これは九〇と相通ずる着想であるから就いて參照せられたい。

題しらず　よみ人しらず

一四五　夏山になくほとゝぎす心あらば物おもふ我にこゑなきかせそ

【考】初句　元・筋「五月雨に」

清頭「萬云山とにはなきてかくらんほとゝぎすなかなくことになき人おもほゆ」

【評】心あらば　我に同情する心があるならば　物おもふ　感傷的氣分とも謂ふべき意味廣い語で、今の物案じをする。心配事があるなどいふに當る。

【評】夏の山邊になく時鳥よ。我に察しがあるならば（さなきだに今は物思ひに惱んでゐる折からとて）此上啼いて我悲しみを募らせてはくれるな。

夏　一四四・一四五・一四六

評　時鳥を悲哀の鳥と見立てての着想である。一體時鳥の啼く音は短促急調で、一音節の速度が非常に早いものだから、聽く人の心々ではあるが、どちらかといふと悲哀の聯想がふさはしい。ロシアの民謠に、少女の謠つた。

ほとゝぎすあはれな聲で
クツクーと啼くのを止めてくれ
悲しく叫ぶ歎息は止めてくれ
私の心はあはれにも
さうでなくてさへ
傷ついてゐるのだ。深く害はれてゐるのだ。

といふのがあるが、この歌と酷似して居る。萬葉八夏雜歌一四六七にも弓削皇子の御歌

郭公なかぬ國にも行てしがその鳴聲をきけば悲しも

といふがある。これは上句は強いが下句がたるんで居る。これよりも同じ卷一四八四、大伴坂上郎女の次の歌がこれに近い。

霍公鳥いたくな鳴きそ獨居ていの寢らえぬに聞けば苦しも

一四六　郭公なくこゑきけば別にし古里さへに戀しかりける

考　四句　清「ふるさとさへそ」

別れにし　心憂き事あつて住み棄てた故郷から。　何氣なく去つた曾住の地か？　何にしても現住の實家を離れて、暫時旅かけて出た人の郷愁ではない。故郷さへぞ　の「さへ」は先づこの聲によつて他の物思ひをし次第にその感情が高潮して故郷戀しの情となつたものである。

評　時鳥の啼く音を聞くと樣々の物思ひをそゝられて、果ては此迄住み棄てた故郷さへも戀しく想はれる。

評　支那ではこの鳥の音をブジユクエークと聽いて之に不如歸と宛てた。訓にすると「歸るに如かず」である。明治の漢學者はこれを表題にして浪子の悲戀を小說にした。實に杜鵑一聲雨もよひの空などに響く時は、旅の兒ならぬ一般人もこし方行く末の思ひが惻々として胸に迫るものがあらう。

一四七　時鳥ながなく里のあまたあればなをうとまれぬ思ふ物から

考　清頭「猿丸集詞云、あたなりけるおんなに物をいひそめてたのもしけなきことをいふほとにほとゝきすのなきけれは」（現傳のにはなし）

猿丸集　同。

評　ながなく　「汝が啼く」である「長啼く」とはとらない。人稱代名詞、古代は一音であつたものを後に「れ」の接尾語を添へたものと想ふ。

一人稱	二人稱	三人稱	不定稱
上世	わ	か	た
後世	われ	かれ	たれ
	なれ		

なほうとまれぬ　矢張うとましく思はれるよ。倒置句である。思ふものから　思ふものながら、なつかしく思つてはゐながらも。

評　時鳥よ、お前は餘り方々の里で鳴いて多情だから、愛しいとは思ひながらも、どうも疎ましく思はれてならぬぞよ。

評　可愛さ餘つて憎さが彌増すといふ歌ひ口で、とやかうと非難はするものの、矢張時鳥に無關心では居れない作者の時鳥愛が言外に響いて面白い。伊勢物語四十二段に、

昔賀陽親王と申す皇子おはしましけり。その親王女を思しめして、いとかしこく惠みつかう給ひけり。いとなまめきてありける を、わかき人はゆるさざりけり。われのみと思ひけるを、又人聞きつけて、文やるとて、郭公のかたをつくりて、

ほとゝぎす汝がなく里のあまたあれば……

といへり。この女、けしきなとりて、

名のみたつしでの田長は今朝でなく庵あまたにうとまれぬれば

時は五月になむありける。男、かへし

いほり多きしでの田長はなほたのむわが住む里に聲し絶えずば

人事に比照すると成程かうした作話に相應する着想である。本集八八〇に類想がある。又新撰萬葉の左の歌は、これを出發點としたものである。

うとみつゝとゞむる里のなければや山ほとゝぎすうかれてはなく

一四八　おもひいづるときはの山の時鳥から紅のふり出てぞなく

新撰　四句　嘉「ふりでてぞ啼く」頼「ふりいでゝぞなく」

同。

注　おもひいづるときはの山　昔を思ひ出す。その昔の内容は多分は戀であらうが、夏の歌だから必ずしも戀と局限せず、何であらうと在りし世をし　ぶと解く「ときはの山」の時は秀句「思ひ出づる時常磐の山の」といふのを秀句で省いたもの、四九五にも「思ひいづるときはの山は昔を思ひ出づる。その昔の内容は多分は戀であらうが、夏の歌だから必ずしも戀と局限せず、何であらうと在りし世をし　ぶと解く「ときはの山」の時は秀句「思ひ出づる時常磐の山の」といふのを秀句で省いたもの、四九五にも「思ひいづるときはのやまのいはつゝじ」といふがある。又語は違ふが後鳥羽院の

思ひいづる折たく柴の夕煙むせぶもうれし忘れがたみに

も類似の修辞である。「常磐の山」は山城の名所。からくれなる　「くれなる」は「呉の藍」の約即ち今の紅色「から」は韓とも唐とも書く、つまり支那朝鮮から渡來した紅のことだが、明治の「舶來」と同樣、何でも上等の品には「から」をつけて唐紅・唐衣・唐錦唐綾など謂つた。國産貧弱の王朝の文化の好ましからぬ呼稱である。ふり出てぞなく　「ふり出て」は秀句で紅染めにする爲めに切地を振り〳〵することと、音に立ててなくといふ「出て」の上においた接頭語とをかけて居る。

評　昔を思ひ出してつく〴〵と眺めてゐる時も時とて常磐の山の時鳥が、血を吐く思ひの色の唐紅の、ふり出づるごとくに悲しい音にたてて啼くことよ。

評　或はこれを、

序「思ひ出つる」常磐の山の時鳥。序「から紅の」ふり出でてぞなく

として序詞をとりのけて口譯しても可いが、青々とした常磐の山に赤々とした唐紅、人は心に思ひ出づるだけで、鳥は音にふり出でてまで泣くとした對照、初二句、四五句のつゞけ方などに雕心の苦心が籠つて居るものと見たい。

清輔本の頭註に委しくこの歌境があげてあるが、清輔自身も半ば疑ひつゝ添へたものと想ふから、左にそのまゝをあげて、とかくの評は避ける。

「此時はの山の歌或人云、

むかしあひおもひたる女、時の一人のこにとられてこひしと思へども、かひなくてとしをふるに、かのおとこ大納言になりて、あるしするにこのもとのおとこまいりてかの女のうみたるわかきみのいつゝむつはかりなるを、よひてゆひのさきをくひきりてちこのかひなにかきてはゝきみにみせたまへといひける歌也。

夏　一四八・一四九・一五〇

撰之平仲歟。
彼女本院北方歟時はの山のいはつゝしの歌作。云々。
然は平仲歟。但雖信受事也。在後撰。
むかしせしわかかれことのかなしきはと云歌こそこのちこのかひなにかきたるうたとはしりてはへれ。」

一四九　こゑはして涙は見えぬ郭公我衣手のひづをからなむ

考　なし。
釋　こゑはして云々　「聲有り。涙無し。」と對照したもので「は」は區別しつゝ二偏重なつて疊音ともなつて居る。ひづ　漬づ、濡れること。
講　聲はすれども涙は見えずになく時鳥よ、我は涙は出せども聲には得立てず泣きの涙に漬つて居るのだから、どうかこの袖に濡れてゐるのを借りてくれよ。（さて聲涙共に下る汝の哀感を整へよ。）
評　時鳥の歌とよりは寧ろ作者悶々の情を訴へた述懐の歌である。構想巧思愛すべき無きにあらずだが、悲痛なるべき涙を衣裳の賃貸のやうな無雑作さに片づける爲めに沈痛は却つて輕薄に墮して居る。これを本歌にしたもの、式子内親王集夏（新古今三夏二一五にも）
　聲はして雲路にむせぶ時鳥涙やそゝぐ宵のむらさめ

一五〇　足曳の山郭公おりはへてたれかまさるとねをのみぞなく

考　三句　元・清・三・顕・頓・餘材抄・古典本・後撰四夏一八四「なりはへて」
釋　山郭公　山に居る郭公。おりはへて　之を「居り延へて」としたものはわざとらしく居つゞけをしと解く、（尾上・藤村・佐々木・三博士等）之を「折り延へて」と解くものの中金子氏は「時延へて」として「時長く續くことをいふ」とせられ他は「打延へて」と同樣だといふ。（尾崎雅嘉・顕昭・清輔）可否何れとも定め難いが、「おり」が單なる接頭語として「はへ」は「延へ」で何でもその事が顯證ならしめる有樣で、こゝでは敷的にしばなくことをも、時間的にいつまでも里へ行かずに啼いてゐることを作者には「はへて」啼くと感ぜられたものと採ればよくはないか？。後撰四夏一七五にも、
　思ふ事侍りける頃郭公を聞きて
　なりはへて音をのみぞなく時鳥しけき歎きの枝毎にゐて
とある。同じ使ひ樣であらう。たれかまさると　時鳥が優るか我（作者自身）が優るかと（張りあひ顔に）。れをのみぞなく　「のみ」は一句の凡てを強調したもので音にたてないばかり居る。一心不亂になきたてて居る。
講　山の時鳥は殊更きはたてて、我と悲しみ泣くのを「どちらがひどく悲しんでゐるか、どちらがひどく泣くか」と競爭するやうに、唯もうひたぶるになき續けて居る。
評　憂思綿々の人山里に住まひ、折から時鳥のしばなく聲を聽いてその苦衷を投影したもの。

一五一　今更に山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりは我宿になけ

考　二句　元・筋「山にかへるな」
　　新撰　同。
釋　今更に　今あらためてわざ〳〵。この副詞句は下に大抵或動作をもどく意の語句がある。こゝでは「山へ歸る」といふ動作が難じたもの。山へかへるな　時鳥を山から里へやつて來たものと想定し、聲の次第に遠ざかるのを、又もと　故山へ歸るものと想定してそれを引きとめたもの。聲のかぎりは　聲のある限りは汝が聲のありだけは、時鳥の聲を宛ら行商人が商品を仕入れて里へ賣り

歩いてゐるかの樣にいつたのも面白い。

語 オイ〳〵時鳥よ。（折角里馴れて親しくなつてゐるものを）今更山へ歸つたりなんぞはするな。（矢張こゝに引續き留まつてゐて）汝の聲のあらん限りは我宿になけかし。

評 「時鳥を一名不如歸といふからその啼く聲を「歸るに如かず」ととつてそれを引きとめた」といふ解　契沖）は如何はしい。これは時鳥を擬人することと下の句の思ひ入つた時鳥愛が輕く明るい情調を產み出して居る。類咏には後藤四頁一〇八、題しらず、

とこ夏になきても經なんほとゝぎすしげきみ山に何かへるらん

一五二　やよやまて山時鳥ことづてん我世中にすみ侘ぬとよ　　みくにのまち

考 五句　六帖六ほとゝぎす「すみわびぬべし」

小町集　同。

語 みくにのまち　三國ノ町、三國は姓町は名（元、后町からきたもの）紀名虎の女（又紀逍遙には惟高親王の御女ともある）で入つて仁明天皇の更衣となり、一時は君寵を得て、同天皇の第十五の皇子貞朝臣登を生み、この御子承和の初源姓を賜はつて臣下に列せられ叙任順當に進んでゐる中、母町の過失（その内容は何とも傳はつてない）によつて屬籍を削られ、出家して深寂と稱して山住みした。町自身は許されなかつたが、深寂の方はその後還俗して、貞觀五年九月廿日御兄弟の光孝天皇外數名連署して父帝に哀願せられ、同八年三月二日附を以て、正五位下に叙せられ、右京四條一坊を賜し貞朝臣登と賜姓の御沙汰があつた。やよや　おい〳〵やいの〳〵、他を呼びかける、同等若くはそれ以下の對手への掛け聲。ことづてん　言傳爲む。すみ侘ぬ　住むのが侘しくなつた。とよ　といふことをよ「と」は上文を一括して六々といふことを言傳てようといひ、「よ」は咏歎でサといつた口調。

語 おい〳〵山べをさして歸る時鳥よ一寸言傳をたのまうぞ。それはアノわたしもこの娑婆の憂世に住むのが嫌になつたから、（おつつけ御身のあとを慕つて出家をしようといふこと）をサ。（あの山住みの深寂に知らせて欲しいのよ。）

評 時鳥は死出の鳥だから「わたしも御あとを慕つて死にたい」と亡き父母に言傳てたといひ（契沖）お咎めは受けたものの、崩御の後はいとゞ懷しく仁明天皇に對して言傳てよといつたと解き（定家のあげた一說）誰であらうと故人に言傳てたものと解き（尾崎雅嘉）さうではなく時鳥に向つて「自分をもあの世へ誘へ」と依頼を言ひ送りたいといつたものと解く（季吟）のは恐らくは失當であらう、隨つてこの一首を八五五と等類などといふのも當つてゐない。寧ろ四の御歌とその悲韻を同じくするもので昨日までも今朝までも玉敷の力重に時の人に數まへられた身の、自業自得とはいへ、一朝失脚してあるにかひなき勅勘の日蔭の境遇、その子も社會的の地位を失つて奥山住まひ、寂しさに悲しさを交へて哀切痛切とも謂ふべき歌態と謂ふべきであらう。

寛平御時ききいの宮の歌合のうた　　きのとものり

一五三　さみだれに物おもひをれば郭公夜ふかくなきていづち行らん

考 位置　清「順序この次のと前後」

詞　友則集「寛平の御時中后の歌合」

作者　元「……歌合に　友則」

新萬上「沙亂丹物思居者霍公鳥夜深鳴手五十人植往濫」

六帖六ほとゝぎす・寛平歌合夏七右　同。

夏　一五二・一五三

考 物おもひなれば　「物おもひ」は考へ事とか心配事とか物案じと樣の語。こゝは風物に對する感傷的氣分をいふ。隨て初句「さみだれに」の「に」はそれに原因して、それがもととなつてと原因を提示した助詞と解く。夜ふかくなきて　夜深更に啼いて、時鳥は一しきり啼くと決してその場に靜止してゐるものではなく、否寧ろ啼きつゝ飛ぶと云つた方が正しい樣な啼き方をするからこゝの四五の句のつゞけ方はその啼く樣子をも表はして居る。これが精練せられて「なきすててゆくらむ」の名句になつたと想はれる。

○ **評** （しとゞくと降る）五月雨に心地惱ましく色々と物思ひに耽つてゐる折から時鳥がないて飛んで往く。あゝ彼の時鳥はこの夜更けを（あんなに啼いて）一帶どこへ行くのであらうか、（思へば淋しい極みではある。）

評 一に五月雨あり、二に作者元からの感傷あり、三に暗夜あり、四に深更あり斯る折柄、第五に杜鵑の血に啼く聲あり「さびし」といふ氣持が一首の底深く流れてその寂しさの心調が題材と共に幾轉化する處巧を求めぬ巧であらう。抑々五月雨の趣たる已に人の氣を滅入らすことに於て充分である。新派の歌ではあるが、

五月雨春が墮ちたる幽暗の世界の樣に降りつゞくかな　晶子

といふのがあるが、よくこの雨の情趣を捉へられてをる。この雨を總舞臺として夜ふけの時鳥を諦聽した歌境がしんみりと表れてゐる。確かに秀歌である。後世新古今三夏の二二〇に、

五首の歌　人々によませ侍りける時、夏の歌とてよみ侍りける　攝政太政大臣（良經）

うちしめり菖蒲ぞかをる時鳥なくやさつきの雨の夕ぐれ

といふのも似たやうな秀歌であるが、これは主として菖蒲の香を歌つたもので、こゝの時鳥それ自身を雨の夜更の主人公としたものとは趣の異なるものがある。拾遺二夏一一二

天暦の御時御屏風に淀のわたりする所に　壬生忠見

何方に鳴きて行くらむ郭公よどの渡りのまだ夜ふかきに

といふのがある。（詞書忠見集の方では

夏、淀のわたりに船あり郭公なく

とあるが、此は屏風絵の歌であることは同集春、御屏風の續きであることによつてわかる）

これは古來時鳥の咏として絶唱といはれてゐるが、畢竟こゝの歌を藍本としたものである。又近世安永天明の名俳谷口蕪村が、

時鳥平安城を斜に

と吟じたのは遙に忠見の間に答へた氣味があつて面白い。又萬葉九、雜一七五六に、

かきくらし雨のふる夜を霍公鳥鳴きて行くなりあはれその鳥（高橋蟲麿歌集）

とあるのはこの種の着想の早いものである。

一五四　よやくらき道やまどへる時鳥我宿をしも過がてになく

考 位置　清「この前のと前後」

詞　友則集「寛平御時中宮の歌合」

四句　六帖六ほとゝぎす「我が庵にしも」

結句　爲・寛平歌合夏一三右「すぎがてにする」

新萬上　同。

夏　一五三・一五四・一五五

評　よやくらき「や」は疑問の倒置、夜が暗い故か？。道やまどへる　矢張倒置句で初句の對句に調べたもの、それとも道に迷つたものか、我宿なしも　處もあらうに我宿なばよりによつてまあ、「し」は強意「も」は味歎。過がてになく　過ぎ難げに啼く、素通りは出來ないといつた風に啼く。

語　あの時鳥はどうしたのだらう？　夜が暗い故か？　それとも道をとりちがへたものか？　處もあらうに、この我宿をば過ぎにくさうにあれサあのやうにないてゐるよ。

評　我宿の時鳥を惹きつける何物もないにも拘らず啼く音を洩らしたのを一體どうしたことかと、初二句に原因を他に求めて色々と擬人的推測をするところ對句の口調と相俟つて、如何にも閑人の閑想として時鳥をのんきに味はへ聽いてゐる面目が躍如としてゐる。そして結句はこれは意外のもうけものとホク〳〵した氣持が餘情となる。

一五五　やどりせし花橘もかれなくになど時鳥聲たえぬらん　・　大江千里

考　位置　爲一五三。

五句　六帖六たちばな「きなかざるらん」

語　花橘の「花」は日調上添へたもの、橘を時鳥に寄せある花卉とすることは萬葉以來の慣用で本集一四一なども同樣である。かれなくに　枯れもしないのに、「なく」は「ぬ」の延音。など　なぜにこの副詞は「たえぬらん」に係る。

語　時鳥が宿とした宅の橘は今に枯れないで在るのに、あの時鳥はなぜに離れがちにして啼く音を絶やしたことだらう。

評　前のは何の牽引力無き我庭をしも過ぎがてに啼くと歌つたものであつたから、こんどは惹きつける要素（花橘）の具はつてゐるに拘らず離れ勝にするのはどうした譯かと反對の想の歌をおいたもので、例によつて撰者排列の意匠が察せられる。そして「かれなくに」は廣蔭も謂つたやうに恐らく「散らなくに」と花のことにする處であらうのを、時鳥の「離れる」といふ暗對を設ける前提として語を變へたもので、なか〳〵細心の技巧である。併し若しこれを六帖のやうにするなら、矢張文字通り「枯れなく」として「あの毎年定宿にした庭の橘は、今年も枯れずに花が咲いてゐるのに、なぜに時鳥は來て啼かないか」と解くべきであらう。

一五六　夏の夜のふすかとすれば郭公なく一こゑにあくるしのゝめ　きのつらゆき

考　初句　期・顯・嘉・新撰「夏の夜は」

六帖六ほとゝぎす・新萬上・世六　同。

語　夏の夜の　下に「短かきかなや」など補ふ。ふすかとすれば　寢たかと思ふと、寢入るかあとて。なく一こゑに　なく一聲に夢を破られ、さて眼をさまして見るとはや。あくるしのゝめ　夜あけ方になつて居る。しののめは「明くる」の枕詞で、今はそれを實名詞とする。「玉枠の」を「道」、「たらちねの」を「親」、「さゝがにの」を「蜘蛛」と各々その所係名詞に代意して用ひると同類である。

語　夏の夜の短かさといつたら、僅かにうと〳〵と寢入つたかと思ふと、早や郭公が一聲なくのに目がさめて見れば夜あけ方といつた始末で、實に何云ふ間もない程だ。

評　右は、尾崎雅嘉の鄙言に依つて說いたが、この歌の解には色々の說がある。景樹は「夏の夜は」とせよといひ宣長と千秋（橫井）とは「夏の夜が」とあるべきだといひ、廣蔭は二、三、四、句の順序にして次五句の上三音、初句五

句の下四音と順當句に直して、

ふすかとすれば時鳥なく一聲に明くる夏の夜のしのゝめ

とせよなどいふ。成程これならば文字の增減なしに一通意味はよく聞えるが、その樣に元の姿をゴテ〳〵とまるで煤掃の後の室內の模樣變へのやうな變更を施すことは妙でない。その他のものは「夏の夜」に主語の資格あることを明瞭にしようとての苦心と受け取れる。又この一首は確かに夏の短夜を主想にしたものだから誤ではないが、「の」の特殊の用法として下咏歎の語句に應ずること、

程のよさ、　音のさやけさ、　……のうたてさよ。

と樣なのがあつて（これとても主格につく「の」として文法には說くのだが）

「夏の夜の短かさよ」といふその下句を省いた形ととることは爾餘の句調から看て左程無理ではない。さすれば一夏の夜よ」といふも似たりで結局は前に釋いたやうなことに落ちつくと想ふ。夏の夜の實際の長さは、伊勢の神宮司廳が配る暦に一日別に時間が上つてゐて、その最も短い時と雖も一寸ねて、一寸時鳥を聞いて、ガバと起きたら早や明けたといふには餘りに長いのだが、こゝの歌の樣に思ひきつて、誇張することによつて短適に表されるのである。又その短夜の有樣は時鳥を借りなくとも「夏の夜は臥すかとすれば大いびき一つかく間にあくるしののめ」「……花賣る聲に……」「……納豆賣り呼ぶ一聲に……」など幾らも趣向はあらうが時鳥のなく刹那性は他の何物にもないし、事實この聲によつて黎明を宣告せられた作者の實感でもあらうと想ふ。秋の夜長に夜もすがら蟲聲の喞々に枕を欹てたり、冬の夜すがら窓打つ時雨に幾たびか寢返りするそれに比べて何たる相違ぞとの感じも酌みとられて味へれば趣ある好詠だが、表現の不明瞭なのが玉に瑕とでも謂はうか？。

一五七　くるゝかとみればあけぬる夏の夜をあかずとやなく山時鳥　みぶのたゞみね

考　詞　忠岑集「夏の夜郭公を聞きて」

新萬上・六帖　ほとゝぎす・寬平歌合一七右　同。

語釋　あかずとやなく　飽き足りないとして啼くか、「や」は疑問の倒置。

評釋　暮れたかと思ふと早や明け渡る夏の短夜を、あまり飽つけないといふので汝山郭公はそれを歎いて啼くのか？

作者の短夜を飽かずとしてその心を以て時鳥の啼くのを解釋したもので、上句はこの前のと同樣巧に短夜を誇張してある。「あかず」は上の「あけぬる」と關はせた修辭と解く（契沖）のは穿鑿に失してはゐまいか？。又新撰萬葉に此歌に配せるに「想像閑筵怨婦悲」と閨怨の詩を以てしたのも少し偏してはゐまいか？。抑も王朝人の生活たる、晝夜の價値觀を顚倒して、午前十時頃から午後二時頃まで寢るかと思ふと、夜をこめての管絃謳唖に夢中になるといつた風で、夜こそは享樂の世界、趣味の世界、又社交の世界として、もてはやしたもので、わけても夏の夜は晝の暑さと對照し、夜の景物（星・涼風・臺等）と相俟つて一入めでたもので「夏は夜・月のころは更なり云々」の淸女の文章の裏には謂ひしれぬ王朝の官能生活が明るく想像される。隨てこゝの歌などもさうした享樂・趣味の生活から眺めて興味深いものだと想ふ。併し又閨怨と限定することは不可だとしても戀にうきみをやつす、公卿官女の充たされない愛慾の怨嗟が多分に籠つてゐることも否定し難いとも想ふ。

一五八　夏山に戀しき人やいりにけむこゑふりたてゝなくほとゝぎす　紀秋岑

夏　一五七・一五八　五〇九

考　作者　寛平歌合夏八右「紀有岑」
筋「有經」
三句　元「入りむ」傍注に「入りぬらむ」爲「入りぬらむ」
新萬上「夏山丹戀敷人哉入丹無音振立手鳴郭公」
六帖六ほとゝぎす　同。

釋　紀秋岑　美濃守美峯の男、六位の無官傳記不詳木集一五八、三二九の作者。なつやまに　夏の奥山に、この種の云ひ方、春山・秋山とあるが冬山は餘りいはない。こひしき人や六々　時鳥の戀ひなつかしむ人が山入りでもしたと見えて、當時の俗、出家遁世の山住みもあり、藤原公任の流で、世の煩雜を避けて隱棲する山住もあつた。ふりたてゝ　「ふり」は接頭語、「たてゝ」は　しるく、顯證に、一段と際立てゝ。なくほとゝぎす　啼く時鳥哉の意、時鳥に力點をおいたいひ方、若し逆に「ほとゝぎす啼く」とすれば力點は「啼く」に移つてその啼いてゐる光況が一首の中心に變る。

釋　あの夏山に彼女の戀する人でも山入したものでがなあらう。あのやうにき啼聲しるく響く時鳥を聽くと、（どうもそんな氣がする。）

評　景樹はいふ「山に入といふ事多くは出家遁世して佛門に歸するをいふ　されば世を遁れ入し人を戀したふ人の歎に思ひよせてよめるなり」と。眞淵は云ふ。「鳥は人戀る物ならねど、人の上に准へて云のみ。夏山は時鳥の鳴所なるを設けて戀しさ人やとよめるを、新撰萬葉に、此の歌の右に一夏山中鶯耳根一郭公高鳴入二禪門一と有るはしひてしか作りなせるもの也」と。前の解は少し立ち入り過ぎて居る。必ずしも山入の戀人を持つ述懷でなくとも、しば鳴く時鳥を擬人して作つたものと見るに差支はない。寧ろ後の解釋が當つて居らう。新撰萬葉の詩は歌意と相應じないもので、特記する程のものではない。

一五九　こぞの夏鳴ふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ

考　新萬上「去年之夏鳴舊手芝郭公甚歟不歟音之不變沼」
去歲今年不變何。郭公曉枕疑聲過。窓間側耳憐聞處。庶草殘鶯舌尚多。

釋　鳴ふるしてし　去年鳴いて〳〵自分の聲を鳴き陳びさせてしまつた「てし」は現在完了「つ」の二活の「て」と過去の「き」の四活の「し」と結合した大過去の時の助動詞。それかあらぬか　それか、（それとも又）それにあらぬかを約したもので、この一首の中最も秀れた句である詞の省略もよし聲音の借和も宜い。二七二菅公の菊の歌にもこの句法で成功したものがある。聲のかはらぬ　これも巧みに語を省いたもので、「今啼く聲は去年啼いた聲とちつとも變りがない」といふこと。それは初二三四と句を讀下すれば誰にもさうとれるやうに出來てゐる。

釋　去年の一夏を啼いて〳〵その聲を啼き凍びさせてしまつたあの時鳥と同じのであらうか、それとも別のちがつたのであらうか、今啼く聲は去年と寸分變りがない。

評　去年の例を引合に出さうといふのだから、その人の腦裏には、まだありく〳〵と去年の音が印象されてあることにもなり、去年のふるこゑと今年の新聲とを別けることは當時の雅びかな言ひ分け方でもあり、その凝つた聽き方がこの歌の特想を爲し四句の疊音的約句五句の結びもよく整つてをる。唯併しこの種のものはわるくすると理趣に墮ちて、何だか時鳥鑑定專門家が各種の音に耳を澄ましてゐる姿を思ひ浮べさせるやうにもなつて詩味は變つて匣氣の脈ふべきものともならう。

ほとゝぎすの鳴をきゝてよめる

一六〇　五月雨の空もとどろに郭公なにをうしとかよたゞ鳴らん　つらゆき

考　清頭「別紙在家持集々失歟」

詞　元「……よめる」の三字なし

六帖六ほとゝぎす　同。

評　とどろに　動、響など宛てて「とどろくばかりに」の意。なにかなうしとか　何を憂しと歟、何が悲しいといふ　で（なくのだらう）かの。よたゞ　夜直　宵から夜あけまで一直線で續くこと、つまり、夜もすがら　夜通し、終夜、徹宵など略同じ　である。

さてこの歌以來時鳥の異名の一つに「夜たゞ鳥」といふが出來た。（運歩色葉には夜闇とあり、桂川地藏記には夜響とあり、古註の語釋には誤つたものがまゝある。注意すべきである）らん　の所　は上の「鳴く」ではなく「何を憂しとてか啼くらん」とのやうに啼く理由につける想像である。

評　郭公は何悲しいことがあつてあの様に五月雨そぼふる大空も轟くばかり、夜つぴいて啼き通すのであらう。

評　杜鵑一聲宵闇の空に高啼いてよりあなとばかりに耳傾けると、これはまたどうしたことか、一聲二聲又三聲とし　ば啼くに凄涼悲愴の情趣夜と共に雨と共に刻々に高潮に達してこの詞形となつたもの。作者を宵から曉かけてマンジリとも睡らなかつた人とし時鳥をまた同様すつと啼きつゞけたと解くのは稍字面に拘つた嫌がある。

さぶらひにてをのこどものさけたうべけるにめして郭公まつ歌よめとありければよめる　みつね

一六一　郭公こゑもきこえず山びこはほかに鳴ねをこたへやはせぬ

考　詞　元「さぶらゐに、酒たうべけるついでになのこどもなめしてほとゝぎす待つ歌よめとおほせられける時に」

餘村抄「……にめしての「に」文字なし」

三句　元「あまびこは」

清「あまひこは」

評　さぶらひ　「侍」と書き又下侍ともいふ。五位六位の階級の人々の溜り場處こゝで居流れて酒宴を催したり又遊戯をしたりする。たのこども　これは殿上人の和語のやうになつて通用されてゐる。元は五位六位の人々を主上がお呼びになる名稱であつたといふ。たうべ　喰うべ、「喰べ」を延べたもの、「飲む」といふよりやゝ上品、めして　その殿上人達がこの作者躬恒をよんで、ありければ　殿上人のいつたことの敬語で「と仰せられたので」

偖てこの詞書を若し元永本のやうにすると、作者自身酒宴の席に列してゐて、天皇の御召しによつて歌を味んだことになる。當時躬恒の地位は序文によると前甲斐目であつて。甲斐は上國の部であるからその目は從八位下相當である。日錄に甲斐權少目とあるが目の權官は大國・上國・中國・下國を通じてないやうである。假に權少目であつたとしても從八位下より下でこそあれ上の筈はない。すれば五位　位の人々が酒宴の座興に呼びつけて「一首味んでくれよ」といふもあり得べき雅興であるから流布本の詞書通りでよく聞える。但し元永本とても無理ではない地位こそ低けれ撰者にまで選まれた躬恒だから特別を以てお召しに與つたとすれば肯づかれる。唯さうすると、その召されるまでの躬恒が殿上人と對當的に侍所で酒酌みかはしてゐたとな　のがどうかと思ふ。

山びこ　山彦・木靈・谺・木鬼・樹靈などいふ。山びこは山の音の反響を男性的に見て「ひこ」の接尾語をつけたもの、「こだま」はその反響を樹木の精靈と見たてたことば。こたへやはせぬ　「や」は疑問、「は」は感詞、應へをせぬかいやい、こたへないかよといつた口吻

評　下侍に殿上人達が酒を飲んでの座興に、私をよび出して「時鳥を待つ」といふ心を歌に咏めとのことであつたから咏んだもの。

折角時鳥を待つて居るのに、そよとの聲も聞えない、（あゝ辛氣や）オイ山彦よ、何とかよそで啼いた聲をでもこちらへ響かせてはくれないかよ。

評 題の「待時鳥」といふ語は一つも歌に入れないで居て而かもこの一首を讀むと、その人如何にも時鳥を待ちあぐんで、ぢれてゐる樣子が察せられる。卽興の老巧なるもの。これから脫化して更に新味を加へたものは 詞花二夏五七題しらず能因法師、

山ひこのこたふる山のほとゝぎす一聲なけばふた聲ぞ聞

山に時鳥の鳴けるをきゝてよめる

一六二　時鳥人まつ山になくなれば我うちつけに戀まさりけり　つらゆき

考 詞　三「……抑小笛よめる」

元「……啼くを聞きて……」

三句　貫之集五「なくときは」

四句　清「われもうちつけに」

五句　元・筋・家持集「戀まさるなり」

家持集「ほとゝぎすひとり山へになくなればわかうちつけに戀まさるなり」

語 人まつやま　「まつ」は人「待つ」と「松」山との秀句。人を待つといふ音の松山、松山は、唯松の木立ある山をいふ普通名詞である。で、季吟の抄に

松山は讃岐也崇德院の住せ給ひて「身は松山に」とよませ給へる此所也

とあるのはとらない。かうした續け柄の似たものに大和物語二十三段に三條の御息所（醍醐天皇の女御）が上の御局で帝の御越しが無いのをわびて咏まれたとある、

目ぐらしに君まつ山の郭公問はぬ時にぞ聲もをしまぬ

といふに似て居る。うちつけに　打附に、だしぬけに、にはかに、突然・率爾・端的など釋くが、元來の意味は唐突の意で、前觸も用意もなくて俄かにといふ心持の副詞でそれから轉じて或一つのきつかけから急に感情の高潮すること卽ちこの歌のやうな情趣にも用ひるやうになつた。

土佐日記の「うちつけに海は鏡の如くなりぬれば」

源氏若紫の「うちつけなる御夢物語にぞ侍るなる」

などがこの語の原義の使ひ樣かと思ふ　戀まさりけり　こゝの戀は廣い意味のもので相手不定の唯漠然たる人なつかしさの感に堪へなくなつたといふのであらう　之を特殊の戀人を待つてゐる折柄人待つ山の郭公をきいて急にひどく遣る瀨無さを覺えてと解くのは詞書に照らしても無理なり夏の部立に對してもそぐはない。

語 郭公が處もあらうに人を待つてふ松山に啼くのだから、自分はうちつけに人懷かしさの感が得堪へぬまでに懷しく覺えられるよ。

評 これだとか九一八の歌だとか秀句を利用することは作者得意の壇上で、又これが當時にあつては、もてはやされたであらうが、今日から見ては一向に詩味の乏しいものである。近松の作品によく見る秀句にも趣の近いものがあつて何となく感情が魂のどん底から盛り上らないで、間に合ひの心持だけが表滑りに流れ出るといつた風の嫌がある。それはこの人待つ山の外、三九、二三二、二四〇、二六〇、と作者索引によつて貫之の作をあさつて秀句を驅使したものを一々しらべて觀られればよくわかることである。

はやく住ける所にて時鳥の鳴けるを聞てよめる　　たゞみね

一六三　むかしべやいまも戀しき郭公故郷にしも鳴てきつらむ

考　詞　忠岑集「早う住みし家に郭公を聞きて」

三「すみける所に郭公の……」

元「はやうすみける所に。時鳥の啼きけるを聞きて。。。」

初句　清「いにしへや」

四句　元「故郷にのみ」

結句　忠岑集「鳴きてきぬらむ」

補　はやくすみける所　曾住の地、以前に住んでゐた場所、つまり四句に所謂故郷のこと。むかしべや　「や」は咏歎をこめた指定「むかしべ」はいにしへといふも同じ。一〇〇三の長歌の八句「あはれむかしべ」を一本「あはれいにしへ」としたものもある。時に「へ」をつけること序の「春べ」といふ處で述べておいた。故郷にしも　よりによつてこの故郷を目指して「に」は位置を指示する助詞「し」は強意「も」は咏歎の助詞、この一首を文法的にいふなら、

郭公（主語）　故郷に（補語）　來鳴く（述語）

そして主語の郭公の修飾句として「むかしべや今も戀しき」がついてゐる。もし初句の「や」を疑問の倒置と解くと「むかしべ」今も戀しきや」となるが、さうした「や」はなくとも推測の意は五句の終の「らむ」で充分だと思ふから前のやうに解いておく。

評　以前住んでゐた所で郭公の啼くのを聞いて咏んだもの（アレ時鳥が啼いてゐる、あれは）今におき昔懐しい思ひの郭公が、わざ〳〵この故郷へ來て鳴いてゐるものと想はれる。

評　無論作者が自己の主觀を時鳥から投影したものである。詞書の様子で見ると、同じ京の町の内ではなく、處離れた昔住地と想像せられる。今も吾々は同じ市内でも以前借家住した前を通る時には一種の感じがするが、更に嘗て在住した村里を訪問するとなつては益々感慨の深いものがある。その折柄に嘗ての夏でもこの里で聞えたやうに時鳥の音が、聞えるといふので歌境は略々肯づけよう。そしてその故郷が若し以前よりも荒廢して居たなら、素性の一四四の歌が出來よう。

郭公の鳴けるをきゝてよめる　　みつね

一六四　時鳥われとはなしにうの花のうき世中になきわたるらむ

考　詞　相「も　おもふこころほとゝぎすの……」

元下の「よめる」の　字なし

五句　行、相「なきわたるかな」

六帖六ほとゝぎす　同。

補　われとはなしに　「われならなくに」も同じで自分のやうな不幸な身の上でもないものをの意、古註くだ〳〵しい説があるやうだが誤つたものが多い。さりとて又あまり近代的に時鳥自身「我」の意識なしになど解くのも打破はしであらう。この一句に含蓄があつて時鳥をかりて巧みに自家の境を興歌したものである。卯の花の　四句の「憂き」を出す爲めの序詞、卯の花そのものは初夏四月頃に咲く花で固より時鳥によせある花であるから、この句の活きは一面「憂き」を誘き出すと共に、一面時鳥の背景を髣髴させるといふ二點にあつて所謂有心の序とも謂ふべきもの。うき世の中に　この憂き世の中に、これも作者自身の感じを時鳥によせたもの、なきわたるらむ　「なき」は「啼き」と「泣き」とかけたもの、泣き　涙で啼き暮らすことであらう、「わたる」は「渡る」で世を經るといふ意の實動詞。さてこの句は、二句の次に「など」といふを置いてその呼應としてこの句尾を「らむ」で收めたものである。

語 時鳥は何も自分のやうな不幸な者でもないものを、なぜに憂き世の中に泣き暮らすことであらう。

評 述懐として上乗なるもの、但郭公の歌といふにはそぐはない、一首の餘情すべて作者の坎軻不遇とか慷慨惻怛とか、哀思綿々といつた趣である。憂き世の憂さを思ひつゞけてゐる矢先に韓紅のふり出でてなく、一聲をきいてこの詩興を湧かしたものか？

はちすのつゆをみてよめる

一六五 はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく　　僧正遍昭

考 詞　遍昭集「はちすに露のおきたるを」
清「僧正へ。ぜう」
作者　元下の「よめる」の三字なし。○遍照
四句　遍昭集・元・筋・行「などかは露を」清「なにかはつゆを」
六帖六はちす　同。

語 はちす　蜂巣の義で蓮の花梗の形蜂窩に似てゐるところからつけた名だといふ。「はちすのつゆ」は非常に美しいことは前にも云つた。はちす葉の　こゝに「葉」を添へたのは次の「濁りにしまぬ心」には密援しないが、四五句の露の玉を持出す伏線である。にごりにしまぬ心　泥の中に生び立ちながら、その濁りにも染まず氣高い花を開く心。これは法華經涌出品の「不染世間法如蓮花在水」から想ひついたものであらうといふ。成程作者は僧門の人で法華經は王朝殊に八講の催し類つた流行經であるからこれは當つて居らう。尤もこの句は直ちに「濁り」とはなつてないが世間ノ法といふその世間は五濁惡世などいふからこの一句でよく説明せられよう。なにかは　の「か」は疑問、「は」は強調の歎詞。なぜにマア……か？　あざむく　は文字通り欺くこと、詐ること。

評 蓮は泥の中に生び立ちながら濁りにもしまぬといふ。サアそれ程潔白な心を持ちながら、なぜマア葉におく白露を珠のやうに見せかけて人を詐るのか？（彼の潔白と此の詐僞とどうもつりあはぬことだがナ）

評 五節の舞姫を止め、嵯峨野の女郎花に誘へたと同じ詞致輕快洒落眞によくこの僧正一面の歌態を表して居る。濁りにしまぬといふ清廉をも愛でたく、露を玉と欺くといふ美化的欺瞞も好ましいものなのを、わざと趣向をたてて一寸はちすにからかうた氣持が面白い。蓮の高潔を稱へたものには孟浩然の、

看取蓮花淨　方知不染心

といふのもある　この不染心も前掲涌出品から來たものであらう。もつと有名なのは周茂叔の愛蓮説だが、これは宋代の作である。文部省發行の小學唱歌集第三編白蓮白菊は一頃よく流行したが、

泥の中よりぬけ出でて　濁りにしまぬ花はちす
月の光か貴すごく　霜と冴ゆれば夜寒し

とある初二句同趣である。

又この歌から暗示を得たと想はれる歌は、新撰萬葉卷下の

夏の夜の露なとゞめそはちすばのまことの玉となりしはてれば

貫之集第三秋の

ゆく水の心は清き物なればまことゝおもはぬ月ぞ見えける

月の面白かりける夜曉がたによめる

一六六 夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん　　ふかやぶ

考　詞　元　下の「よめる」の三字なし。
三句　筑「あけにけり」
四句　相「雲のいづくに」
三「雲のいつくに」（こゝ本同）
六帖一夏　月　風・百の三六・新撰　同。

注　まだ宵ながら　まだ宵のまゝで、宵とは初夜のこと今、俗にいふ「宵の口」「宵のまゝで明けたのに」とは夏の夜の短かさを強調した誇大法。雲のいづこ　雲は雲井でこゝは「空のいづこ」といふも同じだといふが、それでも雲ならこそ「宿」といふ想もよせられるので、こゝはどの邊の雲にといふのである。

講　清い月夜の夜あけによんだ。夏の夜はまだ宵の口だと思つてゐると、そのまゝやがて夜あけがたになつたが、これでは月も西の山の端の常宿に到り着く暇がなからうが、さて大空の中宿りといつても大體どの邊の雲にとまることであらう。

評　涼風清月飽くことをしらで宵から夜中、夜中から曉と、つひ夜つぴいて月下に涼んだといふのが主なる餘情で、夏の短歌を歌つた點は一五六と共通だが、こゝの詞書によると、更に佳興時の移るを忘れた作者の心境をも歌つたもので「面白かりける夜」の情味もこもつてゐる。さて夜明け近くなつて、ついぞ見なれぬ中空の有明月夜を見て、その月影の落ちつきどころは何處だらうと訝かつたもの、立意複雜にして而かも技巧の痕見えず、夏の夜の一好調である。拾玉集四の次の一首はこれから作意したもの、

夏の夜はまだ宵なから明けぬとや木綿附鳥の曉の聲

となりよりとこ夏の花をこひにおこせたりければをしみてこの歌をよみてつかはしける　みつね

一六七　ちりをだにすゑじとぞ思ふささしよりいもとわがぬるとこ夏の花

考　詞　元「隣より、とこなつの花をこひにおこせたりければやらで……」
三句　期・六帖六なでしこ「うゑしより」

講　ちりをだにすゑじ……　折りて人に與へることは愚か、塵一本をさへ花の上にはとまらせることではないとサ思つてゐますわい。枕や床に塵が積るといふことは夫婦の愛情がさめたり、夫婦が悲しい生別・死別をしたりした時の歌によくあることだから、塵をすゑまいといふのは一面妹脊の契りを冷やすまいといふに緣を有たせたもの、ささしより　咲いてから（この方といふものずつと）としてこれが初句の上に行く。いもとわがぬる　妹（妻）と我とが共寢する「床」といふ名の「とこなつの花」と五句の「とこ」を云ふ爲めの序詞。とこ夏の花　なでしこの異名、撫子・夏なとこしなへに咲く花といふ名義で初夏から晩夏は勿論秋の末頃までも咲く。歌には十月にこの花を咏んだものもある。さて、この花の姿態は如何にも可憐であるから、吾妹子に對する愛情を寄せたのはその點から觀てもふさはしい。

講　隣からとこなつの花を下さいと云つて使をおこしたので花を惜しんでこの歌をよんでやつた。（折角の御申越ではありますが）この花は咲いてから以來といふもの塵一本もかけまいと大切にして居りまする、それはこの花の名も睦じい「床」をこめた「とこなつの花」といふのですから。

評　今日ならば斯うした閨房の情を寄託するといふ事は社交上の禮に背くばかりか、殆ど沒常識の沙汰であるが、萬事が情緒本位の王朝のことであり、殊に相手は心やすい同士の隣りの主人なりで、親しみだてにつひ冗談交りに咏み送つたものと想はれるがそれにしても歌だけやつてその文字通り一枝も遣らないといふのは餘り酷いことだから、恐らく

花は請ふが儘に與へてさてこれで一つ趣向が出來ましたから、これも序にあげませう位の處でこの歌を添へたものと想ふ。それとして解くとまことに老巧な善謔で貰つた隣の人も微笑しつゝ花と歌とをめで眺めたことであらう。躬恒は六帖にも、

妹とわがぬるとこなつの花なればなべて人には見せむものかは

と咏んだのが入つて居るが、想は相似て感情が露骨で根性が吝で遙に劣つて居る。

みな月のつごもりの日よめる

一六八　夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへすゞしき風や吹らん

考　詞　元「六月つごもりによめる」
作者　元「同人」
筋「みつね」

三句　元・筋・相・六帖夏のはて「かよひぢに」清「かよひぢに」

語　みな月　水無月、陰暦六月の異名、六月の晦日とは夏盡くる日の事であるから、この歌を夏の部の最終に配したものである。ゆきかふ　「往き替はる」のこと「はる」の約「ふ」である。互に相交替する意で夏は非番となり秋は當番となるといふ、擬人的ないひ方である。併し「往き交ふ」としたのも悪くはないと思ふ、同じ一つ路を向ふからは秋が來、こちらからは夏が往くに、それが互に往き違ふのである。かたへ　片方、片側、秋の通る片一方

つ考　六月の晦によんだもの。夏と秋とが交替して往き還りする大空の通路では、（夏の一方には暑い風が吹いてもゐようが）秋のやつて來る片一方ではもうあの涼しい風が吹いて居ることであらう。

評　夏秋を過渡する感を味むに「往きかふ空の通路」といふ空中樓閣を築いて、巧みに二季を人に譬へ、初秋清涼の豫感をも表してある。「夏よ疾く〳〵去りぬ。秋よ、あゝ彼の爽かに涼しき秋よ、一刻も早く地上を訪づれよかし」といつた風の秋待つ心が餘情になつてゐるのも宜い。但し初二句は唯擬人し得たといふまでで、まだ抽象的な概念なので、その點が少し物足りない。狂歌ではあるが、白人の、

佐保姫のいとまごひして行春のうしろすがたや藤のさげがみ

といふのは春を佐保姫といふだけでも「夏と秋と」とむきつけなのより優れて居るし、暇乞ひ、まかりたつ、後姿、皆人間に親染な語句で最後に藤の下髪といふに至つては殊によく春の姿を具象化し得て居ると思ふが、こゝの歌にはさうした趣がない。後來惠慶法師冬去春來の感を、

ふる雪にかすみあひてやいたるらんとしゆきちがふよはのおほぞら

と歌つたのは此によつたものか？

巻第四　秋歌　上（元、秋〇上）

藤原敏行朝臣

秋立つ日よめる

一六九　秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

詞　詞　敏行集「秋立つ日」

作者　元「○敏行朝臣」

二句　新萬下「日にはほがらに」刊本目庭明丹」とある

五句　新萬「驚かれける」

六帖一秋立つ日・新撰・世六　同。

補　秋立日　立秋の日、今の太陽暦では大抵九月一日前後。藤原敏行――一五六十（延喜七）或は――一五六一（昌泰四）古今集歌人の主なる一人で又書にも堪能であつたが傳記は不明である。判つて居る限りをいふと、

一、陸奥出羽の按察使藤原富士麻呂の男で在原業平の妻方の姪。

二、清和　陽成・光孝・宇多・醍醐の五朝歴仕。

三、官歴　醍醐帝の御代、近衛中將藏人頭を經て從四位上右兵衛督に至つたこと。

四、歌　敏行朝臣集一卷（群二四八、九、五八二）歌仙歌集（續國四三五――四三七）古今集に十九首を始め代々の勅撰集に採られた。

さやか　寒亮（紀）清（萬葉）など宛てて「あざやか」と同じ語系、仔細に言へば「目にはさやかならねど耳にはさや〳〵と風の音して」と四五句に對照した氣味もある。風の音にぞ云々　風の音なひを受けて驚かされた「驚かれ」通常の「びつくりする」意に人の訪問を受けた「驚かされ」なかけたもの。當時の風習他を訪ふには、宮中ならば見參の板を高く踏みならして取次を乞ふのだが、外は一般に扇を鳴らしたり、又しはぶきでそれとしらせたりした。所謂「音なふ」といふ　がそれである。そこで今秋が訪づれたといつても秋そのものは色も形もないから眼にはそれとは肯づけないが風の音をきくと確かに秋がやつて來たなと思はれるとしたもの。

補　秋が來たからとて眼にはそれとはつきりは見えないけれども吹く風の音を聽くと確かに秋だと感ぜられる。

評　春信を逸早く傳へるものは鳥に鶯花に梅であつたが、秋のたよりを齎すものは何であるか、千草八千草、空の雁、床の蟲の音庭の菊と後々には可なり多いが、その秋の景物の先驅者として先づこの「風」をあげることは古今同轍であらう。事實吾々は毎年初夏の頃から風の個性に敏感となつて初夏の風の爽やかさ、炎暑一陣の涼しさと、二百十日前後の無氣味な風の脚と、初秋清爽のそれとは感觸の上でたしかに違ひを認める。支那でも早くこの事を謂つて居る中に、最も能く音調の側から秋を寫したものは歐陽永叔の秋聲賦であらう。

歐陽子方レ夜讀レ書。聞有レ聲自二西南一來者。悚然而聽之曰。異哉。初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而澎湃。如二波濤夜驚風雨驟至一。其觸二於物一也。鏘々錚々又如レ赴レ敵之兵卿レ枚疾走不レ聞二號令一。但聞人馬行聲。予謂二童子一。此何聲也。汝出視レ之。童子曰。星月皎潔。明河在レ天。四無二人聲一。聲在樹間。予曰。嗚呼悲哉。此秋之聲也。

そこでこの實際の感味によつて「吾々はこの風のサヤ〳〵と鳴るのを聞く時あゝいよ〳〵秋が來た」といつた、この實感がこの歌の主なる强みで、これに眼と耳とを閲はせ、色は見えぬが音はあるといひ、「さやか」を風の颯々にひゞかせ、「驚かれ」に訪づれをかけなどした纖細な技巧が錦繡のやうに裏にのみひそまつて字面にはちつとも浮いてないのが妙手の面目であらう。新古今四秋上二八九

文治六年女御入内の屏風に

いつもきく龍の里と思へども昨日に變る山おろしの風

後德大寺左大臣

同二九〇、最勝四天王院の障子に高砂がきたる所　藤原

吹く風の色こそ見えね高砂の尾上の松に秋は來にけり

など何れも此から暗示を得て居る。又川柳に

秋來ぬと眼にさや豆の太りかな

とあるのは秀句によつて巧みにこの歌の原意を反對に通俗化有形化したものである。

秋立日うへのをのこどもかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる　つらゆき

一七〇　かは風のすゞしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立らん

考　詞　貫之集九「秋の立つ日殿上のぬしたち川遊遙しにいきて歌よむついでによめりし」

元「秋のたつ日、うへのをのこどもの、賀茂がはに、遊遙にまかりてにけるともにてよめる」

作者　三「きのつらゆき」

三句　清「うちよする」

四句　元・筋「秋の立つらむ」

六帖一秋立つ日　同。

類　うへのをのこども　殿上人遙卽ち四位五位の人々。かもの川原に　有名な京の町を流れる加茂川のこと。川せう　えう、川遊遙、川遊びのこと、釣を垂れ、涼を納れ、景を愛で、船を遣るなど凡て川邊の遊山の總稱と見れば宜い。よく「國華」などに大堰河龍頭鷁首の船の繪が挿めてあるが、あれを見るとそゞろに王朝の川遊遙氣分を覺える。加茂川の納涼は近世に入つても益々盛で有名な「京の四季」に

御禊ぞ夏はうちつれて河原に集ふ夕涼み

の句がある。ともに「供に」と「共に」と二色あつて上ならお供に、下なら「共々に」で對上、對等の別があるが、始めに「うへのをのこども」と殊更に斷つたのは自分とは自分の相違ある地位階級の人といふつもりだらうと想ふから「供」をとる。まかり　元は「まゐる」の對だがこゝは唯「行く」を稍鄭寧に謂つたもの。あるかの「か」は咏歎、「かな」と同じ上のすゞしくもの「も」も咏歎。立つ　秋が立つ、浪が立つの秀句。

評　（なんと）この川邊を吹く風の涼しいことは——、さては川邊ではあの打ち寄せる浪の立つと一緒に秋も立つのであらう。

評　唯一の風が川面に浪を立たせ川岸に涼を送るものなのを、殊更に別種の二つのものと見たて、風吹き、浪立つとして初秋今や波と相共に來ると綾なしたもの纖細の技巧程よくきいて好調。

題しらず　よみびとしらず

一七一　わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋の初かぜ

考　作者　六帖一初秋「躬恒」

初句　新撰「わきもこか」

清頭「在家持集但わきもこか又あきのは風云々　凡家持集歌十一首在之」刊本の家持集は「わがせこか」とあるが以前は「わきもこか」とあつたものか？

清「秋のかせかな」

結句　家持集・六帖五秋の衣　同。

秋　上　一七〇・一七一

補 せこ「せ」は脊と宛て古は男女互にその配偶をいふ、二五榮照。こゝは妻から夫をさしたものと採る。うらめづらしき「うら」は着物の「裏」とこゝろの「心」とをかけた秋句珍しく思はれる裏。秋の初かぜ「秋になつて始めて吹く風」と窮屈にとらす。初秋頃を吹く風の汎稱とする。

重 我夫の着物の裾を吹き裏返して、まことに心珍しく吹く初秋風だこと——

評 一本「わぎもこ」とあるについて思ふに、着物の裾を飜して見榮えのするのは紅裙羅衣の人のことで、男子の毛むくじやらな脛を見せた處が何の趣もないものだ。そこで本文には「わがせこ」を採りながら「我が妻の」と解いたものもある。（例歸言）一應尤もだと思ふが、この前の二五などもあるから、これは家妻らしい優しみを以て出かける夫を見立てた女の感想と解きたい。或はこれを「後朝の別」と解いたのもあるが、後朝の別ならば戀の部にあるやうに大抵は別れを惜しんで「復の逢ふ瀬はいつであらう」とか「一夜のへだても百夜千夜」とか、悲しい寂しい心細い思を寄せたもの勝なのに、これにはさうした消極感はなくて、幾分の餘裕味すら認められる。又當時の男子は外出には袴を穿くのが普通だから、衣の裾の裏返るといふことは外出姿では見られない。するとこれは閨中の趣だとも解せられるが、閨中にして、着物の裾が裏返るやうな風が吹くとなつては、その家は壁も戸も障子も御簾几帳もない家となるから此も如何はしい。そこで上句全體は「うらめづらしき」の「うら」を云ふ爲めの序詞においたと解くものがある。（契沖）併し序詞としてはたとひ有心の序としてもあまり秋風のはたらきが多くこめられて有心すぎる。矢張初句から歌の本文と看て、優しい家妻が夫を見送つて、折からそよぐ秋風に「あゝ大分秋らしくなつた」と感じたしとやかなながめと看たい。今日と雖も、衣更への季節に、自分が手縫にした袷を夫に着せて、さて玄關を出ること二三歩「あ、一寸待て下さい」で「何か？」とふりかへると「裾の躾けがまだ殘つて居ました」など謂つて。そばによつてすつと拔いて「えゝもうよろしい」と送り出すなど、はよく見られる圖である。余は思ふ、

秋草の滿地に白と紫の陣立ててこし秋の風かな　晶子

といふのは、如何にも派出な、まるで友禪縮緬の樣な秋風の觀方だが、

石山の石より白し秋の風　芭蕉

と那谷寺の秋を觀照したそれは又如何にもさびを愛する俳人の秋風らしくある。それ等と對照して、こゝの秋の初風は何となくしとやかな家妻（ハウスワイフ）の色調に富んで居ると。

一七二　昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく

考 四句　元・相・筋「稻葉もそよに」清・行・六帖一秋立つ日「いなばもそよと」

五句　元・筋「秋風ぞ吹く」

新撰・九品中下　同。

補 昨日こそ　植附から間のないといふ感じを誇張した詞、今の俗言で「入學式があつたのはつひこの間のことのやうに思ふが、早や一學期の試驗か」などいふのも同じである。さ苗とり　「さ」は接頭語、苗を執つて植附かすること、卽ち田植。稻葉そよぎて　苗は寸延びて稻となり、その稻の葉が吹く秋風にさゆらいで居る。五句に對してはこゝは他動詞として「そよがせ」とあるべきだ。

重 つひ昨日植附をしたと思つてゐるのにいつの間に夏去り秋立ち）稻葉をそよがせて秋風が吹くやうになつたことか、（さても月日のたつのは早いものだなア。）

評 田園生活に於ける鳥兎匆々の感じが何の飾りもなく素朴に、太い線で描かれて居る。都人ならば「昨日こそ小松曳きしか」などいふ處である。土岐哀果の氏「佇みて」を見ると

知らぬまに日はだん〳〵にたつて行く隣の巡査と心やすくして居れば

といふ意味のものがあつたが、此は月給取の烏兎匆とである。自分もかつて狂體の腰折として

知らぬ間に日はすん〳〵とたつて行くワイシャツよこれカラ洗ふ間に

など云つたことがあるが、蓋し腰辨の烏兎匆々觀とも謂ふべきであらう。處で農村に居を占めて、いさぎのよい田植歌を聞いたのはつひこの間のことで、やがて一番草・二番草・三番草・上草と進むと花の香がぷんとして、見る〳〵穂ぐんで來ると、もう苗とは謂はぬ、一人前？　否一本前の「稲」といふ。それに所謂金風が颯と吹いてきて全く天下の秋となるとは農村といふ場所柄だけに雅味が多い。それがこの詩の生命である。商家の町に秋が來て急に誓文拂に客を惹くビラを貼りつけるのと比べて遙かに詩致に富んで居る。餘りに拙咏を出すのは恐縮だが、

秋風は幾千町田の稻吹きて舞へと強ひられ鴨脚樹に舞ひぬ

といふのは萬頃の黄金の波によつて、金色燦たる秋風が更に掉尾の活動として、銀杏の黄葉を振面白く黄翩々と散らしたといふつもりで、秋の姿の秋らしい姿致を稻葉の風から銀杏の風と眺めたつもりであるがそれがこゝの下の句に似て居る。さてこれが類咏としては新撰萬葉下に、

いつの間に秋穂たるらむ草と見し程いくばくもいまだ經なくに

とあるが、理りすぎて面白くない。又貫之集に

植ゑし袖いまだひなくに秋の田をかりかれさへぞ鳴渡るなる

とあるのは四句に秀句を入れ、時間に幅をひろめて、こゝのが植附から稻葉までを採つたのを、これは植附から刈入まで採つて技巧には數歩の長があるが自然味はこれよりも減ずる樣に思はれる。

一七三　秋風の吹にし日より久方のあまのかはらにたゝぬ日はなし

考　四句　元・筋・行　あまのかはなみ

講　七夕祭の事　支那の傳説に十月七日牽牛・織女の二星天漢に交會するに烏鵲翼を擴げて此が橋となる。因てこの夜食饌を供し、富を乞ひ、壽を乞ひ子を乞ふの風俗ありと（西京雜記・事林廣記・開元天寶遺事等）我邦の神話には高天原朝廷に於て、天照皇大神の織機殿に奉仕する女神に棚機津媛といふがありこの高天原には八百萬神の會合等に宛てられた天ノ安ノ河といふがある（記紀以下多くの載籍あり）この二つを混線して天ノ安河即天漢とし、棚機津媛卽織女星として我邦「乞巧奠」の行事が始まつた。孝謙天皇天平勝寶七年七月七日が起元である。段々その祭りが整ほるにつれては時の棚津物を供へ、竹竿に色紙短册をゆはへ、夜通し燭を點じて琴を彈じたり神慮をすゞしめる業をしたり、庭先に盥をおき水を張つて二星の影を寫し、女子は手藝について熟達を祈れば三年以内に必ず一事かなふなどもいふ。巧を乞ふ儀式即ち乞巧奠といふのである。王朝以後は益々盛になつて歌集秋の部にはきつといくらかの七夕の歌が入つて居る。もと〳〵男女兩性の星の戀を擬人して詠むのであるから、その歌多くは戀歌の變體のやうなものになつて居る。本集も亦この一七四から一八三まではこの種の歌である。始めから切實な生活感から出たものでないのだから一種の遊戯文學として看るべきであらう。

この七夕祭は乞巧祭とも謂つて今も殆ど全日本に亘つて行はれて居る。優美な、女性らしい王朝趣味――大きくいへば日本趣味の一つとして、是非保存したいと思ふ。斯くいふ著者などは貧家に育つて大規模の星祭は知らないが、それでも六日の朝は早くから里芋の露を椀に受け、學校で先生に手本を書いて貰ひ、青笹を切つて來て、之に五色の色紙を横に八つ折に切つたものに、拙い字で歌や句を書いたものだ。先生が書かれた手本といふのは尋常小學一年には到底わかりさうもない文句で「お前方が大きくなつて賢くなつたらわかるのだ。マアそれまでは唯この通りまねて書いてをれば可いのだ」といふので、

二星相逢今宵天
七夕天の川

竹竿頭上願絲多
七夕のとわたる船の梶の葉に幾秋かきつ露の玉章
織女は今や別るゝ天の川かは霧たちて千鳥なくなり

など、今にして思ふと種の出處も明瞭なもの（期咏・古今）を、有がたいお守札のやうに戴いて歸つて、芋の露の雫を硯に受けて丹念に書き流しまだ澁氣のとれぬ青柿や粟の穗や芋や茄子や小豆飯を供へて賑々しく祭つたものだつた。六日の宵祭から始まつて七月一日をおいて八日の早朝村の谷川の下手まで流しに行くまで、あの頃の心持は、かう書く中にもあり〳〵と想ひ起される。

然るに大正十一年當地に着任して見ると、當津輕地方の七夕祭といふものの一風變つて珍しいには又驚いた。中にもこの弘前の俄武多祭（七夕祭）といふのは恐らく天下一品であらう。地雷也・綱手・大蛙丸・朝比奈・岩見・素盞嗚尊から水滸傳・三國誌などに見られる武勇譚の主人公を立派な北齋流の肉筆で描いた大小百餘の雲漢（大燈籠）を隊伍堂々と舁いたり曳いたりして洽く市内を運行すること連夜七日に亘り、全市を擧げて不夜喜見の偉觀と化する。傳へ云ふ。往時田村將軍旗鼓を鳴らして虚勢を張り以て蝦夷を擊退しめたく凱旋することが出來たので、その吉例に倣つてこの行事が始まつたものだと。何にしてもかうした七夕祭は南の國にも中部地方にも見られなからう。本集の註釋とは何の關係もないが、事の序に一寸紹介しておく。

あまのかはら　天之河原、銀河とも銀漢ともいふ。實は無數の恒星の群で、夏の夜は夕涼などでよく見る機會がある。丁度銀砂子を蒔き散らしたやうになつた星座の脈がそれである。

講 この歌は假に織女の心になつてよんだもの。み空に秋が立つて、秋風が吹きそめるとはやがてわたしは毎日々々あの天の河原にたつて我が脊の星の來ます、七日の日を待ちこがれて居ります。唯の一日だつてあの岸に立たぬ日とてはありません。

評 この種の歌の中。古雅の調に屬する。二句と五句とに「日」が重なつて居るが、それによつて待つ戀の切なさがよく表れてゐるから、後世所謂同字の病ではない。これの藍本は萬葉十秋雜歌七夕二〇八三だと思ふ

秋風の吹きにし日より天の川瀨に出で立ちて待つと告げこそ（この歌人丸・家持・赤人の三集とも入つて居る、以てこれ等家集の粗雜さがわからう

一七四　久かたのあまのかはらのわたし守君わたりなばかぢかくしてよ

考 下句　筑・爲・俊「君がかへらば船がくれせよ」

六帖一七日の夜　同。

清頭に「在人丸集」今のにはない）

三、左註「又はきみかかへらはふなかくれせよ」（三本共無）

講 わたし守　渡しの番人卽ち船頭此句下に「よ」を補つて解く。君　牽牛星のこと（織女星の心になつていふ）かぢ　舟を操る櫂、但しこの語は廣義で、船を漕ぐ櫓にも機にも棹にも云ふ。かくしてよ　の「てよ」は現在完了の六活命令法だが、命令とよりは寧ろやさしく希望する意があり隨つて何となく女性的口吻になつて居る。

講 これも織女の心になつて咏んだもの。コレ〳〵天の河原の船頭の衆え、我せの君の彦星樣がこちらへ渡つていらしつたら、二度とお還りないやうに、かぢをばちやつと隱しておいて下さいな。

評 天上の戀を地上に思ひよそへたもので、情痴のあどけなさが特徴である。宛然來客の下駄を隱して更に一杯を强ひると似た格である。萬葉十秋雜歌七夕の二〇八八に

吾が隱せる機棹なくて渡守船かさめやもしばしばありまて

とあるは同趣の想だが洗練されてゐない。寧ろこれから思ひついたらしい兼輔の次の詠が宜い。

たなばたを渡して後は天河浪高きまで風も吹かなん

一七五　天川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

考　二句　清・相・顯「もみちをふれに」清頭「御本ニ橋ヲ直テ船トカケリ」

清頭「實方集云、あまのかはかよふうきゝにことゝはんもみちのはしはちるやちらすや、若此歌を本にしてよめるか、然者猶橋といふへきにや、彼人僻事知哉」

六帖一　七日の夜　同。

評　天川　下に「にては」を補ふ。もみちを云々　紅葉を橋として往來に便ずる故にや、「船」を「橋」にすると流の幅の廣さを增すやうに思はれるが、「風のかけたる柵」などと同樣唯美的な橋渡しとして、秋の景物の主なる紅葉をとつたものであるから、支那の傳說には鵲の橋といふけれども、これは紅葉の橋を渡すかと、この傳說を土臺にふまへた作句と見たい。たなばたつめ　棚機津女、例の支那の織女星と我國神代の天棚機姫神とを取りまぜた想像の女神、「つめ」の「つ」は體言をつなぐ體言助詞で「の」と同義で棚機の姫神といふ。それを「つめ」は「つま」といふなど解いたものは無論誤である。（「つめ　は「女」で轉して「とめ」となり延びてとうめ（塘）となり「を」をつけて「をとめ」となるとも想ふたが、この語の解としては矢張「つ」は體言助辭と見るが妥當であらう）

評　天の川では紅葉を橋として渡すためであらうか？　あれあの樣に棚機樣が秋を熱心に待つて居られるのは。

評　七月七日は初秋匆々で紅葉には遙かに早いが、秋といへば直ぐ紅葉を思ひ出す程のものだから、成程この美しい男神女神の橋渡しには紅葉ならば美しく相應しいと思つての立意である

一七六　こひ〳〵てあふよはこよひ天川霧たち渡りあけずもあらなん

考　四句　行「霧立ちこめて」

新撰　同

評　こひ〳〵て　焦れ〳〵て、あふよはこよひ　妾（織女）が彦星の君に逢ふはいよ〳〵今宵なるよの意それを「こよひ」と云ひ切つて述語の用言を省いたので、如何にも思ひ詰めた戀の成就に力と熱をこめた心調が表れて居て宜い。天川　「コレ天の川よ」と天の川を擬人して呼びかけたもの（こゝは「霧よ天の川に立ちわたり」とも「夜よ天の川に霧を立てて……」とも解き得るが本文のが普通と思ふ）あけずもあらなん　世間一帶は夜あけになつても、お前の處だけは明けないでゐてほしい。「なん」は希望の助詞。

評　これも織女の意中を咏んだもの（去年の秋から）焦れ〳〵た彦星樣との逢瀨はとう〳〵今宵とまで近づいて來た。そこで天の川よお前の川面に霧が一杯にたちわたつて外が夜明になつても、この川だけは夜明けにならんやうにしておくれ。（さすればいつ〳〵までも樂しい逢瀨が續けられようにの）

評　本集七夕の歌の中一番秀咏だと思ふ。激越の調が何のあらはさもなく上品にして而かも切實味が出て居る。戀三の六三四、卷末みちのく歌の一〇八七など皆同一標型であるが叙情稍露骨に失して居る。更に幕末高杉晋作が

三千世界の鴉をころし主と朝寢がして見たい

に至つては志士の餘技としては面白いが、いよ〳〵露骨になつて殺風景ときへ思はれる。

殊に第二句の體言どめ「あふ夜は今宵」が持つ情味は啻に戀の兒のみならず、あらゆる歡喜の絕頂に當面する人々の心を簡結痛切に云ひ得て妙である。

寛平の御時なぬかのようへにさぶらふをのこども歌たてまつれと仰せられける時人にかはりてよめる　とものり

一七七　天川あさせ白浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

秋　上　一七六・一七七

考　詞　友則集　寛平の御時殿上の人々歌よみけるに人に代りて詠める」

兼輔集「七月七日歌よみける所にいきて」

三「……おほせられける時に……」三本共無

元「寛平御時に、七日のゆふべに、さぶらふ男ども、歌たてまつれと仰事ありけるに人にかはりて……」

顯「寛平御時に、七日のようべ……さぶらふものこども、うたたてまつれとおほせられけるときに人にかはりてよめる」

四句　伊勢大輔自筆本　清頭・顯引用「わたりはつれば」

友則集「わたりはてぬに」

六帖一　七日の夜　同。

考　あさせ　淺瀬、彦星が渡し待つ間もぢれつたいとして、天の川を徒歩渡りする爲めに淺瀬を選つて渡る樣に見たてたことば。白浪　秀句で、淺瀬がどの邊にあるか知らぬといふことと、淺瀬は深瀬よりも白波が立ち易いからその淺瀬の目じるしの白波は何處とさがしつゝとなかけたもの。わたりはてれば　渡り切つてゐないのに、渡つてしまはないのにそれに。古註にこの句の意味が不明だといふので「考」にあるやうな別種の形が傳へられた。金子氏は、がこの「れば」を心得かれて、

舊くれど又はぬにと說いたのはわるい。これは四五句の間に詞を補つて聞く格である。卽ち「渡りはてれば夜の明けむとも思はぬに明けぞしにける」と續けて見るがよい。萬葉集卷八に「秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝明の風は肌寒しも」とあるも同格である。

と說かれたのは非常に精しい。

これは古文の一體として「云々したら云々だつたら」といふに行きしかば、渡りしかばと樣に、後世ならば「行つたから、渡つたから」といふと同一の形があるのから推して「渡りはてれば」は「渡りはてれ」で「渡り切つてゐない」の意にあつて「ば」は前の「かば」の「ば」と同樣に「さうした事があつたらその矢先に」といふ程の意で、結局後世の「ないのに」といふのに「れば」と云つたものではなからうかとも思ふ。　山田孝雄氏も奈良朝文法史に、

かゝらはしもよ行くへしらねば　（萬　五）

目にし見えねばいきどほろしも　（紀　八）

ひとへだにいまだとかねばみこのひもとく　（紀二七）

などの實例をあげて、終に

「これもぬにの意に解するが普通なれど、古意は云々の事を未だ云々せずと云ふ事實ありて、之に對して爾下に云ふ如き事情存す」

との意だと云はれた。丁度前掲金子氏の說を抽象的に輪廓づけられたやうな說き方だと思ふ。

考　これは牽牛星の心になつてよんだもの。（天の川の渡守の來る間も待遠しく徒歩渡りにとおりたつたが）勝手不案內で白波たてる淺瀨はどこかとあちこち辿り辿りしてゐる中（秋とはいへど夏くれてまだ日も淺い短夜は）とう〳〵渡り切らないのにあけてしまつた。（あゝわびしいことだなあ）

考　地上の失戀を天上に上げた着想で、これも七夕を咏むについて一つの趣向ではあらうが、餘情があまりにわびしくて七夕を稱へる歌としてはふさはしくない。併し契沖の評に、

凡星合の歌一すぢならず。或（は）ひこ星天河をわたるにむかへ船にのる。或はたなばたかさゝぎの橋よりわたる。或はたなばた橋をわたす。又かちわたり、又或は天川わたりはてずしてあけぬとよみ、或は思ひのごとくあひて歸るなどよめる、たゞ風情に任する事なればとかくよむと聞えたり。

とある如く、これも七夕歌の一體であり、殊に二句の秀句わざとめかすしてよく一首に活いて居る。必ずしもそれから暗示せられた譯でもあるまいが、同趣のものに萬葉十秋雜歌七夕二〇七六、

天の川瀬を早みかもぬばたまの夜はふけにつゝあはぬ彦星

おなし御時きさいの宮の歌合のうた　藤原おきかぜ

一七八　契りけん心ぞつらき七夕の年に一たび逢はあふかは

考　詞　興風集「寛平の御時の中宮の和歌合に」
三一おなじ御ときの……」（三木奏部）
元「おなじ御時の后宮の歌合に。」
作者　筋・古典本「藤原興風」
五句　元「逢ふかな」
六帖一七日の夜・寛平歌合夏二〇右同戀四右・卅六・新撰　同。
新萬下「契兼言緒曾都良牟織女之年丹一度逢者相革」

集　契り　堅く約束をかはすこと。けむ　は過去と想像の結合で……たであらうとの意、漢字では同訓異字の「ちかふ」の處に心に誓ふのは　矢　日約束は　盟　證據をとって堅く約束するのは　誓　神かけて契るのは　契

とある。つまり「堅い約束をかはしたであううところの」の意。二星が年に一度相逢はう。度數はたった一度だが永久にこの契りを違へまいといひつがへたものと想像したことば。心ぞつらき「つらき」は「つれなき」の約、氣づよいこと、冷酷な、洞欲な、餘りあつさりし過ぎて居るなどの語が近い。逢ふは逢ふかは（一年たった一度）逢ふなんてことは「逢ふ」といふ中に入らうか、入りはしない。逢ふが逢ふにならぬではないか。

評　一年にたつた一度逢ふは逢ふと云へようか？　それだのに始め牽星に逢つてさうした契りを込めた織女の心は思へばつれないことではあつたわい。

評　七夕の戀を、殊に女星に重心をおいて第三者の位置から批評したもので、さうした閑事に想像を逞しくするところが詩趣である。五句の疊句殊に諧調。

なぬかの日の夜よめる　凡河内みつね

一七九　年ごとに逢とはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける

考　詞書・作者　元「七日よめる　躬恒」
二句　元「逢ふとはすれ。」
下句　六帖一本「ぬるよの數ばすくなかりけり。」
躬恒　上初の秋・六帖一　七日の夜・新撰　同。
寛平御時后宮歌合夏二十番の左右一つがひあつて次にこの一首がある。誤つて入れたものではながらうか？　清頭にも在貞女歌合又在寛平中宮歌合不書」とある。

集　逢とはすれど　逢ふことは逢ふけれども、（「逢はうとはするけれども」よりは確實性のあるいひ方）。ぬる　寢る。こゝでは「逢ふ」とさして變らないが、一句と重複をさけて詞を變へたものである。

評　織女は毎年々々彦星の君に逢ふは逢ふものの本當にゆつくりと打解けて共寢の樂しみをすることは、ホンに少いものだなあ。丁度今夜はその當夜だが、一夜あければ早やおさらばであると思ふと、どうもそんな氣がしてならない

評　愚考此は七夕の戀を咏んだものでなく、これと以下の二首とは七夕を引合せにして我戀を咏んだものなのを誤つ

てこゝに排列せられたものではなからうか？　つまり逢瀬稀なる男女の何れか、自家悶々の懐を吐いて

毎年々々逢ひたい〳〵で年月を過すが、満足に媾曳した夜は幾度あつたらう。丁度今晩祭る七夕様のやうな戀だなあ。

といふのであらう。つまり「七夕に寄する戀」の歌であらうと思ふ。但しこれの本歌になつてゐる、萬葉卷十秋雜歌七夕の二〇七八

玉葛絶えぬものからさぬらくは年のわたりにたゞ一夜のみ

は勿論七夕の戀を歌つたものである。或はいふ。年にたゞ一度逢ふやうな人間の戀があらうか？　と、それは誇張法の何たるを解しない人の言草に過ぎない。人目の關や義理の關に折角の契りも中垣高く一夜を千夜と戀ひ焦るゝ双思の戀にとつてはその焦心を訴へて「ぬる夜の數ぞ」といふは決して無理ではあるまい。まして今日今宵七夕の夜といふではないか。

一八〇　七夕にかしつるいとのうちはへて年のをながくこひやわたらむ

考　なし。

評　かしつる　貸しつる。貸しつけた、つまり手向けたとか供へたとかいふに當る。貸しを架しの秀句にしたとも想へないし、外の神と違つて、清淨無垢の新しいものでなく手馴れの衣服調度を手向ける戯事めいた行事だから貸すといふ（景樹）と解いたのもどうかと思ふ。雜上九二四にもこの語がある。開元天寶遺事の二十に

宮中以錦結成樓殿、高百尺、上可以勝數十人、陳以瓜果酒炙。設坐具以祀牛女二星。嬪妃各以九孔針、五色線向月穿之。過者爲得巧之候。動清商之曲。宴樂達旦。士民之家皆傚之。

などが乞巧奠に五色の絲を手向ける典據的記事としてよく引かれて居る。七夕にかしつる糸の　は下に「如く」を入れて、丁度三句の序詞のやうに活く。うちはへて　「うち」は接頭語延べて、長くのび〳〵して。年のを　年月のこと「緒」といふのは上の「糸」の緣語でもあり、又凡て長く續くものを息の緒・魂の緒・心緒・別緒・愁緒などいふ類でもある。こひやわたらん　戀ひや亘らん　「や」は疑問と解くが普通だが疑意は「ん」に讓つて寧ろ咏歎の「よ」と同じやうにきいて居る。亘る　は年月を經過する。

評　棚機に供へた絲のやうに、この後幾月幾年を長く逢ふ瀬もなくて、戀ひ暮らすことであらうよ、ああ、

評　之を飽くまで乞巧奠の歌として

七夕に供へた絲のやうに長く引繼ぎ私の手わざが上手になりますやうにと御願ひ申しましようよ。

と様に解くことは道理上筋はよく通るからそれを秀句にしたとも想はれるが、斯種のことは「七夕」といふ語に當然含まれてゐて今更歌に表すまでもないことだから、前にもいつた通り只ひたぶるに、我戀を七夕に託して述懐したものとりたい。

題しらず　　そせい

一八一　こよひこん人にはあはじ七夕の久しきほどに待もこそすれ

考　詞書　素性集「七月七日ひぐらしを」

作者　相「よみびとしらず」

四句　素性集「久しき事に」

結句　元・筋・六帖「七日の夜・素性集「あえもこそすれ」

新撰　同。

評　こよひこん　今宵來ん、この七夕祭の宵に私に逢はうとて訪れて來ようとする。あはじ　逢ふまい。「逢ふ」とか「見る」と

か「契る」とか「なびく」といつた風のことばはこの期に發達した情事の朧化語で「逢ふ」といふのも今日吾々が名刺をつき出されて「ではどうぞお上り下さい」などいつて會見するやうなあつさりしたものでなく「處女で入つて女になつて出る」といつた風の戀愛的會見若くはそれに近い媒介と解すべきである。七夕の久しき程に　七夕の如く、一度逢つては又逢ふまでに一年もかゝるといふやうにながい間「程」は時間。待もこそすれ　これは考にある諸本のあえもこそすれが宜い。肯え、あやかる、それに似寄つたことになりもしよう。といふので本文のまゝでも「待つてゐなければならぬ樣な苦しい破目に陷らう」として意味は聞えるけれども、文字のまゝに譯するなら寧ろ先方が「待ちもこそすれ」となる。

譯　今宵私に思ひをかけて逢はうといふ人には、私はあひますまい。(何もその人を憎いといふのではありませんが)今晩祭る七夕樣が一度逢うたら長いこと切ない思で待ち焦れられる、あのやうな戀にあやかつては嫌ですもの。

評　七夕の夜情郎慇懃を通じたのに對して、女の方は當夜の行事もどきに「好きで嫌ひだ」といふ程度に輕くすねた返しであらう。七夕を儆うての思はせ振り實に巧緻である。これを文字通にとるとこの一首によつて、てんで相手には逢はない樣になるが、前々にもあつた通り、どうせこんなことを謂つて拒んだり、すねたりするのが應酬の興味なので、之を正直に肘鐵砲の代用歌などと想ふのは早計であらう。

此に近い歌は拾遺十七、雜秋一〇八三

圓融院の御屏風に棚機まつりしたる所にまがきのもとに男たてり　　閑院

たなばたのあかぬ別もゆゝしきをけふしもなどか君がきませる

といふのである。又後撰五秋上二二五に、

源昇朝臣時々罷り通ひける時にふむ月の四五日ばかりに七日の日の料に裝束てうじてといひつかはして侍りければ　　源むねゆきの朝臣

逢ふことに棚機つ女に劣しくて裁縫ふ業はあえずぞ有ける

もこれから派生した着想で、又この歌に相當する散文は源氏空蟬雨夜の品定め、左馬頭の話した指喰の女木枯の女の終の頭中將の評言などが適例であらう。

なぬかの夜のあかつきによめる

一八二　今はとてわかるゝ時は天川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

考　詞書　宇于集「七月七日曉によめる」

釋　今は　下に「別るべき曉とはなれり」と補つた程の氣味。ひぢ　濕ぢ、ぬれる、

譯　牽牛星の心になつて、後朝の訣れをよんだもの、サアといつて(名殘惜しくも)わかれを告げて出かけると、まだ天の川も渡らぬ先に早や袖がぬれた。名殘をしやの泣きの涙にサ……

評　川を渡つてなら濡れるも無理がないがこれは又どうしたことか？と、訝しむところが餘韻となつて居る。さう大した歌ではない。

やうかの日よめる

一八三　けふよりはいまこんとしの昨日をぞいつしかとのみ待わたるべき　　みぶのたゞみね

考　詞書・作者　元「八日よめる　忠岑」

六帖「みつね」

初句　忠岑集「今よりは」

秋上一八二・一八三・一八四

語 けふよりは　今日（七月八日）御身と訣れたならば、これからは。いまこんとしの昨日なぞ　今にやつて來ませうから、その來年の昨日（即ち七月七日）なば、こゝは「いま」としては「おつつけ、やんがて」などに相當して織女が自から強ひて慰めた心持をあらはしてゐるが、「またこん年の」とした方が明瞭でもあり一首の情調にもよくうつると思ふ、いつしかとのみ　いつ來ることかとばかり「し」は強意。

語 織女の心になりすました歌。あなたと訣れて今日からは又もや來年の昨日をば、もう幾日〳〵とばかり一心に待ちくらすことでありませう。

評 前に牽牛の訣れの歌があり、こゝに織女の見送りに立つての悲しい述懐があり、これで七夕の歌をとぢめた排列は例によつて撰者苦衷の存する處、誰如何にせん忠岑のこの歌といひ、宗于の前の歌といひ、唯一節の巧を見るだけで情味の渾然掬すべき點がない。

題しらず　よみ人しらず

一八四　このまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり

考 二句　清「おちたる月の」
新撰「おち來る月の」
行「もりたる月の」
一本「おちくる月の」
小町集・六帖一「秋の月」

語 このまより　木立の間から、秋の木立は、大方の木々枝々木の葉おちつくして疎なので月光の洩れることも一段である。もりくる月の　月とはあるが月の光である。洩れてさす月の光、之を「おちくる」としても宜しいが、語感からいふと作者の眼「もりくる」は空を仰ぎ「おちくる」は地を俯し視てゐるやうに思はれる、藤原清輔の秀咏、

冬枯の森の朽葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ

を見てもさう想はれる。心づくしの　心のたけを盡してあらゆる物思ひをさせるところの、簡單に言へば色々と物思ひをそゝる、秋はきにけり　秋はもうやつて來たなといふ感じがしみ〴〵する。

評 木の間から洩れてさす月の光を見ると、あの色々と物思ひをそゝる秋はもうやつて來たなとしみ〴〵感ずる。

評 秋に對する靜かな觀照の詩境を歌つた好詠である。白河院嘗て夏の月をば、

庭の面は月もらぬまでなりにけり梢に夏のかげしげりつゝ

と咏ませられた。それに比べて秋の月は疎影落莫の木立を洩れて稍悽惋の致を帶びて居る。隨つて「心づくし」をば、「木立にさへられた月にあこがれて心をつくす」など解く（抄・顯註など）のはひどく誤つて居る。この月の影に見いる時、戯中最もひどく秋を痛感するといつたのがこゝの作意で、かの芭蕉が、

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

といつて黄昏・枯木・寒鴉の配合に見入つたとき、しみ〴〵秋の暮といふ氣分になつたと句したそれと、想開展の經路がよく似て居る。

一八五　大かたの秋くるからに我身こそ悲しき物と思ひしりぬれ

考 詞書　大江千里集「秋來只識二此身哀一」
猿丸集「秋の初めつかた物思ひ居りて詠める」

秋上一八四・一八五・一八六

四句　猿丸集「侘しき物と」

五句　元・筋「思ひなりぬれ」大江千里集「思ひしみぬれ」

句題和歌秋　同。

釋　大かたの　世間おしなべての。秋くるからに　秋來る故に、秋が來るによつて。悲しき物　悲しむべき境遇にある不幸な者。思ひしりぬれ　深く思ふ、切に思ふ。

釋　此世なべての秋が來るにつれて（人はさほどにもなく平氣なのに自分一人が悲しいので）我身こそは世の人の誰よりも悲しい身の上だとつくゞ〳〵思ひ知つた。

評　これは大江千里の作だと想ふ。彼が寛平六年四月二十五日に百二十首をよつて奉つた句題和歌（群一七九、七、一〇一〇——一〇一五）はしまひの自詠十首以外凡て漢詩の句を和歌譯したもので、秋の部の三に「秋來只識二此身哀一」といふのを譯してこの歌にしてある。原句と對照すると、それだけの範圍ではうまく譯されてあるが、原句そのものが一句だけでは句意がはつきりしない、作者がどういふことで悲觀して居るのか、それの片鱗が示されてあれば好咏とならうが、これだけでは晦澁と評すべきであらう。

一八六　わがためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけばまづぞかなしき

考　三句　爲「あられども」

結句　六帖六「物ぞ悲しき」

寛平歌合秋三右・新撰・新萬下　同。

釋　わがために云々　我身一つの秋といふ譯でもないのに、私一人が悲しがらさう爲めに來る秋でもないのに。それに、

釋　（秋は世の人なべての上に訪づれるもので何も）我身だけを悲しがらせようとて來た譯でもないのに、虫のなく音を聞くと誰よりもさきに悲しいので（まるで我身一つの秋かとばかり歎かれる）

評　虫語の喞々にそゞろ感傷を覺え幾分の自省を交へつゝも秋を歎いた聲で大抵前の歌と同型で、感傷の由て來る所は客觀にあらずして主觀に在りといふ着想である。尾藤二州が左記の一篇と多少相似てをる。

庭松秋深接二詩聲一　陰虫鳴盡月娑婆　遊人獨解聲々恨　寒入二客衣一今夜多

一八七　物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひ行を限とおもへば

考　二句　清「あきこそかなし」同題註に「御本ニモ　アキコソカナシトアリ普通ハアキソカナシキトアリ」

釋　物ごとに　ありとあらゆる物凡て、もみぢつゝ　紅葉しつゝ「もみち」は ダ行上二段とだ行四段との兩活用ある自動詞で木の葉が秋變色して紅や黄になることをいふ。それの二活が名詞に轉じて「もみち」となる。うつろひ行　「變る」と、とるのは可けない。凋落すること、散つて行くことである。變ることなら上の「もみちつゝ」で澤山だ。限とおもへば　……がどん底の落かと想ふと、とどのつまりは云々と樣な悲しいことになるのだと想ふと。

釋　秋はあらゆる物毎に悲しいものだ。それはあの木々の葉も紅や黄色に變りつゝ、結局は枯れて凋んで散つてしまふのが落ちだと想ふと（一事が萬事凡て痛ましい）

評　愚考、この歌、單なる秋の咏物としては凡作謂ふに足りないかも知れぬが、戀歌として見て價値のあるもので、又それが本當の作意ではあるまいか。離れ方になつた相手に向つて、紅葉の折枝にこの一首を結びつけて贈つたとすれば諷詠婉曲にして哀婉そゞろに對手を搖かす妙味がある。すると「物毎に」といふのも我戀、この木々、物として悲しからぬ

はなしといつてよく聞える。上述の解では「物ごとに」は「あの木もこの木もありとある木は」とたゞ木のことにしかとられない。その上次の歌とても戀に觸れたものである處から觀て、撰者の解釋も此と同様であつたものと想ふ。

一八八　ひとりぬるとこは草葉にあらねども秋くるよひは露けかりける

考　詞書　清正集「秋立つ日人に」

初句　六帖「臥して寢る」

釋　ひとりぬる　始めから獨り者が、獨りで寢ると解いては趣がない、待ち詫びつゝなるのにその人は來ず、張合なさのひとり寢ととる。床は草葉にあられども　（獨寢の）床はもとより草の葉ではないけれども、この句は下に契合感の題付が來ておちつくもので下に「にも拘らず草葉と同じやうに」と補ふ。よひ　夜といふも同じ宵と夜は當時同意に通用した例が多い。露けかりけり　露は名詞、それに「氣」といふ接尾がつき更に形容詞化する接尾語「し」がついて所謂「けく活」の形容詞を構成し、ラ變の「有り」と結合して形容動詞カリ活となり「露けくあり」の約「露けかり」となる露つぽくある。露でしめりつぽいものであつたなあ。

講　（待ち人が來ないでだと）我一人寢る夜床は草葉ではないけれども（まるで草葉と同じで）秋の夜になると露つぽくなるなあ。（但草葉におくは夜の露寢床におくは御身の飽き（秋）が來ての涙の露である）

評　この謂ひ方は後世江戸つ子の好んだ洒落と同じだ。

正月でもないのにおめでたい野邨だ、
鐵槍の川流れぢやないが一生頭のあがるめなしだよ、

と様な。若しそれ獨寢の孤寂に至つては人麿が「ながくしをを」の咏を始め戀歌には澤山類咏がある。中にもこれに近いものは

伊勢物語五十五段　昔男、臥して思ひ起きて思ひ、思ひあまりて、
わが袖は草の庵にあられども暮るれば露のやどりなりけり　（この歌新勅撰十七雜歌二の一一二五に「題しらず業平朝臣」とある）

これさだのみこの家の歌合のうた

一八九　いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限なりける

考　詞書　宗于集「物思ふころひとりごとにて」

元「是真の親王家の歌に」

作者　元・筋・行・相「よみびとしらず」

清「よみ人しらず」として頭に「惟貞親王文德天皇御子讀人不知字重疊如何」

初句　元「いつもとは」清「いつはとは」

新撰・小町集　同。

釋　これさだのみこ　是真親王、光孝天皇第二の皇子貞觀十二年源姓を賜はり、後更に寛平三年に親王宣下を受けて三品に叙せられた。いつはとは　一年の中何の季節が（物思ひをするか）といふことは、括弧中のことは下の句に任せて巧みに省いたもの。わかねど　分かねど、分からないけれども、四季常住に物思ひといふものは絶えないものだけれど。秋のよぞ　「ぞ」は強意の指定だから就中秋がと特に秋を強調すること　なる。物思ふ　風物推移に對して人事を絢交ぜての感傷。限なりけり　……の極と謂ふべきだわいと。

講　物思ひをするのは四季の中何時だとはつきりはわからない（大抵四季を通じて色々と心を痛めるものだ　が、併しそ

の中ででも、秋の夜は此上なく寂しく悲しい。恐らく物思ひをすることの最上であらうぞ。

評 白樂天の「大抵四時心總苦、就中斷腸是秋天」の和歌譯であらう。秋の夜は月に砧に雁にさては草葉の蟲の音や、妻戀ふ峰の鹿の音、琴の音通ふ松風の音など思ひをそゝる景物が一番多いから、この歌には實感味がある。英詩に所謂、

"Autumn is melancholy Sea on."

といつた風の歌である。

大和物語百三十九段に在原滋春が

いつはとはわかれど絶えて秋の夜をみのわびしさは知りまさりける

と詠んだのがある。これは「物名」で箕輪（みのわ）の驛名を詠みこむために叙情が淺膚なものになつて居るが、こゝのと等類暗合の歌である。又宗于集にも小町集にも同じ歌が出て居るが著者の管見では何れが正しいとも判定しかねる。多分は當時有名な歌として早くから人々に膾炙したものであらう、古今集讀人不知考には「いつはとて」と見出して伊勢の歌とある。かうまち〳〵な點から察して詞書も後人のさがしらではあるまいか。まことこの親王の歌合の歌ならば四撰家共に列席もすれば又後に模樣もきいて、作者を逸するやうなことは無い筈である。尙本集五四六にも類咏がある。

かんなりのつぼに人々あつまりて秋の夜をしむ歌よみけるついでによめる

一九〇 かくばかりをしとおもふよをいたづらにねてあかすらん人さへぞうき

詞書 元「神鳴の壺にて人々あつまりて、秋を惜しみけるついでに」

二句　元「をしと思ふを」　行「をしみするよを」

雜 かんなりのつぼ　雷の壺、宮中五舍の一つの淑芳舍の一名。壺は壺庭（つぼまりたる庭、即ち棟と棟との中にある中庭）のことだがやがてその建物たる殿舍をいふ。嘗てこの御殿に雷のおちたことがあるので雷壺といふとも、雷が落ちかゝつたからいふとも、雷鳴の時天皇こゝにお渡りになり侍衛の士をして鳴絃せしめられるからいふともあるが、五舍の中ひどい蟲かしい名稱である。

宮中五舍

昭陽舍　梨壺　　淑景舍　桐壺　　凝華舍　梅壺

飛香舍　藤壺　　襲芳舍　雷壺

秋の夜をしむ歌　秋の夜を愛惜する歌、秋の夜を鑑賞する歌、よみけるついで　よんだ時、ついでは、次手で、その際といふ意。今いふ何々したその序の片手間といふのではないと思ふ。かくばかり　此程までも、最大級の程度をいふ詞）をしとおもふよ　愛惜すべき夜、清風明月の良夜　をのにそれにと、前件によつて、後件をもどく意ある助辭。いたづらにねて云々　「いたづらに」は「獨り寢ることだ」などいふのは聞えない。このめづべき夜景をそしらぬ顏で寢てゐるといふので、「美景をもめづることなくして」が「いたづら」の内容である。人さへぞうき　この良夜の刻々に過ぎて夜あけとなることも物憂いのに、早く宵寢をしてつれなしづくりする人までもといふのである。この「さへ」は一つある上に今一つを對へて重いものゝ重さを輕いものを重しとすることに因つて表す ものだが、宵からこの雷壺に集まつてゐる人々の中、中座してこそ〳〵家に歸つた人があつて、その人達は勿論情ないがそれ以外の世間大方の同類項の人までもといふのだと解いたものもあるけれども、こゝは字面のみに忠實に縋ると、どうしても前述のやうになる。うき　憂き、愛想のないことだ。あまり感心しない仕打だ。位の氣持。

評 これほどまでに惜しいと思はれる良夜だのに（時は猶豫もなくたつて行くのは、くれ〳〵も殘念でならない。さう思ひつめたあげくのはてはこの景に背いて宵から寢床にもぐり込んでゐる人さへも、氣疎く、飽かぬ心地がせられるよ。

評 この歌、月とも風とも露とも蟲とも謂はないが、一首を讀んで殘る感じは、清風白露、草葉にすだく蟲の聲々、竿

さし渡る雁がねの列などに配して清皓百煉の鏡とも謂ふべき月のさやかな光景である。同じ躬恒の集に

あくるまで今夜の月をみてもあらでねてあかすらん人の心よ

とある。或はこゝの秀咏の素描歟？

更に思ふに、此はこの一座に洩れた作者やその座の人々の親しい一人を誘ひ出す風流の挑戰狀を見ると一段と妙である。「家になんかふすぼつてゐないで早くやつて來給へ。この面白い景色を寄寢する法があるか？」となる。又左の一段なども此と相通じたみやびである。

徒然草第三十一段

雲のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雲のこと、何ともいはざりし返事に「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〳〵しからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすゞ〳〵口惜しき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも忘れ難し。

題しらず　　よみびとしらず

一九一　白雲にはねうちかはしとぶ鴈のかずさへ見ゆる秋のよの月

考　四句　清・元・筋・行・新萬下・顯註「かげさへ見ゆる」
五句　新萬下「秋の月かな」
　　朝秋カ・六帖　秋の月・新撰　同。

釋　白雲に　唯「遙かに高い大空に」といふ程の意味。月明の夜の無色の雲のことだが、白雲は雁によせある雲としてよく歌によまれる。尙思ふに秋は半實、この白雲が多く、支那の季節色（シイエカラー）とも謂ふべきものも春は青、夏は赤、秋は白、冬は玄（くろ）となつて居る。「に」を「と」と解いたものは諾はれない。「に」は唯添加として雁に背景づけだもので、……に配せられての意である。（次の語釋參照）。はねうちかはし　白雲に對して羽搏きすると解くものは前の「に」を「と」ととつたものでよくない。又甲の雁と乙の雁とが互に羽を入れ交してと解くのも可けない。そんな二人三脚のやうなことをして大空は飛べるものではない。但下から見ると甲乙互に翼を入れ交してゐる如くに見えてといふのならば當らぬこともない。こゝは列をなして飛ぶ雁が甲乙丙丁交々に羽搏きをするといふのが平明であらう。かずさへ見ゆる　こゝを考にもあるやうに「かげさへ見ゆる」としたものがあつて、古來かず・かげ優劣論」とも謂ふべきやかましい問題がある。「かず」を主張する早いものはこの流布本を定めた定家で、その著餠案抄（本集古註の一つ）に、

此歌。かずさへ、影さへ、昔より兩說といふ。明月いたれるとき、物の影なきを本意とす。はるかにとぶ雁の數さへたしかに、みえんこそ月のあかき心にはかなふべければ、兩說ありとも數さへを用」

とある（この「影」は「蔭」の誤であらう）次に「かげ」を主張する早いものは俊賴で、その著無名集に

おろしりなる人は、此歌を「影さへとはいはれず月あかくとも、そらとぶ雁のかげ見ゆべからず、かずさへ見ゆといへるこそよけれ」といへり。是いはれなきこと也。かずとても見ゆべからず、共に見えざらんにとりては、かげさへといひてはいますこし月あかし云々

とこれを引用した顯昭も「影」をよしとし

「かずさへ」と執る人は謂はれなきことなり。

と謂つた。又この二つを折衷して、どちらでもよしといつたのは右の顯註や季吟の抄に引用する山戸莵田（やまとうた）集の記事である。

秋夜月といふ句を末に置いて歌よむに、一人は、影さへ」とよみ、一人は、かずさへ」とよめるが、まさりたれば、古今には其定に入たるにや。而古今歌に付てかずさへとあるはわろしかげさへと云げさへみゆる」とよめるが、まさりたれば、古今には其定に入たるにや。而古今歌に付てかずさへとあるはわろしかげさへと云こそよけれなどは論ずべからず云々（顯註）

秋の夜の月といふ句を末に置て一つは「影さへみゆる」とよみ、一つは「數さへ見ゆる」とよみて、上三句は此定にて侍れば古」

今には「數さへ」なまされたりと思ひていれたるにや勝負は人の心にまかすべしとこそおほせられしか（季吟の抄）

後の抄は顯註を引いたとあるが今日の活本顯註（國書刊行會本）には前掲の通あつてこの二つ多少記事に相違がある。そこで此等紛紛たる古人の糟粕――といつては失禮だが、そんな說には拘らないで、單に兩方の修辭的效果から考へて見ると、矢張右の山戸蒐田集とやらではないが閨扇を何れにあげて宜いか、判斷に迷ふ。まづ、「さへ」といふは上に困難なことがあつて、そのことをすら敢て實現し得ると持つて來るのが普通であるが「數」なよむと「影（姿）」を見ると何れが困難かといふに數の方だと思ふから、「さへ」との聯接の緊密の度からいふなら「かずさへ」の方が「かげさへ」よりは優れて居る。けれどもさういふことによつて生ずる作者の態度を考へて見ると「かずさへ」といふ方は無論與にうかれてのすさびではあらうが、飛び行く雁を瞬き一つせずに一羽二羽三羽と、まるで小學一年生が計數器の球でも算へるやうに見つめてゐるつまり理知的の態度に墮する。「かげさへ」ならば、漠たる觀方で大まかに行雁の遠景を眺めるといふだけで鑑賞的態度にふさはしい。するとこの「かず」と「かげ」とは「さへ」との聯接に於ては「かず」が優り、作者の歌境に於ては「かげ」が優り、互に一得一失あつて結局何れを優れりとも劣れりとも行司の團扇をあげ兼ねる。尙「かげ」を「蔭」として月光大空に照り、陰影地上に鮮やかなりとすれば一通は聞えるが、それはたゞさういひ得る位さやかであるといふ誇大的な修辭と觀るべきで實景ではないと想ふ。

「圖」白雲たなびく大空のあたりかはる〳〵羽ばたきして飛ぶ雁の數さへも一々よまれるほど澄みわたつた、秋の夜の月のさやけさよ。

「評」所謂有聲の畫といふもので、讀下直ちに一幅月明飛雁の畫圖を想像することが出來る。古來秋月の淸澄を具體化し得た歌として最も秀逸と推されて居る。譬へば「電はちらと光つてちらと消えて眞に刹那的な閃きだ」といつてもまだ電の瞬間性を讀者にはつきりと印象させることは出來ないが、

電や越人と二字書く間なき　越知越人

といへば、それであり〳〵と電の一瞬も見え作者の俳境も肯づかれる。こゝの歌も「秋の月はさやかだ、本當にさやかだ。本當に〳〵どう考へてもさやかなものだ」といつて見たところがその形容は抽象的だから、讀者には何の印銘をも與へないものを「白雲を背景に列をなして飛ぶ雁があり〳〵と見わたされる」といへば「さやか」とは一言半句いはなくても讀者には「成程さやかだなあ」と想はせる。實に詩なり藝術なりの眞髓に觸れ得た好咏である。それなら後世人の俗語そのまゝ「蟻が這うても分る」「蝨の數さへ分る」などいつてはどうか、これもさやかさは具體化されて居るが、そのまゝ金の蒔繪にでもなりさうな數行の過雁と蟻や蝨とでは品格の上に雲泥の差がある。」公忠集に、

左近衛少將とのにて秋の花を翫ぶといふ題を詠める

池水のも中に出て遊ぶ魚の數さへ見ゆる秋の夜の月

とある、は下の句これと同じだが、作者の歌境池の面と大空と一上一下の爲めに眼球の回轉にあわたゞしげな樣子が見えて面白くない。尤も此は一つには、

岸白還迷松上鶴　潭融可算藻中魚

の句によつて作意した故もあらう。俳句に月明を咏んだものには、

琵琶を抱く月滿面の美人哉　大江丸

白樂天琵琶行の美人を作成したものであらう。

尙この歌の作者前掲の山戸蒐田集には藤原伊衡とあり、讀人不知考には延喜の帝とある。」

一九二　さよなかと夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたるみゆ

「考」初句　元・筋「さ夜なかに」

秋　上　一九一・一九二